

特40

112

今古  
實錄

鼠小僧實記  
全

# 今古實錄

全

# 龍小僧實記

榮泉社印行

今古實錄序  
 我往古二千年文物  
 書歴史の多く兵  
 事を保する者  
 博識の徒出し  
 るのみ神を信  
 お至らん歎故  
 しを以てなり坊  
 る物數卷その事  
 榮泉社中の藏版  
 ならん此ふ於て  
 お序すると爾云

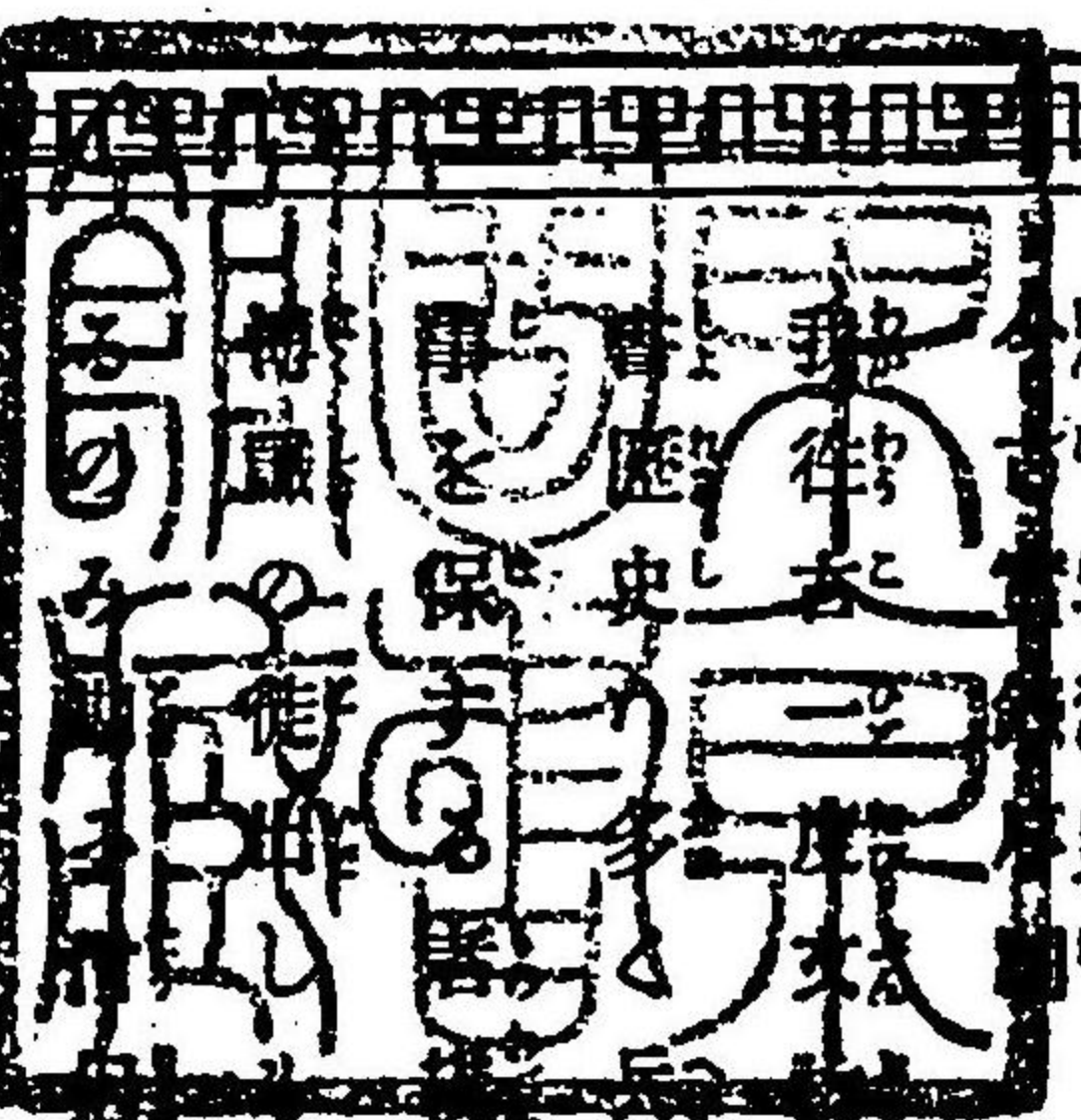
の端を開き稍盛  
 癸の羅り其存す  
 浮屠氏も過す近  
 あれど猶干才止  
 おくんば平家物  
 我國の軍記史略  
 お至らん歎故  
 しを以てなり坊  
 る物數卷その事  
 榮泉社中の藏版  
 ならん此ふ於て  
 お序すると爾云

明治十九年第四月

佛骨庵主

假名垣魯文更誌

明治十九年九月三十日内務省交官 510



の端を開き稍盛興の時と得しも中世の戦國乱離と極め古  
 我も羅り其存する者數部と開けり此年歴史文物も又廢れ學  
 ふ浮屠氏も過す近世足利氏以降元龜天正の頃まで武門ふ  
 あれを猶干才止む時なく文學たましく公卿武家も波及す  
 かくんば平家物語太平記諸軍記の編述今世も傳ふるなき  
 お至らん歎故我國の軍記史略も多く佛語を引く者ハ蓋し釋氏の手お成  
 しを以てなり坊間貸本と稱ふる俗書の今も傳ふるも是又僧徒の著述お成  
 る物數卷その事跡虚と省き最も實お近きを撰み尙は引証お依て校正全き  
 榮泉社中の藏版お於る世の貸本を網羅して略盡せるの功勉たりと云も可  
 ならん此お於て今古實録の題名目下世間お普きも亦宜ならずや以て簡  
 お序すると爾云

明治十九年第四月

佛骨庵主

假名垣魯文現誌

# 今古實録

全

# 氣小僧實記

榮泉社印行

鼠小僧實記上巻目錄

- 鼠吉兵衛捨子を拾ふ事
- 并幸藏生出の事
- 吉兵衛初次郎が助命を願ふ事
- 并鼠小僧上方出立の事
- 幸藏信濃屋女房を討つ事
- 并お秘密夫を引入る事
- 伊勢屋番頭内濟を頼む事
- 并幸藏悪幕の念を晴らす事
- 鼠小僧悪者へ付らるゝ事
- 并清兵衛夜盗の手引する事
- 鼠小僧吉岡村勘きの事
- 并伊勢参りと相宿する事
- 幸藏金子を奪はるゝ事
- 并幸藏お吉の妄想を夢見る事
- 幸藏途中病氣貫家を頼む事
- 并孝女を憐む事
- 幸藏大坂へ到着の事

鼠小僧實記中巻目錄

- 與助大太郎が悪業を白状の事
- 并次郎吉宿屋の亭主を欺く事
- 次郎吉金子と騙て水口を出立の事
- 并鯛の地獄尊由來の事
- 次郎吉首縊りを助る事并幽霊止めらるゝ事
- 次郎吉老女が家を忍び出る事
- 并吉岡村落着を聞る事
- 赤坂街道に兩賊旅人を殺す事
- 并次郎吉旅籠屋を騒がす事
- 亭主相宿の金子餘議の事
- 并兩賊旅人の金を取るゝ事
- 次郎吉大井川の逆浪を越る事
- 并鞠子宿よて危急と過るゝ事
- 次郎吉狐付と成事并徳助を討つ事
- 次郎吉山中の里を賑す事

并近江屋喜左衛門の事

- 鼠小僧淀辰の對面の事
- 并淀辰奇術を見する事
- 強盜淀辰素性の事
- 并初代淀辰右衛門に殺さるゝ事
- 三右衛門幸藏は家の手引する事
- 并鼠小僧織越の家を討つ事
- 幸藏大金を土中へ埋むる事
- 并三右衛門三ヶ條異見の事
- 幸藏次郎吉と改名の事
- 并お先圓覺寺の繁昌を告る事
- 三賊十生目村に到る事
- 并三太郎後家物語りの事
- 三賊圓覺寺へ忍び入る事
- 并住持を生捕る事
- 鼠小僧天井働きの事
- 并三賊穴熊が金を奪ふ事

鼠小僧實記上巻目錄畢

并庄屋徳助演説の事

- 孫太郎稻荷利生の事并次郎吉娘が身賣を聞る事
- 次郎吉お峯が身の上を聞る事
- 并金を隠して欠落する事
- 次郎吉江の島へ参詣する事
- 并七里ヶ濱にて盗人を救ふ事
- 次郎吉恨を忘れ恵を施す事
- 并悪者素性と語る事
- 三吉非を悔て古郷へ歸る事
- 并次郎吉品川へ泊る事
- 次郎吉宿屋の女房を頼む事
- 并お峯が父有家を尋ね來る事
- お峯父を諒む事并與左衛門後衛の事
- 次郎吉高輪へ所帯を持事
- 并父母の退轉を聞る事

鼠小僧實記中巻目錄畢

鼠小僧實記下巻目録

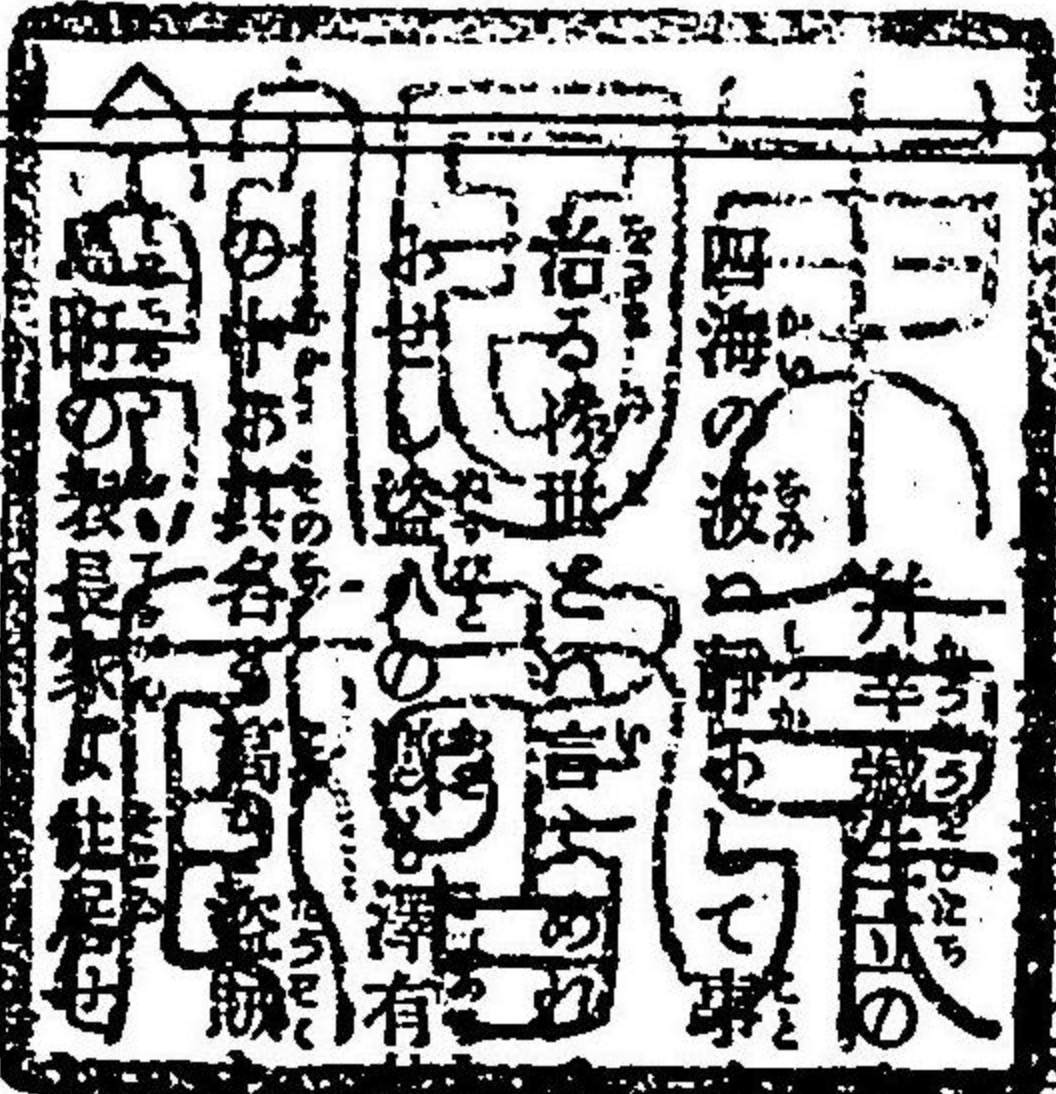
- 次郎吉途中大雪に遇事  
井親賣菊松を憐む事
- 花澤七兵衛因縁を助る事  
井鼠小僧廻町に夜盗の事
- 次郎吉酒店の難澁を聞事  
井三河屋へ再び忍び入金子を返す事
- 鼠小僧諸大名旅本へ忍び入事  
井藤堂家自賀組の事
- 次郎吉園ひ女の門まで様子を聞事  
井お園仔細を語る事
- 次郎吉植木鉢を出して賊を釣事  
井三右衛門が手下の逢事
- 淀辰新町遊興の事并藤子龜八小花の事  
○淀辰等罪に亡ぶ事
- 井三右衛門藤子を切て自訴する事

○次郎吉金藏お金子を與る事

- 井兩國にて親賣を誘引る、事
- 七兵衛身の仕合を語る事  
井鼠小僧大川へ飛入事
- 鼠小僧再び菊松に逢事  
井丸善の番頭物語りの事
- 次郎吉お峯に旅行を告る事  
井實父藤左衛門に逢事
- 藤左衛門立身の事并百兵衛夫婦身分の事
- 次郎吉次郎吉の自訴を聞事  
井三吉命に替て團を解事
- 次郎吉高崎の思五郎を頼む事  
井夢を信じて江戸へ歸る事
- 奥原九一郎鼠小僧を召捕事  
井次郎吉伊仕置落着の事

鼠小僧實記下巻目録畢

鼠小僧實記上巻



四海の波に翻りて事も落ふ鶴龜の千代万代と遊べるを  
 治る世の言のひも演の真砂の盡ぬともと彼譬喩  
 せし世の言のひも演の真砂の盡ぬともと彼譬喩  
 の中お各々高き處にあり夫が素性を尋るよ其頃神田豊  
 の師の教長家仕居せし紀伊國屋藤左衛門と云ふ者元  
 の佐々木家の浪人なりしが世渡る道に疎き故次第に零落  
 し果して今の營む業もなく漸々日雇杯をして其日くを  
 送るうち藤左衛門の或日の事女房に向ひ首けるに如何成  
 神の祟りや今の斯迄零落して三度の食も喰兼る夫婦の  
 前世の宿業と儲めもすべけれ其唯可愛き此幸藏思ひ出  
 せ去年の夏産れ出しの嬉しくあるも追々續く不仕合せ  
 是より親の手も置て愛目を見せん不便の至り捨子の上  
 の禁制なれど外は仕方あられに密に捨るやうよせん

然すれば情ある人直拾ひれて育てられ却て此子の幸ひ  
 となる事あらんと涙と俱に語り出れば女房も同じ貧苦の  
 憂思ひ此先とても情けあや願み少き瘦世帯なまじ我手不  
 養ふて果に路傍に倒るゝり又海川へ杯供々身を沈めん  
 も不便なればと夫の詞に打任せ合す乳も瘦細る母の面  
 影差眼く兒に捨らるゝと露知ぬ佛心ふすやくと眠るを  
 そつと手お渡す女房に此世の別れくと死別れより彌増る  
 實子今宵生別れあら悲しやと臥轉ふ心を察して藤左衛  
 門も其も張裂胸の中いと取がたく思へども斯て果しと  
 心を鬼よし未だうら寒き如月の子ゆゑ迷ふ宵闇に人目  
 を包む懐るよ稚子抱き行先へ夫と當處に無れども厩所の  
 羊の歩行して道歩せらで其處此處と捨る場所を尋ねつ  
 、只ある立派の商人の門へ捨置き其儘ふ二三間も隔れる  
 家の前なる天水桶に窺ふ身を隠しながら様子を伺ひ居  
 たりしは兒の肌寒くて聲立れど其家にての氣も付さりし  
 ヲ來りゝる人か目を附て提灯さしつけ進み寄り能く稚子

の顔を見て玉の様成この男子を捨子とせし能々の仔細  
有ての事ならんが我等お子供の無きこそ幸ひ天より授け  
賜しやとうち悦びて拾ひ上げ直懐るへと抱き入いそく  
其場を立去りぬ藤左衛門其家まで拾ひ呉んと思ひの外  
往來の人拾はれしは最本意なくの思へ共人の捨たる子  
を拾ふて喜ぶ程の者なれば悲くのせまじと思ふより其後  
る影を伏拜みて我家へこそ歸りける初幸藏を拾ひ上げ  
しに豊島町は程近き江川町に住居する吉兵衛と云者よし  
て鼠と御名を呼びなせる博奕打の親分なり其身の人立  
られて何不自由も薪木なる格子造りの派出構ひ其座敷  
の大きいある御阻火鉢は唐金薬酒また懸手は惣銅細磨  
上げたる身上も一六勝負の親分株二階あつて大形は六  
七人の食客が晝夜を分ぬ思ひ遊其全盛の言ん方なく又吉  
兵衛の女房も元はそれしやの上りよて姉ゆくと立られ  
る鬼の女房は鬼神と言へど拾ひ上たる幸藏をいと可愛  
りて早速は乳母を抱へて何くれと賢子の如く育てしは光

陰狂再押移り早幸藏も十二歳の春を迎ふに至りし其  
頃よりして博奕を見習ひ子分共と一緒なり所々を押廻  
し歩行よつけ性質利口發明めて子柄も人々勝れて好く殊  
に金銀を少しも惜まず湯水の如く蒔散して衆くの人々  
へけるよぞ終に其名も高くなり鼠吉兵衛の子成故鼠幸藏  
と云ふべきを年々経ぬ賢き故もや鼠小僧と呼せり  
然る處は鼠小僧も今ハ次第お者を好み廓通ひを始めし  
より自と金お差支へしや或夜一人瀬前邊をふらへ通行  
なしたるは呉服店もや相應お暮す者とも見受らるゝ家の  
表の戸を明て窺ひお忍び出る者あり幸藏是と見る處扱  
此家の手代も二人運めて吉原へ遊びは行のと察せしよ  
り跡へ廻て手早くも戸閉りあらぬ門の戸をそつと明て忍  
び入最大膽も土藏へ運入揚板を上げ穴藏の堅き錠をバ  
捻切らんと力お任せて引廻す其物音お此家の主人が目を  
覺しつゝ起上り土藏へ盜賊運入たり皆々出よと呼はれ  
若者より小僧まで棒と縄よと立騒ぐ其混雜を聞付て是ハ

大變と幸藏の早くも賊をそつと出て身を中庭に潜め居る  
は家内の者の藏の前へとや〜集り來りたれど若や賊め  
ハ刀物でも持て居ぬりと思ふより左右なく中へ入らせ  
ず只口々お伺るのみ彼方の店ハ一人も最早居らざる様  
子故幸藏店へ忍び行有合せたる寶溜の金を九兩と五六貫  
の錢を手拭よぐる〜巻以前の表の戸を明けて難なく外  
へ出しゆゑ此家の者一人も心付べきやうハなし是ぞ幸藏  
が自然と備へる盗みの手始めと知れたり

○吉兵衛初次郎が助命を願ふ事

并鼠小僧上方出立の事

彼吉兵衛の世話よなる食客の中ハ初次郎と云ふ者あり  
元此者の父と云へるハ福原重左衛門と唱へたる或る諸  
侯の家の中なるは鼠吉兵衛ハ其以前殆んど命お拘はるべき  
罪をバ助け救れたる大恩人の事なれば其厚恩を報はん  
と只管思ひ居し折柄其子息なる初次郎ハ廿一才の若者ゆ  
ゑ随分身持放埒よて遊女通ひをなすのみならず猶又武士

は有間敷博奕をなして裸体はされ終に納戸金七十  
兩を盗み取欠落せしが夫さへも何時の程より遣ひ果し身  
の備所なき儘お親重左衛門が縁を以て鼠吉兵衛お依頼り  
厄介と成て隠れ居しや或日初次郎ハ井戸端よて水をバ汲  
で居る折しも見覺えの有る屋敷の者ハ四五人通り掛りし  
よ早くも此方ハ目を付て逃隠れしを彼等も亦是ハ浮尋ね  
の初次郎ハ相違有じと思しよ吉兵衛の家へ付入て今此  
家へ初次郎と云へる者者走入たり彼お少しく用事あれハ  
直様是にて逢ひたしと云へハ子分ハ右の由を親分吉兵衛  
よ傳へたるは吉兵衛益々出來り貴君方ハ何方より來り  
給ひて又如何成浮用の筋のある事やと問ふは屋敷の者言  
ふ様我々ハ諸侯の探察掛りなるは彼初次郎と云ふ者ハ去  
年殿の納戸金七十兩を盗み出し其後更に行衛知れず依  
て殿ハお怒り強く容易ならざる事なれば我々共ハ手分  
して所々を詮査せし處今日討ち身付し故是非引立ねハ  
ならぬなり夫よ付ても彼が父重左衛門の胸中の其苦しさ

何計りぞ子として親を苦しめる不孝者の初次郎疾出すべしと懐中より捕縛出す吉兵衛の不意の事ゆゑ仰天なし先々待下さるべしと押寄めしが心の中さる罪人であるら此借濟す解みの行ず然の言へ親重左衛門殿の大恩受し此身ゆゑ今初次郎を彼等へ渡しなす命を取するの親重は對して義理立すと思案なしつゝ奥へ入り用筆筒より七十兩の金を拵へて取出し是よて助命を願はんど彼役人等の前へ出で其趣きを頼みし夫の兎も角其方の意見先初次郎を同道して直ち屋敷へ参るべし就ての大切の囚人なれば本繩迄より及ばずとも手錠を下して連行んと言ひれて吉兵衛も亦尤も初次郎を連來れば役人達の手錠を下し吉兵衛俱々引立て其屋敷へと急ぎ行き大罪人を縛りし由頭役人へ告たるより早速白洲へ呼出まなり一應調への濟し後差添人たる吉兵衛が私し事の初次郎を然る罪人との心付す彼是世話を致せし處今日計らる見出よて委細審悉承まはり賊は驚き右に付私し鐵の

初次郎親父重左衛門殿より探て大恩請し者ゆる斯る時こそ厚恩を謝しや度いへば初次郎が盗み取し金子の今日私しより上納仕つりい問何卒犯せし罪の所を許免あるやう願ひ度く然すれば重左衛門の勿論私しまでも何計り有り難き儀存じますれば借濟の汚慈悲を偏し願ひ奉つると涙と俱願ひけるに此時掛りの役人なる磯中權太夫の言ふやうの何様其方の所も何彼と仔細の有事ならん併し尋問ならぬ罪ゆゑ其金子の儀に此方暫く預り置く間右の趣き書面を以て願ふべしと有しり吉兵衛の畏まりて委細認め差出すを一應讀で權太夫の吉兵衛に對ひ其方の明日再び呼出すまで私宅へ歸つて相待居れ初次郎事の汚法なれば一先繋ぐべしとの差圖に吉兵衛の兎も角も汚慈悲を願ひ奉つると尙探返して願ひ置か我家へ歸つて其翌日同道人を別し頼み俱々屋敷へ連立て汚沙汰を待うち白洲へ呼れ重左衛門等諸儀は權太夫より言渡さるゝの初次郎儀大切なる金子を奪ひ欠落せし段上を輕ん

且又親の難儀を弁へす忠孝二つの道を欠く事其罪甚だ重くして助命の叶はざるの處折能くも上よて汚法事の在せられ殊も吉兵衛も重左衛門の恩義を謝せんと罷り出で心切成上への願ひ神妙の儀と思し召親重左衛門の承の汚暇又初次郎事の門前拂と汚評議の上の汚沙汰なり又吉兵衛が差上たる金子の汚取上の上淨金も相成べし右有難く汚受せせと聞て何れも有難く汚禮すて下りけるが吉兵衛の道ふ待受重左衛門等を我家へ連行き彼是厚く世話をしたれど重左衛門の初次郎が金子を取逆なせしより格外必痛したるよや夫等の爲お煩らひ出し逐日病氣の重りしを吉兵衛大お心配して醫師よ薬と一方成す介抱なすよ初次郎も七十兩の大金を償ひ貰ひし其上は斯許り世話となりけれや或日吉兵衛が打對ひ親重左衛門も長々の大病なれば至快の覺束なしと思ひし處万事の汚世話は此頃ハ漸次快氣も赴く容子重ねくの汚厚恩何の世より報すべきと泪乍らと禮を述べ夫より後の我と我身の放蕩を

悔悟して何時り本心よ立返り朝夕親の介抱より吉兵衛の身の事までも万事お氣を付私しかく最眞實しく御さ居しが重左衛門も年の爲みや一時ハ次第快くなりし病氣も再び重くなりて終に空しく成しお初次郎の歎き言ん方なく扱有べきよ非されば形の如く吉兵衛が野邊の送りをなさしめしが扱世の中の幸不幸昨日と替る人の身も替らざりし此方なる吉兵衛が家の賑ひよて晝夜の分ちも新玉の年立ちへる始めより博奕酒食と至盛なる中よも拾子幸藏の兎角よ家お静居す所々を遊び歩行しが四五日家へ歸らぬ故吉兵衛夫婦の狂氣の如く案じ暮して俱々よ彼ハ發明の生れなれば人お欺され遠國へ行くやうな事ハよもあるまじ然れば天狗杯お懼れしり此處の占ひ彼處の祈禱と日々の物入大方ならず彼初次郎の大恩ある夫婦の心配する事故食事も忘れて晝夜となく所々を廻りて幸藏が行方を尋ね求め兵衛の便りもあらされば斯く夫婦よ告たるお今の詮方泣けりうりの歸らめられぬ胸の中を

押沈めて居たりける夫と知らざる幸藏の自分一人て育ちし如く思ひ定めて我儘も先うら先へと遊び居し日且ある居酒屋にて獨り酒飲み居たりし相客の者の咄しを聞けは是も博奕打ちしき四五人連ひてありたる一人の男の言ふ様何でも今の大坂のあの流辰やあ勝入めへ手下も四五人もあり博奕者の親分じやあ世間隠れねへ人さう賈の大盗人と言ふ事で殿敷吟味ある處を何處を巡して凌ぐり知ぬやなり近頃の働き者だど云る噂を聞濟して幸藏獨り思ふ様遠き昔しの時代での熊坂長範石川五右衛門近代よての日本駄右衛門又神道徳次郎杯末世も知られし大盗人我も乗懸りし船なれば假令悪名なりとて名を隠さんと思へ其中々容易も出来ぬ事就ての世間の金銀の此節兎角不廻りよて金持彌々金を集め貧人次第も貧しくなり金持三分は貧人七分の實も懸然の世の中なれば我は是より力を盡して世は無慈悲なる富人の金を奪つて一面も貧しき人よ時散し安樂世界よして遣ら

然すれば我名も世も知られん去れども斯云ふ大仕事の後橋なくては成就せまじ幸ひ今聞流辰を頼んで望を果せし上生涯榮耀も暮さんと大膽至極志ざし其居酒屋を出つ懐中にある僅の金にてそこへ旅の用意をなし路用の道も持んと出掛りせし中我願ひどの言ひ出ら斯我儘も旅立ちさへ無頼親が案じられんと思ひ出して此方を振向き頼て歸つてお詫言せれば救せ給へと伏拜み流石不敵の幸藏も親の情も後髪引る、心を勵して足を早めて行程も早芝田町一丁目の角の處へ差り、りぬ

○幸藏信濃屋女房を討る事  
并お松密夫を引入る事

扱も鼠幸藏の今田町迄來り、りしお向ふの方より來りたる廿五六の中年増上着の小袖の結城縞は黒七子の通し半襟下着の小紋縮緬にて厚板の帯を和はり腰微醉機嫌のはんのりと櫻色なる其眼元の仇成姿も幸藏の生れ付ての女好き故一目見るより見惚つ、思はず跡を付けて行しよ或

裏店へ這入りたり此方の側りの氷茶屋へ腰を掛て休み乍ら若姉さん今此所を通て行た仇女何れ近所て評判だらふと餘所乍ら尋ねし茶屋の女ハ打微笑貴方も浮氣が有ますかと云れて幸藏笑ひながら氣なましまし非ず夫だりはんの眼の正月お庭の櫻で詮方なし併しあれハ團ひ者り但し人の女房うと再び問ハ女の言ふ様今のハお松さんと言ふ亭主持でハございます此節ハ亭主の信濃屋藤助さんハ毎歳の通り糸反物類と上州へ仕入し浮出ますつたので只一人ハて浮留主中と問ぬ事迄語るを幸藏聞て思案なし腰より矢立を取り出し用意の紙へさらさらと手紙の様成ものを認め懐中にして茶代を置き大きき厄介と其處を立出夫より浮殿山又ハ泉岳寺杯漫る歩行して日を暮し漸々入相の鐘を聞て先見覺け置し裏屋へ這入彼女の家を尋ね格子戸を明て内へ這入田舎詞の作り聲ハい些浮頼みやますと言へば女房お松が立出何處うら浮出なされましたと言ふ幸藏會釋して藤助様の浮宅ハ此方ハ私

しハ上州より参つた者委細の事ハ此手紙よて以前の手紙を差出せばお松の取て押戴さ是ハハ浮世話様ア此方へ浮世遊ばせと煙草の火杯愛想も出して尙も挨拶しなぐら手紙を見るよ上書ハ江戶芝田町信濃屋藤助宅とあり封を押切讀下せば

一筆中入ハ此浮方ハ年々上州へ参る節商賣物の仕入も付浮世話も相成る浮方ハ其上逗留中の浮家内方も浮深切ハ浮世話下されハ今度江戶へ浮用向ハて浮出成れば何卒ハ我等お替りて浮世中上べく定めし一日り二日の浮逗留ハ可有之とされハ旅籠屋へ浮出も賛成故我等方へ浮宿中浮離走なざるべく爾我等事の指を痛めいませ、代筆を頼みや送りハ與々も浮頼みや入いし

お松の

と認め有故お松ハ少しも疑ハず幸藏お向ひ扱ハ夫藤助よりの手紙よて委敷承知致しましたが毎度宿よて浮世話さ



まは成ますとの事、何卒上り遊ばせ様と始め替る  
 愛想お幸藏の仕濟したりと心の中より悦べと夫との言を  
 辭儀をして否是より馬喰町へ參つて宿をとりますと言ふ  
 をお松の無理に押し止め左様にて私し跡で夫お阿られ  
 ます故兎も角貴方一夜成とも何卒泊り下されませ嘸  
 草臥でござんせう何事遠慮より及びませせん先洗濯へ行し  
 つつと日和下駄杯貸與ふる幸藏の草鞋を脱ぎ折角の汚  
 深切左様なら汚厄介と成ませうと風呂敷包をお松預け  
 て洗濯へ行ければお松の酒肴の支度をなし歸りを待お程  
 もなく幸藏が立歸りて座敷へ通れば此方のお松の膳を拵  
 らへ差出して今日の憎生時化よてお口よ叶ふ物なけれ  
 ど先一ツと差出す猪口を幸藏受敷き尙町時又會釋して  
 手土産さへも持參らぬは斯様の事よて恐れ入る決して  
 汚掃ひ下さるなど言つ、受し盃蓋の酌の見初しお松が手  
 元貞を肴お心嬉しく相を頼めば此お松も少しの飲る様子  
 故是でい願ひも叶はん程を計りて猪口を納め飯もお松

よ盛せつ十分お腹を拵らへし後お松が二階へ床をのべ  
 サア休み遊むせと煙草盆杯持上るお幸藏の仕事の夜中  
 と心の中然様なればお先へ二階へ上つて床お臥し此  
 二階の奥中お明り取にや三尺四方の格子あるおど是宛  
 と此窓より密と下を差覗けばお松の邊りを取片付其處へ  
 自分の床をのべて悠々煙草を薫し居しが遠お屏風を立廻  
 して獨り寝いりし様子なり幸藏これを見濟して暫らく考  
 り居る折柄早二更とも覺しき頃入口の戸を剝くくと窸  
 りお叩く曲者あり幸藏聞て怪しみ乍ら又も格子より差覗  
 けばお松の無言ふてそつと起出門の戸を明ると頭巾あて  
 貞の定り見えね其年の十八九位の艶男入来るをお松の  
 手をどり屏風の中へ引入ながら二階の方へ指さしするの  
 治り客の有事を知らざる故と知れたり斯て二人の床の中  
 果敢なき夢を結ぶ様を見る幸藏の心の中此奴密夫と察せ  
 し故二階をそつと忍び下り妙をば得たる手練めて門の戸  
 明て表へ出彼奴の歸りを待とぬ二人の又の逢瀬を約

し送り送らるゝ懸中お人目おらじと門の戸明け脊打叩く  
 お松よりの彼若者の有頂天心も空も限踏足元うられな  
 らも踏しめていそ〜として歸り行

○伊勢屋の番頭内濟を頼む事

并幸藏戀慕の念を暗し事

斯て幸藏の若者の跡を附て行たるお芝七曲りなる土藏  
 造りの米屋の門口打叩けば内より夫と潜り戸を明るを待  
 受け若者の直と奥へと通りたり幸藏續いて道入や否や大  
 聲揚て吐鳴やうサア信濃屋の間男を儘見届けた上うら  
 の直ぐ家主へ懸合て上へ願ふと聞よりも年頃六十許りな  
 る喜助と云る番頭が忙て其處へ走出し先々静又頼みます  
 斯夜更お何事おやと言ふ幸藏猶聲高く夜更やうとも明  
 けやうとも那信濃屋の亭主の留守へ忍び込だ密夫のこの  
 家の亭主り息子り知らぬが斯見付し上の表向と言ふを喜  
 助の押宥め先々静よして下され能お咄しを聞き上何様と  
 も伊相談致します私し事の此家の番頭喜助とや者なるが

知るゝ通り此家も世間知られし米伊勢屋其縁際し  
 としての實も蓋もない不評判さて其方様の信濃屋の亭  
 主なるりと問りけるを幸藏の頭を振り私信濃屋藤助殿  
 お餘儀お頼まれて上州より態々今度來りし者其仔細と  
 云の外ならず藤助殿の上州へ商ひ物の仕入ふて此節留守  
 の事なるが親類中の何某より手紙を送つて知せたり留守  
 中家内のお松どのの不取締の様子故早々歸て始末を付よ  
 と拾遺難き事なれば肝心要めの仕入物を未だ極りも付せ  
 ん居れば中途に歸る譯は行はず依て取敢す私を頼み先々  
 家の様子を見届けいよ〜お松が男狂ひとして居るやう  
 な事おらば相手の家主へ預け置かお松が一先里へ歸して  
 萬事私に歸る迄留守して呉よと頼れしも兄弟分の好身故  
 と請合て此地より來り昨夜彼家へ泊つて居て見届けたる  
 密夫も此味のある米伊勢屋相手を取て面白サア是くら  
 家主へ男の預りとりお行とぞ出んとする番頭喜助袖を  
 捕へて幸藏を種々様々お宥めつゝ心の中思案するやう

扱々不計事を起れり若表向ふなる時其當人の若旦那  
 又親旦那の言もさらなり此番頭の喜助迄が實は世間の物  
 笑ひ兎角内濟より外なしと直様帳場の引出より金子五十  
 兩取出し段々との浮咄しを聞まして面目もなき此仕合若  
 此事が表向と成上の浮當人の勘當とも成べき騒ぎ故其處  
 を貸方々呑込で丸く納めて下されよ是は私しが心許りの  
 進せもの酒杯飲で何分も浮亭主さんへ内々よと只管  
 頼むを押しして是番頭さんお前計り只宜様は言ひなさる  
 少左様の行ぬと云ふ仔細今此事と私しが穩便は濟した  
 とて後日又至つて顯られた時私も兄弟分の好身を欠き  
 又商ひ先となくすと言ふの夫々是を思ふは付け此相談  
 の浮斷りとまげなく言れて番頭の成程夫も浮尤も併し斯  
 云ふ事柄の世間ふないと言ふでもなし又表向願ひれても  
 首代七兩二分出せば内濟なる事なるが何分世間の評判  
 を厭て頼むは相談と言ふ折衷の方又當り是喜助さんく  
 ど呼ぶ聲聞て番頭喜助の暫く待て下されと奥へぞ立て行



おける跡ふ幸藏心の中扱ひ息子が呼しならん密夫代も直  
 段々増んと嘲笑つ、待て居る中喜助再び出来り是はく  
 浮待遠でござりました扱ひ今の一件も段々夜も更お前  
 さんも旅の浮方手間を取ての浮沫感と浮察しやして此金  
 子百兩差上やしますれば是で何卒能様は内濟の事を頼み  
 ます夫とも其方で何有ても不承知ならば是非がない留み  
 の通り家主より預りでも何でも出させませうが夫で餘  
 り飽がなく殊更互ひふ不評判を求める譯でいありません  
 うと云れて幸藏仕濟たど歡ひ段々との浮譯合番頭様の浮  
 心盡して折角出されし其百兩私に確りに晴合ましたと百  
 兩の金を懐中して左様なら番頭様今迄の事は是切ふと其  
 家を出て又再びの裏家へと立歸り入口の戸を刺破く  
 叩けが寐て居しお松の目と覺し又米伊勢屋の息子が來し  
 うと咳嗽ばらひして例の如く入口の戸をそつと明れ、登  
 計らんや昨夜泊りし上州客よてありしお松をヤヤ二階  
 よお出と思ひの外今頃外から浮歸りありしは是や何の間

ふ出られしと憫れしお松の様子を見て幸藏の笑ひつゝ其  
 所へ働かど安座をうき何の間なきといお内室様夫りやあ  
 お前の事でせう此門口を叩くのハ米伊勢屋の若旦那より  
 外は決して有まいと平常極端に知らぬがエハ  
 くの暖拂ひの合圖で明て貰ふのハ私も感心しくなり  
 一寸叩いて見たのさど云れてお松の仰天し若此事が上州  
 の夫は知れなハ一大事と驚きいて俯向を幸藏の脊中を叩  
 き浮内室様那程の浮樂みか有乍ら今更何の初心らしく  
 で居る事か有ものうね此私達も木や石で拵へたと云ふ譯  
 でいなし是は斯だど浮咄しなら其處の壁も云ふ通り魚心  
 あれば水心さ上州に居なざる職助様も實にお前の顔形の  
 美しいのよ心配して江戸へ行なら外へ泊らず私の家へ寄  
 て様子お氣を付け若男狂ひでもして居るなら先の男の家  
 を見定め女房の里へ一先返し歸ら前々留主をして私の  
 歸る迄待て與よと夫のくくれくお頼みまだく外お  
 種々と話し合た事も有ますが其方とて一人寐の淋しき

儘の色狂ひも深みへはまらぬ其中ふ心を改め翌日より堅く留守を成るが、其所で米屋の色男も今私に能懸合て再び此家へ來ぬ様も固く約束して來ました夫お付ての内室さん其方何と思ふら知らぬが私の身も成て見なさい那二階の格子うら床の中での浮遊みを熟々見て居た心持それを是うら此夜更も又も二階へ上り込で獨りて寝られる物でせうう否でも有ふが夜明迄其方一所は寝かして下さい其所が魚心あれが水心で藤助様への語向の私を歸つて何とでも其方歸りを待たて心うら苦勞をして居るとい何と何と彼と嘘で丸めて甘く安心させるのは是此私胸一ツとお松の手を取引寄せれば此方も少し安堵して氣を揉む事も長煙管煙草吸付差出し今と成て其方様へも何たり誠にお恥しく何卒今宵の一條口口數利す流し目お見やる眼元も幸藏の心の中此煙草が三々九度の盃蓋ならんと押戴いて吸終りお松の床へ轉がれば否應なし引廻す屏風の中の睦言夫を重ねる小夜衣筑摩の鍋の

らも大方親仁吉兵衛が博奕仲間の者ならんと思へば程宜く調子を合せ實に私にも思ひ立て伊勢へ振参りをする旅なれば決して親父へ沙汰なしと言ふのを聞て彼男が夫の素より承知く私も幸ひ名古屋迄用有て行儀ゆゑ夫なら一所も参りませうと言へる何たり怪な事と胸も當りし幸藏が此奴の貞を情々見るふ一癖あるべき面つきゆゑ一番此奴をお先遣て一働させんものと空さず咄をし乍ら行ふ此男も心の中此野郎の高の知れた晝飯位の代呂物と蔑視ながら言ふ様も最う若旦那晝飯の如何でせうと勤むると打点頭で幸藏のさうさ時分も宜らうと神奈川驛の或茶屋を見立て二人其處へ遣入れ茶屋の女が三四人何れも江戸の者と思へ愛想を能く應ずる二人の直様足を洗ひ俱々奥の座敷へ通り女を相手に酒肴を十分出させて酒宴をなす中彼男の言ふやうの若旦那の此道を探存じあるう知せんが是ら先程谷で夫より戸塚の宿まで凡そ二里餘もありませうが此戸塚の宿と言ふ

尻癖早き淫婦が馳走の居膳を幸藏兼よりお辭儀なし其取寄も暇太き己れが氣質の盜賊淺問しうりし事共なり

○鼠小僧悪者も付らるゝ事

井清兵衛夜盗の手引する事

扱も鼠幸藏の計らず途中で見初たる女を枕を替せしより其煩惱の思ひを晴し翌日出立なさんとせしよお松の宿も密夫の事と隠し貸のんと思ふより金十兩を差出し餓別なりと送るよぞ幸藏の牡丹餅で頬邊叩く心地して此處お名残の惜けれと氣を取直してお松と對ひ藤助さんへ私の腹で宜な言ひ置ませうと安心させて立出つて計らず大坂への路用も出来先宜つたど獨り歡び前夜の事なと思ひ出して笑ひながら六郷の渡しを越て川崎の宿を打過行きたるお我行跡より聲を揚て若旦那くいやはや誠にお久し振是う何處へ出なると言はれて幸藏返り熱々見るよ其状の小さき風呂敷包みを脊負取引草鞋も半合羽で旅刀を差込だ一向見知らぬ男故不審いとと思ひ乍

昔し盗人數多有て處々方々へ押込たり又ハ旅人を悩して益々乱暴してゐた處愛お不思議な事の有たハ彼盗人等が或家の夫婦を惨虐に打殺して金銀衣服を盗み取とサア其夜うら往來へ二人の靈魂顯れ出で逢人毎お泣叫び恨みを返して下されと悲しい聲で頼む處或夜一人の武士が通りがへつて幽霊は逐一仔細を聞たより其盗人の吟味厳しく終り十人召捕れて直然架られたを所の者ハ祟りを恐れて十の塚を立たのゆゑ實ハ十塚と言ふべきを今ハ戸塚と書と云ふ故事來歴ハ斯の通りと知たり良し話しかけるを時の興とて幸藏が然言譯りと云ひつゝも元より好む酒故茶屋の女も戯れ乍ら尙彼男と戯つ頻りも飲で居る中此方ハ十分飲食も腹を満へた事なれば時分の宜と立上り鳥渡手水をして來儀と庭口差て出りけるを見て取る幸藏跡より續ひて私も行て來ませうと立て此方ハ南無三寶といつゝ一番問が抜たと素知ぬ振ふて小用を請せ座敷へ歸れば幸藏も矢張元の座も着きて又も酒酌替す

中微笑ながら幸藏が一体其方の名は何と云ふと云ふやと尋ねれば私しは清兵衛と申すも而して傍前様へと問ふ幸藏の心中の切に此奴の親吉兵衛の近付でも何でもなく全く此方が旅馴ぬ風躰を見て付込だ彼道中の騙子よりよしく然云ふ譯ならば其膽魂を抜て呉んと胸を定めて懐中より小判を一枚取り出し清兵衛さんはい餘り少しだが道中の草鞋錢でもおしなせへ夫より女中を呼で呉など清兵衛お三四人の女中を呼せて幸藏が大きな世話を成ましたマア一ツ宛飲ねへな肴は是だも二分金を女一ツ宛渡せば愛想初めは百倍して悦ぶ様子は清兵衛の大膽を潰しつゝはんの晝飯位の様と思つてゐた此有様はとんだ大目違ひ併し斯言う目違ひの幾許有ても障りなしと心の中と思ひながら彼小判を押戻して志ざし有難ひが伊前さんも伊勢様へ振参りとの事なれば路用も多く入事せうまつく是は納めなさへうの體も江戸子の登り大名下りを食と云ふ通りの理合で其行懸の有丈の金

を残り着り散し歸りの柄杓一本で報謝を乞ひつゝ漸々小江戸へ着のり問々ある習いと深切ごうしの空辭儀を夫と知れ共幸藏の態と恐りし面地して一兩位じや不足と云ふのり夫なら十廿でも欲くは随分遣りもしやうと邊りを處々見廻して女共の今の居らぬを是幸ひと聲を密め己と一所お心を合せ此海道の分限者へ是より手引する事なら其方が一生安樂暮せる程は盗んで遣ふと言ふは清兵衛の憫れ果しと同じく聲を密めつゝ夫じやあ伊前も己が仲間の騙子りと笑つて問へは幸藏大い嘲笑以夫なけりな者じやあねへ併し騙子位は碌な手引の出來めへと言れて清兵衛小膝を進め左様俯つた者でないと云ふに我等の仲間中で日頃どうと付現へ用心能故手出しせぬが處に三州の田舎でも吉岡村の新田の太郎左衛門と言ふ大百姓の凡そ四五万兩程の大した分限と云ふ咄し何と是より其家へ行て如何と勤める詞は幸藏大に打悦び能く是より直に行かふ夫じやあ案内して呉と身支度するを清

兵衛のまわく鳥渡待たなさへ私の手下の文吉のどんだ氣轉の利た奴故彼奴を一諸は連れて行は随分益なならふと思へば暫の間と立出しが間もなく同道して來り先幸藏へ初對面の挨拶させて密事を告るお去へ行んと幸藏の其處の酒食の代を拂ひ三人連立道中の路用の幸藏が賄ひおて晝夜着りを極めつゝ三州路へと赴きぬ

○鼠小僧吉岡村勘吉の事

井伊勢参りと相宿する事

借騙子清兵衛どりの文吉が案内に任せ鼠幸藏の口を重ねく三州岡崎へ到りしは扱清兵衛が言ふ様は彼吉岡村と云ふのは是より乾の方で當れば其方角へ行ませうと先へ立つて在へ道入道程三里許りも行て爰だくと言ふゆゑ幸藏其處に立止り太郎左衛門が家の様子を窺と見定め二人は向ひ一先岡崎へ戻らんと元の道へ立歸り或旅館屋お宿を求め湯杯へ入りて打寛き酒酌乍ら幸藏の二人は對つて聲を密め傍前達は何程の金銀を捕る了簡だと言へば二人

口を崩へ夫の欲限り無れと先持る丈けの千兩でも又二千兩でも欲いものと言ふを幸藏點頭て夫なら細引の用意とせんと先お此家へ來る時覺え居る故文吉も直差圖して求めさせ時刻を計つて宿の亭主は私共の用事有て何某方へ行ますすうら少しの間此荷物を預つてゐて下さいと頼で置て三人連立彼吉岡村へ出行しり太郎左衛門の方へ行さし木穿も眠る丑滿頃ゆる時分の宜と幸藏の様子を伺ひ先達で黒板塙を乗越つゝ文庫藏の方へと廻り竹階子を尋ね來り藏の窓へ掛るや否や自然備たる幸藏が猿猴の梢を傳ふ如く忽ち上へ駈上り窓の筋金を二三本手早く折て土戸を明け二人を招きて安々と藏の二階へ忍び入幸藏早くも懐中より摺火打を探り出し用意の蠟燭へ火を移して藏の下へ至り見るは座敷めきたるはあり其處の襖を開き見れば何十と云ふ金箱が積重ね有る幸藏悦び彼細引にて二千兩を先清兵衛が脊中へ脊負はせ又文吉が脊中へも二千兩を脊負せて己れの其處へ出てゐたる三百兩餘

を胴巻へ入て眠りと体へ結付け蠟燭の火を吹消て元の窓より忍び出竹階子を下りて二人を待ふ二人の何分重さの重し且金箱が窓へ支へて自由を得ざる處より清兵衛の首と出して引込み又文吉も首も出して引込みする故幸藏の是を見て借の金箱の支へるので重みは堪兼居るならんど早くも察して小聲よて荷を軽くして下て来て言を彼方の兩人のみすく大金を捨行の残り惜いと思ふより連れ出んと種々心を探りて居る折柄兼て非常の夜廻りが見付せしものなるり人聲聞へて提灯の火影が近く見えたるは幸藏焦つて兩人が顔を出を度手間似て知せ早く出よと氣を揉め二人の一向埒明す向くくとして居るよ最う餘なしと板塀を乗越んとする折柄忽然耳よ音高く売員の響聞ゆるは流石の幸藏膽を潰し漸やく塀を乗越て内の様子を伺へば早竹階子の直下へも火の影ちらちら見ゆるのみり村中の者四方より集り来る様子故今の二人を助ける處り此處此所居る時俱よ自滅と思ひしより獨

り其場を逃出せしが追々兇員を目當りして竹鉛杯を携へたる百姓共が太郎左衛門の家へと寄来る有様見付られしと幸藏の稲藁の中へ身を隠し様子如何よ伺ひ居るよ大概二百人計り太郎左衛門の方へ行しに驚きながらも幸藏の先己だけ安心したと獨り事を言ふ間もなく又十四五人其前を通り乍ら言やうの彼兇員は盗人だらふ何よせよ行懸ふ此稻村を竹鉛で彼方此方と突通さば若逃出した盗賊が隠れて居るも知れぬへと咄し合のを聞く幸藏の目下より汗を流し漸々其所を逃出して本街道へ出たれを宵よ宿りし旅宿屋へ今更寄るのよ問振な咄し僅の荷物位置土面と一人心ふ點頭つ、矢矧の橋を左りふ見て池鯉鮒の驛に差懸り彼二村山の古歌の如く玉くしげ二村山の白々と明行末の波路成けりと云るよ似たる幸藏が此邊りよて夜を明し彼清兵衛と文吉の末の波路と成果しやと流石のこれを不便と思ひ並木を越て漸々よ間の驛へと辿り着き朝の支度をせんものと或る茶屋へ入り酒を飲みやうく

心も落付たど獨り心も悦ぶ折此家の店の門口に雲助共が二三人寄集つて高聲ふいやのや夕部の騒動で寐なうつた故り眼が溢いと咄すを聞て此家の亭主が其騒動の如何云と譯と云へば雲助差寄てお前さんも知ての通り吉岡村の太身の太郎左衛門様へ盗人三人道入込と感其中二人の召捕た一人の何所へ逃たので四方八方の出口くへ手と廻しての殿しい詮議と語るよ亭主の打撃も那用心堅固の浮宅へまんま忍び込むと云へば就れ中々の盗人だらうが其逃たと云ふ一人の奴も金でも奪れた譯りなど聞か雲助笑ひながら何でも欲ひりけねへもので跡は残つて捕つた二人の奴も強欲で二千兩宛背負た故藏の窓より出損つて如何する事も出来なうつたが逃た一人の盗人の三百兩餘を持って出たどり殊も跡を調べた處二人の逃て行た奴との素より知た中でいなく唯道中より欺されて連れられて来た者だど云ふ事何も成ても利口な者へ違つたものだと其主の其處に居るとい知らずして種々とする噂を側ふ

閑居る幸藏の飲酒さへも味くねへと思ふ折雲助等が問屋をさして行しゆゑ早々其處を立出つ足よ任せて歩む中鷗田の宮も打過けるが何分獨り物淋しく咄し相手のあれりしと心懸つ、行折柄年頃廿七八の穉ならしき伊勢參が跡お成先み成乱戦くしたる風体を見て幸藏の呼止めめ前何處うら出なすつたと問へば此方の會經してハイ私しの過日頃江戸近邊うら出ましたと終油断して出懸うらお金を遣ひ過まして誠にお恥しい事ですが今日の御飯も喰ません伊勢參一膳振舞つて下さへませんり旦那さまと言ふを幸藏可笑さ取へて夫の無うし空腹さらう伊前の名何と云ふハイ八藏とやます然り實の己も一人旅で長の道中淋しいうら是りら前と一所よ歩ふ夫でも私の様な者何して伊道運なれませう何其遠慮ふん及ばぬと或る古着屋めて拾一枚并に襦袢股引袷纏ひて八藏を呼びこれを着替よと言へば八藏の大きお悦び以前の破れし若物を脱ぎすて貰ひし衣服と着替る時目早く見しの中

の影者身形ふ似合ぬ春中の奇麗さ扱ひ此奴も騙子りと幸  
藏心よ可笑くなりコウ八公愛等で一杯遣らふうと言ふ  
八藏日さして見て旦那最う七ッ近ふ座りませう今晩の  
此宮の驛へ泊んなすつちや如何でんすと田舎めきたる  
作り屋幸藏も實の夕部の騒ぎで一夜眠らぬ勢れ身ゆゑ彼  
が詞お打任せ夫なら此處へ泊らふと或る宿泊り着て早速  
酒と肴を眺らへつゝ座敷へ通つて幸藏のヨウ八公一風  
呂先へ這入て来るうら此懐中者を預けると鼻紙入を差出  
せ八藏ハ請取て左様ならハ侍者中でも流しませうりと  
言ふを押し止めア茶でも呑で待て居など風呂場をさして  
出行ぬ

○幸藏金子を奪ひるゝ事

井幸藏お吉の妄想を夢見る事

彼伊勢参り八藏と首へるも幸藏が察しの通り彼清兵衛文  
吉等が仲間の騙子として此日も己が姿を窺ひ能き仕事も  
かなと思ふ折柄年尙若き一人旅の金ありさうな者を見し

よ女好なる幸藏ゆゑ殊の外氣ふ叶ひ感誠言を言ひ乍ら終  
飲過せし草臥體今は屹度出よと云ひつゝお吉の手を取  
よ此方の未だ小娘の只恥しきばかりありて赤らむ良し袖を  
當ておよしなさいと言ふ折しも働き女が床と伸入來り  
たるも幸藏の其儘お吉の手を放せばお吉の後へ送りなが  
ら夫で先々お容様後り休み遊せと禮義を述べて行  
んとするを見て幸藏が眼で知らず娘も心有明の行燈引  
寄せ甲斐なくしくさらよ油を繼足して下女と連立出行け  
る跡も幸藏徒然と床に入し何分ある昨夜の一夜寝ぬ故  
み獨り枕よ付や否前後も知らぬ高麗其夜も次第お更行て  
旅店の者も一統寝鎮りたる真夜中頃此家の娘分の彼お  
吉が宵お約せし言の葉の情よ引され忍來て寢居し幸藏を  
揺起す此方のはんの戯言と思つて居たを誠として忍び  
來りし可愛さよお吉さん先刻うち來りく待て居た  
が矢張彼宵の待夜中の恨み曉の夢で無益な事だと思つて  
も夢でも宜うら浮前を見様とつひ恍々として居たよ能く

故付來りしを彼方より却て身形も辨へ奥懐中物さへ預け  
たるも八藏心よ思ふやう彼奴の若や我を釣る上の役人で  
いなさりと海氣味悪くはなりしもの、彼鼻紙人を探り見  
れば八九兩の金子あるよ何しる是の我稼ぎと懐中なして  
店へ出私ハ少し買物あれハ一寸下駄を貸與よと日和下駄  
を借受て何國共みく逃去ぬ斯とも知る幸藏ハ湯より  
上りて座敷へ來り彼八藏と尋るよ何處へ行しや更よ見へ  
ず併し預けし紙入の其儘其處よ有ゆるよ手よ取り中を改  
むれば小遣ひよとて入置し九兩足すの金子が見へぬよ扱  
ひ持逃せしならんいやはや小量な心の奴と少しも悔む氣  
色なく宿の女を呼びながら桐卷より一分銀を取出して茶  
代なりと差出せば働き女の驚きて一人客が茶代として是  
まで呉るの二百り三百夫をハ一分呉るとい能き騙徳の客  
人と其家の主人よ渡しけれハ主人も早速禮お出で追従た  
らく持運ふ説らへ物の酒肴酌よハ家の娘分めてお吉と  
いへる十五計りの未通縁を紐り立て馳走がてらよ差出す

來て呉たど手を取て床へ引入れ初契り結ぶ縁しの小娘が  
幸藏よ向ひ云るやう今更お咄やますも氣無事とハ思ます  
が強面私の此身の上登の家よハ始より賣の子のなぬ處り  
ら知合中どて私しが稚い時は貰れて子とハ成て居ませが  
此頃聞ハ或人の媒人どりで取極た夫ハ一實に否な男を  
望ますとの事勿論それハ一里先の名主さんの弟で其家  
あのお金で澤山有故二親も欲目々昏ニ返事で受合れ  
否だと思ふ私しハ無理往生をさせませも育てられたる  
思われハ不承知云ふも出來ない悲しさを恥しい事乍ら且  
那の様な浮方ならと跡の顔をハ赤くして差俯向よ幸藏も  
猶更お吉が可愛くなり私も浮前の様な顔なら直よも望  
成度が是非大坂迄是うら行ねハ事の欠る用が有うら早速  
用事を済して後又來てからの咄しよ仕様と首へハお吉ハ  
首を振り否々何處へも遣せんと緊擗着れて幸藏も今更  
捨て行の不便と思ひ返してお吉を抱寄せ夫なら今より  
私と一所よ直ハ此家を亡命して大坂へ行氣ハないうと言

へお吉の点頭て如何様事でも浮前様と一所添れる事  
 ならび假令山荆林縁の中でも私し少しも厭ひません左  
 様なら早く支度を爲なせへ而して何處うら遊たら宜らう  
 夫の此庭の横手お堀が有すうら其開きを明て参りませ  
 う併し外も大きな溝が有て私しお行れませんうら浮前  
 さん先へ出て其溝の上へ何なりと渡して置て下さへな其  
 中私しも密りと身支度をして來ますうらと其座を立て行  
 跡も幸藏も亦仕度をなしお吉も教られた通り庭の堀の開  
 きを明け其外の溝を飛越傍りお在し古板を拾つて溝の上  
 へ渡し今や〜と待うちらよお吉の小さき風呂敷へ着替の衣  
 類を二三枚外に櫛并ひなど取纏めやうやく居間を忍び出  
 て庭へ出んとする所を思ひげなく後より朧と押へた母  
 親が是お吉何所へ行宵うらの様子か怪しいと思ふた故お  
 付て居しを兼て聲さへ極りしふ了簡途ひ何事ぞと泪を  
 俱お見する此方の親仁を庭を下り彼開きより立出るよ  
 聞き夜なれば幸藏のお吉が來たと思ひ遊へ危ひうら手を

出しなど何の氣なし近寄るを親仁の其手を腕と捕へ待  
 せました浮客人私のお娘の父で浮座る宵うら浮前と娘の様  
 子少訝しいと見て居た所案の如く娘めが今遊出さふとせ  
 し故も母が見付て取押へ彼是異見のしてゐるもの、實の  
 娘の聲とても未だ結納の取替せを辨したと云ふ譯でいな  
 し夫も就ての浮前様江戶の生れのお方と云ふ事好た中  
 なら片々の斷りますうらは客人聲も成ての下さらぬりと  
 頼む詞も幸藏も流石も何分間も悪く頭を掻き〜云やう  
 の今更となり親仁さんよ誠も面目次第もないが聲も成  
 れる位なら斯して遊ひしませんと云へば親仁の泪聲もて  
 お前も娘も浮聞り知らぬお吉の私のお寶子でなければ幼  
 い時うら育つた娘浮前も連て行れての相續する者絶ると  
 云もの然れば浮前も私しの頼みを聞て呉ぬと云ふ譯なら  
 障りのないやう此位も今宵の事い諦めて跡で思つて下さ  
 るな少しなれ共草鞋鏡も是を遣ると懐中より金を十兩取  
 出して頼むを幸藏押返し私のお宝より金づくで色事なせの

致しませんお吉様と言ひ替した事も有故別れる共又別れ  
 ぬ共逢ふての咄し金も目も昏れ約束を無にするやうな事  
 をしての實も男が立ませんと言ふを親仁の打案と夫の素  
 より浮前の氣質併し是の私の寸志もア兎も角もと近寄て  
 袂へ入んとなしけるを其の受取と争ふ機會も如何なし  
 けん幸藏の足をこらし大溝へ眞逆様も落入ける咄嗟と一  
 聲叫びしが此は是南村の一夢として早明近き鶏の聲も驚  
 き覺し幸藏の身の冷汗を拭ひ乍らア、馬鹿氣た夢と見た  
 と起上らんとする折柄彼娘分のお吉が來て煙草盆を出し  
 つ、浮目覺なればお客様浮手水を湯遣ひ成いませと言ふ  
 自借々打見遣は昨夜見しと雪と墨顔も付たる白粉の處  
 班らよ兀たる跡へ痘瘡の痕さへ顯れしよ色氣も覺し幸藏  
 の一人心も可笑となり朝の支度を調へてそこ〜其家を  
 立出つ七里の渡しも打越て既も桑名も懸りしよ夕部酒を  
 ば飲過て最も取果さか妄想も心氣痛めし譯なるみや俄  
 りに瘴氣の差込みしが宿の離れし處故藥を飲よも詮

方なく且見れば大抵半町計り橋手の方よ親曾の小家あり  
 しを幸ひと其所を便りて到りける  
 ○幸藏途中病氣貧家を頼む事  
 井孝女を憐む事  
 幸藏の彼小家も道入私しの旅の者成々急も瘴氣で懸懸す  
 る故少し此所を賃て下され猶無心乍ら湯を一つ取舞ひれ  
 よと云を聞き寶子の上へ二枚折の古き屏風を建し中より  
 歳ハ十四五位の娘その顔形ちの相懸なれ共未だ春暮と三  
 月の上旬なるふ古橋袴と一枚其身も纏しのみ髪の状態  
 へ何結びしや油氣もなく花々を見る影もなきが出來りて  
 夫の無事困で浮座りませうアは遠慮なく旦那様此方へ  
 お掛なさへまじと姿も似合ぬ物知らうく甲斐〜しくも  
 欠懐へ温湯を湯で出すよと幸藏これと押し頂上懐中より  
 して丸薬を出して漸く飲終り暫く休み居る中お思の外お  
 早く落付先安心と煙草をば煮し乍ら夫となく内の様子  
 覗へば柱の屈曲壁の落彼の破れたる屏風の中に人の覗く





の夜着布子杯よりして弟太吉が晴着とする松葉色の袴と  
 春駒を染出した小立の綿入自分の亡母が手織の布子被是  
 俱に受出し其外米味噌買調へ近所の友達娘を頼み其品物  
 と二人連ふて携へつゝも立歸るを幸藏手傳ひ運び入れ其  
 友達娘も小遣ひ杯を遣ひして猶彼是と世話をやくよふ  
 市の彌を喜びて何うら何迄調ひ支して此様嬉しい事有ま  
 せんアア伊飯を焚てと云ふを幸藏堅く押し止め貰ひ私に空  
 腹ないが伊前が遠慮をする故ふ先刻の様云ふたのゆゑ  
 飯拵への跡の事早く病人は藥を上げて能く看病をして進  
 ちさい夫より先刻勤め奉公は世話をする人々来けれ共私  
 が江戸の線者と云ふて夫を斷つて歸した故其邊の事其  
 積でと云つゝ又もや懐中より金子廿兩を取り出し伊前能く  
 聞なよ此金を上るうら何り商賣でもすると云物り田地で  
 も買といふ物り庄屋様もて又ハ外ハ深切の人を頼み  
 ずとも能様おして貰ひなさい何でも伊親父さんを大事お  
 するが一番肝腎の事だよと金子をわたり渡されれば此方ハ

大い肝を潰し此様は澤山頂きましてハ濟ませんうらと  
 押戻す幸藏の手に取す私ハ路用も澤山あるうら決し  
 て遠慮に及ばない若も人々此金の離うら貰つたど聞た  
 なら以前伊親父さんの懸念の者江戶へ出てうら運が向  
 き今ハ立派な商人になり此度幸ひ大坂へ仕入し登つた道  
 すがら尋ねて今の難儀を言つて呉たと言て置な切夫で  
 ハ伊親父さんも能く寝て居なざる様子故私ハ違ふ行程  
 ハ宜敷中てお呉よと言ひつゝ幸藏立上るを市ハ細袴の  
 袖さへも煩し涙は絞ながら只今伊前も出来ませうらと止  
 るを幸藏袖拂ひ縁が有たら又違ませうと道を急ぎて行  
 過る跡は市ハ後影の見えず成ても伏し拜みぬ切幸藏ハ  
 道々も能き善根をしてけり心の中お悦びつゝ幾日重  
 ねて目ざしたる大坂へと到着し其頃天満の通りよて近江  
 屋喜左衛門と言ふ評判の大家の旅館屋へ宿を求め我ハ江  
 戶の者成り尙運の者も三四人跡より此家へ来る約束故何  
 本り別間を借たしと小判一枚茶代も出せば黄金の色も透

ひぬるハ何所も同事として直み心を奥の間の離れ座敷へ  
 案内して下へも置ぬ響應は先幸藏の湯へ這入酒と肴を誂  
 らへて夫々女々祝儀を遣り暖々酌をさせ乍ら姉さん一寸  
 伊願ひとが内の旦那が宅なら伊目も懸つて私し伊前  
 中度事があるうら伊前敷も少の間来て貰ふやうも傳ひて  
 お呉と頼むを聞て其女が夫ハ誠にお憎生さま義程旦那ハ  
 他出して未伊歸りになりません故如何の事今晩の逆も  
 伊前ハ合さませと云るは幸藏打点頭イヤ何強て急ぎ  
 かせぬゆゑ歸られたなら翌日でも宜うら序云ふて下さ  
 いと頼みて其夜の床は臥初翌日も草臥直しと朝より酒を  
 取寄せて女を相手お飲ながら亭主の歸りを待居りし其  
 日の巳の刻過る頃主人喜左衛門が歸りし由よて昨日の茶  
 代の禮とて酒の肴を持参して只今伊目も懸りますと下女  
 の知せは幸藏然であるうらと打悦び相手の女お酒肴を酒  
 十分誂へさせ亭主の来るを待中ハ四十許りの人品能き  
 男が程なく出来り我等ハ當家の主人なる喜左衛門とす

者ど時候の挨拶杯として何り私しハ伊尋ねの伊事有とす  
 事如何成子細もござりませう早速仰らるべしと述るを聞  
 て幸藏の尙町事は會釋なし先一献と盃を献せ主人ハ  
 受敷暫し程の四方山の咄し時を移せし折酌の女が店  
 へ行しを見て幸藏ハ喜左衛門ハ我等ハ伊身も尋度と云し  
 ハ別の義も非ず今此大坂ハ名の高き辰辰といふ博奕打  
 の親分ありと聞居たるが定めし伊身も伊存知ならんと聞  
 主人ハ胸の中飛と事を聞奴なり殊も年の若けれ共一癖  
 有べき面魂ひ何おもせよ試みんとシテ其淀辰と云ふ者ハ  
 何り伊用有ての事勿論土地ハ名の高けれは誰とて顔と  
 見知り者なし伊身様ハ何の譯で伊尋なると問返され夫  
 と打明云れぬ事ゆゑ別は差たる用事ハなけれは名高い人  
 故一逼り達て置き度と思ふなり就てハ伊亭主の伊世話ハ  
 て伊引合せ下されませう如何でせうと又問ハ主人ハ少  
 し思案せし夫ハ随分私し其手續きを以て聞合さば知  
 れざる事ハ有間然らば今夜隠密と我等ハ一所ハ伊出あ

れ此所の博奕の流行土地ゆる其道の人を頼みて見んと云  
れて幸藏大は悦び左様なら何分も宜敷お頼み申す  
と夫より酒宴ふ日を暮せし喜左衛門の夜入しより時  
刻を計り率とて幸藏を催がせ幸藏も亦身支度して俱  
道程一里も行し既大坂の町家を放れ何と云る所り知  
らねど大川へと来りければ喜左衛門の岸お繋ぎし小船  
幸藏を乗せつ俱向ふの岸より夫より平山を打越  
生茂たる並木を行其木影より八九人の大の男が長脇差  
を横へ乍らのさくど其處へ出掛て来りしむ幸藏不審  
の者共と思ふ折柄其者共の喜左衛門は打向ひ頭今夜の早  
も浮出と云を喜左衛門の打笑ひ今夜の珍ら敷客が有て一  
緒運て来しなるが何う得者の無つたりと云へば彼等  
口を辯へて未だ此通り宵で浮座れば別段得物も有りませ  
ぬ後程浮目も懸らんと何國ともなく立去ぬ

○鼠小僧泥辰は對面の事

井泥辰奇術を見する事

判の端は片假名の々の字の極印夫を一枚り二枚なら又兎  
も角もと云ふべきなれと二三百兩所持の様子に今日酒盛  
の其時此黒い眼で見抜しなり殊も幾頃彼家へ盗人三人  
押入て四千三百の大金を奪ひ去んとしたる時二人の其場  
も召捕れて四千の金の取戻されしが三百兩を懐中せし一  
人の行簡知れざるより其被縛し二人の者より逃し一人の  
容子を糺し人相書よて詮議をば嚴敷すると云ふ事を手下  
の者へ聞傳へ昨夜私への咄しよりおまの其夜逃去し一  
人お相違なからうと私の爲より察したりと云れて幸藏  
心なし流石の親分眼の高い實は察しなすつた通り吉岡  
村を逃去し一人と云ふに即ち此身且又外の二人と云ふに  
清兵衛文吉と言ふ奴めて高の知れたる護魔の灰元來餘ま  
り強欲よて私に金をば減せと言を物惜みして彼是どぐづ  
くしたより召捕れ愛目を見たの感然なれと夫は今更詮  
方なし皆今我等が遙々と此地へ来たの外ならせ世上の金  
銀不廻よて貧乏人のみ深山なれば我心願ふに富有の者の

扱幸藏の喜左衛門の様子を見しより盗人と推留せし故心  
の中可笑く思ひて云ひけるは浮亭主今の人遣の浮身の手  
下と見受けし開も實名の何と呼ぶるは匿す聞せて下さ  
と云へば此方の笑ひながら何と問ひて此私にお主が尋  
る泥辰なり今のの實は察しの通り私の手下の者共外  
よも四十人餘あり先お浮主が泥辰も違たいたものと云ひし  
り共壁お耳ある世の中故頼ふの名乗明さしりし私も浮  
主を仲間と早くも推察なせし故愛送連て来た譯じや  
と云ふ幸藏打驚き扱ひ此地も名も高き泥辰親分よて有  
しり然ども知す先刻より慮外の段の眞平浮免斯上る私  
しの江戸江川町に住居なす鼠吉兵衛とや博奕者の俸幸藏  
と云ふ者なり何分此後の浮懸意にど難儀を盡して又云ふ  
やう扱親分が私しを仲間と知れし如何の譯と怪し  
み問わ夫の浮主の知るまいは昨日茶代と出して呉た鼠小  
判の譯てより儲りお見覺へある金もて岡崎の在所成吉  
岡村お知られたる太郎左衛門が所持の金庫と云ふの小

金を隠らす盗み出して湯水の如く遣ひ捨我身の榮耀を爲  
すの勿論又困窮の者共へ施し呉んと思ふなれども中々江  
戸の中よての多くの金を取出し難く此大坂の昔日より金  
の集まる處なれば此地に於て働かんと思ひ極めたもの  
我一人の力よて成し負すべくも非ざるより豫て江戸よ  
も評判ある親方の名を基ひつ助けを受度参りしなり何  
本今日より力と成て私の頼みを遂させてと言を聞より泥  
辰の其大膽を譽そやして其の面白く我も手下の多く  
あれせまざり江戸まで此身の名が通つて居るとの知さ  
しは斯まで聞えて居し事此高名の身の譽り但しは是  
不仕合身身の浮沈みは知れぬ世の中何しる人の相見互  
此末早晚私どもも江戸へ行まい物でもない就てはか主へ  
近付の印よ今宵大坂の手始め仕事は直是より能い手引の  
處あり先々當座の金儲をさせてやらんと言ふ詞も幸藏  
よなく打悦び此上其も宜様とお頼み申す云寄を聞く泥辰  
の點頭て去らば主の暫時の間私言語は従はれよと先雨

眼を共ニ塞グせ夫より一個の切包みの様なる物を幸藏の懐中へと押入れつ、此身可と云ふ迄、眼を開いておらないと堅く戒しめ手を取て二足三足行ければ俄に聞ゆる三味線太鼓其音さへも調子能く殊の外なる賑ひにて女の聲杯手は取る如くやんやんの大騒ぎは是れ妙だと思ふ折柄いざ眼を開いて見よと云れ幸藏發と眼を開けば此處や彼所も提燈燭燈し連ねし有様の畫を欺く許りめて數多の女が舞唄ひ全盛言はん方もなし然るも斯程多勢の中、幸藏のみ見物すれど誰とて答むる者もなきよ不審と起して居るを見て又淀辰が目を奪げと差圖するゆる幸藏の以前の如くおしけるを又もや二足三足歩行せ薄闇の所に至りしと心と思ひ當りし時又目を開くと云ふ故に再び目を開き見るに其兩側は金箱がひしと積重ねありければ幸藏俄りも横手を打ち成程是れ不思議なり先金箱を一つ取んと手を出し懸れば忽ち今迄少し明るりし座敷も何時しり眞の闇さで残念と思ひしりと何よしる爰迄

旅店は着ぬ

○強盜流辰素性の事

井初代流辰騎右衛門と稱さるゝ事

幸藏既ぬ淀辰が奇術を感じて其傳授を頼り、請度思ひしうせも一生女の肌を觸る事のない術なりと聞て、此つも思案も人間儘の壽命を保ち彼樂しみを盡させば術を受けるも甲斐なしと念を止めし幸藏が其夜の終に打臥し、翌朝食事も濟し折柄淀辰來りて云へるやう夕部の賑かし勞れしならん夫は付ても聞たさの吉岡村の極印の金の何程ある事や此地の目明澤山みて油断ならざる土地なればお主が彼金を時散さば夫より忽ち足が付き遂に大事とならん程お私か悉皆取換て遣ふと云ふは幸藏悦び宵の江戸の田町にて云々斯云ふ手術を以て百兩の金を取し故道中多分の金も入ず此地へ斯して來る迄に彼三百兩の封の儘少しも遣えず持て居て一昨日始めて其封を切しもの故氣も付ざりしが兎も角三百兩の内一兩減りしのみなり

來たものを取すも歸るも馬鹿氣な談しと尙探り寄て其箱へ手を懸持んとしたるも何ともしけん庭をも知ぬいと大なる落し穴へ異逆様も陥りたり此方の淀辰聲をうけ首尾の如何と問けるも幸藏夢の覺たる如く只茫然として居るを淀辰大いに打笑ひ是式の事驚く事うり腕りせよと言れたるも幸藏甚だ腹を潰し極々奇代の妙術りお親分ども頼みし上此妙術も請たしと言へば淀辰考へて成程餘人の兎も角も腹を見抜しお主故我此奇術を譲つても苦しむらざる事されは是れ容易よし難し扱其仔細如何と云ふは術を受けば一生涯女の肌を觸ぬなり若誤つて身を汚さば立處お命を奪さん然れば是れよしおして外お與る守符あり是を肌か付置時ハ走走る事自由自在必ず大切よ所持すべしと懐中より取出し渡すを幸藏取て押頂き肌よ付れば淀辰言ふ様外お咄しも澤山あれ共今夜ハ一先此場を去て家で緩々休ふと元來し遣へ立歸るも彼守りの功驗なるもや幸藏歩行も足輕く僅行しと思し、既近江屋の

と其事情を告せつ、極印金を淀辰お渡して宜敷頼みますと云へば淀辰受取て夫の懐中請取たご己が居間へと持行し程なく金を取換來り數を改め幸藏は一々渡して云ひけるハ此大坂の金銀の集る所と云ひ乍ら盗み取るもの困難く中々骨の折る土地我手下ハ随分共働く者もあるなれと四五百と云ふ大金を盗むハ誠種なことお主も能々心を用ひ先々氣長に働きたと云ふハ幸藏禮を述べ其金員を懐中しながら今日ハ異ハ天氣も酷く家も居まも氣鬱故所々を見物致し度いと云へば淀辰傾づいて夫でハ幸ひ道頓堀ハ我片腕と頼んで居る畳屋三右衛門と云ふ者あり是も矢張旅籠屋なるが機轉の利た者されは是へ便つてお見なさい私ハ手紙を添る程よと紙面を認め渡されしよ添けなしと幸藏ハそを懐中して腹を告げ此家を立出で其道にて手土産なぞを買願ひ道頓堀へて行ふけり傳ふ曰く淀辰と言ふ者の素性を尋るお親ハ寛政の頃大坂お隠れなき船乗ふて淀辰五郎と言ひし者なり此辰五

郎が盛り折日吉丸と言ふ船に荷物を積込江戸を指て出帆せしむ時しも五月雨頃にして俄に暴風吹起り船の今も覆へらんとせしむを辰五郎始め六七人の船頭共丹賊を拙んで働きたり然れども風の彌々烈しく空一面は曇り雷鳴轟き山の如き浪船を宙天より打揚げ又打下し海路の真黒にして黑白を分たす人々生たる心地なく只神佛の名を唱へ死を待より外なりし辰五郎の船を切て海中へ投入祈禱なしける何卒龍神怒りを止め此船を恙なく江戸へ着しめ給ひますれば此後海上へ出る毎に人間一人宛を犠牲お捧ぐべしと一心不乱願ひし何成悪龍神も聞入れしや又の暴風の止む時あるや次第く海上穩りになり空も晴行星の光りも見ゆる様成しり辰五郎扱ひ我一心を龍神に納受有しと見えたりと天地を拜して悦びつ船中の者を見れば皆々色青ざめて更にも正躰なりけるよ辰五郎の嘲笑ひ扱々言ひ甲斐無奴原うと首乍ら四十有餘の

一人の船頭を引立て其儘海中へ波と投たり外の船頭驚くをコハ龍神お誓ひし犠牲なり言ふ辰五郎の船を港へ着け破損杯を繕ひ悦びの酒酌交し而して難なく品川沖へ船が、りし荷物を送て後今迄用ひし古帆を賣拂ひ新帆を白帆と繕ひ丸を龍と首ふ字を染出して龍丸と名付ぬ是龍神の爲に助けられしを表せしならん夫より後龍風として船路の通行仕難き時貨物を倍増取て詰合し船を出す何よても船頭を一人宛投込たり斯て思ふ様に乗切る事の出来るも後々の我手の者を殺さんより他の船の者を犠牲おせんと船先お仕懸をして海上にて船を突當てり其船を打毀し人の三四人宛も一度お殺しける事七八年此事自然と所々の風聞と成て船頭共言ひ合ける若も海上にて龍と首ふ字の帆を懸し船を見れば早く逃去べしと其高きりし其頃奥州に跨右衛門と言ふ船頭あり彼身の丈六尺九寸ありて筋骨逞しく名高き船頭なりし辰五郎龍丸の大悪

人辰五郎の船を聞て惜き奴なり我彼奴を退治して諸人の憂を除うんと姿を棄て大坂へ登り僅の商ひを始め辰五郎方へ手続を求め立入て我も商賈の片手業は船の手傳ひせんと思へば浮遣ひ下さるべしと頼み置し或時難風の折辰五郎船出をなせし其時海上にて他の船を見懸ざりしり我同船の者を犠牲と爲の外なし就て幸ひ跨右衛門を誘引しゆると海上三四里も出し處にて貯へ置し酒を出し跨右衛門に頼め海上安全の神酒なれば十分と飲べしと云ふ跨右衛門扱ひ我を購つよさせて殺さん心なりと察せし故態と異様なり我も難風行の船の乗始めなれば親方へも一盃上げんと大茶碗へなみく酒を酌ぎ一喫と一口は飲乾サアと云ひ乍ら茶碗を取て辰五郎に打付コレ辰五郎我を誰とぞ思ふ奥州の跨右衛門と云ふ人は知られし船頭なるが故に此年月多くの人を殺すと聞海上の災ひを拂んと姿を棄て仲間に入込み此難風を同船せし汝を殺さん爲ありと首

筋指み引寄れば辰五郎も打驚きし何程の事やあると跨右衛門も立向ふと思ひの外力量強く小兒の如くお取扱ひれ半死半生に打叩れ働きたらぬを跨右衛門の細引にて縛め乗合せし船乗共お彼が年來の悪事何れも知りつらん殊に此頃風聞高く他の船頭此龍丸を見る時ハ首を道を除て見られぬ様よなせば自然犠牲おするよ乗合の者を殺す様よ成ぬ然らば汝等が命逆も何時しり彼よ捕らぬ且今迄殺されし同業の仇なる辰五郎をさひなみ殺せと云ふお皆々悦びて跨右衛門が下知お従ひ辰五郎が船へ細引を結付海中へ投入又ハ引揚げ投入れて終に細引を切捨けれバ運搬浪お包まれて行方も知れず成よける扱も其船の恙なく江戸品川へ着しけれ毎もの如く荷物を揚終お大坂へ歸帆の上町奉行所へ送一辰五郎の事を訴へしよ伊吟味の上辰五郎の家財の關所仰付られ妻子の親類へ傳下し成ぬ又跨右衛門事の上の伊評讀有て數多の伊書美を賜り暗の錦を飾りて古郷

奥州へ立歸りしと又親類へ引渡されし辰五郎の妻子の所持の金子も澤山あるゆゑ旅店を出し辰五郎の一人を近江屋喜左衛門と改名させぬ去共是も親も似て大膽なる者故壯年よして妖人ふ奇術を習ひ盗人を成しより親の名を受けて流辰と言ひ觸せしが今あては四十人程の手下も付て榮花お月日を送りける

夫ハ初置幸藏ハ彼流辰の引付にて道頓堀の旅人宿なる三右衛門の宅へ至れば女共が取次て先此方へと町噂は奥二階へ案内されしは幸藏一間は座り込て主人の出るを待折しも後の唐紙おし明て上意くと左右より捻上んとする不意の捕方早くも幸藏身を撲せ捕方二人が襟袢を取りと取て押へ付け鎖も眼を見明いて邊りよ心を配つたり

○三右衛門幸藏は家の手引する事

井屋小僧織越の家を割る事  
其時此家の主人なる三右衛門が出來り是ハ幸藏腹中の手の内蔵心せり金藏才助兩人も大よ苦勞くと座を改

めて挨拶なし扱今か主が持参せられし彼書面みて様子も知り且ハ度胸を試し見よと流辰よりの詞も有る故子分が居しを幸ひは鳥渡間似合の似捕方必らず心よ懸玉ふなど云れて幸藏安堵なし先三人お近付の詞を述る其中は早持來る酒肴四人一座の酒宴も同氣求むる相性みて三右衛門の幸藏に是より一里半許り道程離れし在所にて字を花又と言ふ處お仕事なるべき家あり夫ハ勿論此頃の出來分限でハあるけれど織越茂十郎と云ふ百姓で仲間の者ハ忍び入んと度々狙ひの付るもの、中々用心嚴くして入事ならぬいさくしは主此地の手始よ一ト働さしてハ如何と言れて幸藏大に悦びつ、夫ハ一人で働て見たし併し私も上阪たむりりて土地不案内の事なれば日暮の中ハ其處へ行く様子を見届け置たしと言ハ三右衛門も尤もなりと夫より漸々盃蓋を納め率とて子分の宿も残し三右衛門と幸藏兩人花又を指て行ければ程もあらせ織越の家



の近くへ來りしは三右衛門ハ幸藏お目立ぬ様かと目く心せして様子をお概敷へし上我等ハ少々用事もあれハ何れ明日逢んどて其儘袂を分ちたり幸藏跡ふ只一人織越の家の様子を見るお成程何分嚴重よて忍び入るやうあらざるより工風なしつ、路を轉じて古道具屋を尋ね行き其處おて直安の大小を求め旅侍士の如くお拵立ち且竹杖も纏りながら其日の暮る頃ほひお織越の家よ到りて我等元來浪人なるが長の頼みお路用と遣ひ輕儀至極を致す者大家と見受て一宿を御無心で度参つたりとさる哀れ氣よ言述べハ内より此家の重立し召仕ひの者なるよや四十有餘の男が出て成程見受す所未だ若年の身もて大儀の其様子一夜位の事なれば止しして選たけれども存りハ知りませぬが此頃當所近邊ハ盜賊多く徘徊致し誠ハ物騒の時節なれば假令お病人よても見知らぬ方へ止めやすハ何分参らぬ事ありと譯を話して斷るを幸藏向も手を突て浮尤もよハ存ずれと尾羽打枯せし瘦浪人殊もハ病氣上りの事にて最早僅の道程も歩行兼たる難儀の身置何

卒に家祈禱とも思召れて一夜の伊慈悲と下さるやうよ  
 と只管頼めば兎も角暫く待給へど彼召使ひの奥へ行し  
 長有て出来り委細の事を主人お告しよ夫の定めし伊難儀  
 ならん一夜の事なら伊宿せせと主人も承知致せし事ゆゑ  
 先洗足して伊通りあれど云れて幸藏打悦び種々禮を述つ  
 へも足を洗ひて案内運れ一室の中へ通りければ間も無  
 膳を持来りて夕飯さへも進められし向々厚く禮を述て  
 漸く飯を喰終れば又彼以前の召使ひが夜着布團を保持来  
 りて先伊勝手伊休み有べし小用へ行よ那を廻つて向  
 ふの方へ突當れハ雪隠なりと敷へ置き又幸藏の枕元へ手  
 燭を置いて出行ぬ幸藏床に入りし後暫し考え居たりしが家  
 内の様子を伺ひてそつと寢所を忍び出開き處を探りく  
 奥の一室に到り見れば襖越し火影の見ゆるふ是を主人  
 の居間ならんと身を忍ばせて遠間より内の様子を伺へば  
 年頃六十有餘の老人十餘盤を前へ置き帳面を調へ乍ら百  
 兩包を拵へてハ小籠筒へ入るふを幸藏驚と見定めて元

の座敷へ竊かき歸り又床ふ入て夜更を待し早丑満過とも  
 成しを時分の宜と起出て今度ハ手燭へ灯を燈し寢所へど  
 到り見ればいと大なる居煙裏の上の自在竹茶釜を掛あ  
 り又其側ハ松葉枯枝澤山積てありければ幸藏そつと其  
 中へ其煙燭を差入つす火の移る様となし元の寢間へど  
 忍び歸りそら歸して居たりけるハ彼煙燭より燃上り次第  
 くよばちくと音の恐しくあるまゝハ黒煙家内へ行渡  
 れハ人々驚き目を醒し火事よくと立騒ぎぬ  
 ○幸藏大金を土中へ埋むる事  
 井三右衛門三ヶ條異見の事  
 扱織越の家よてハ夜中よ至り寢所より燃上りたる鹿相火  
 家内の周章大方ならず殊も主人の茂十郎ハ寢番の儘お  
 て馳行つ水よくの差圖よつれ家内ハ残らず寢所へ行集  
 りし様子を計り幸藏ハ見覺え置し主人の居間へ忍び行き  
 手早く鏡前押明て彼小籠筒より百兩の包を五個取出し以  
 前の如く鏡を下し夫より庭へ下立つ、聞ひの板塀を安

々乗越え烟の際へ飛下て盛上てある烟の土を深く掘て其  
 中へ今盗み來し五百兩の金を埋めて元の如くし又其上へ  
 細き竹を挿て己れが見覺えとし以前の塀を乗越て庭より  
 内へ這入ながら其處等のべりを能くなして自分の寢間へ  
 歸りし頃ハ漸々失火も鎮りて人々安堵の折なれば此方の  
 都合が宜つたど獨り笑ひを含みつ、布團の上よ座し居し  
 早東雲と成し時昨夜世話をなし呉しりの男が入來りて  
 折角休み居られしを不時の事よて客人よもさぞ一騒々  
 しく在せしならんと挨拶されて幸藏ハ氣の毒良座を敗  
 め誠よ不時の災難ふて伊家内何れも大なる伊心配よて有  
 しならん併し早速消れしハ恐悅の事なりと當座を繕ひ夫  
 より猶も言ひけるハ斯伊取込ハ長居致まハ却て伊邪魔よ  
 なる事故最早伊暇仕つらん然ハ伊主人へハ伊身より宜く  
 伊禮を申與よと禮を述べ彼男ハ先々湯漬杯喰て緩々  
 出立致されよと留るを此方ハ絶て斷り來りし時の竹杖よ  
 眼輪くとして其家を立出様子如何よと伺ふハ織越方の

鏡火せし悦びなりとて酒酌替し村より大勢集り居れど表  
 ハ未だ薄暗く人の往來も非されハ彼庭口の塀の前なる見  
 覺え置し竹を引抜き土を返して改むるよ是ハそも如何よ  
 入置し金子の今ハ非ざるに流石の幸藏仰天して正しく爰  
 へ埋めしハ人よ見られて盜れしりと暫く茫然たりけるハ  
 まゝよ只取る金銀ハ心配しての間合ぬと足を早めて三  
 右衛門の宅へ歸らんと道頓堀へ來り來りしが何分ハ手  
 持居たる油揚を驚よ櫻ハれし心地して氣色悪さよ幸藏  
 が今日の劇場でも見物して夕方豊屋へ歸らんと角の芝居  
 の邊りへ來るよ兄貴くと呼ぶ者ありはてなと幸藏振返  
 れハ三右衛門が子分なる彼金藏ふてありたりき其時金藏  
 云ひけるハ親分が伊身よ達度と今朝此私と才助と道を違  
 へて歩行しハ何所へハ出り分らなりつたハ幸ひ爰で伊目  
 へ懸り先々胸も落付た就てハ疾々伊出あれと云よそんな  
 ら一所よ行よと打連立て至りければ例の二階へ誘ひて三  
 右衛門ハ幸藏ハ昨夜の首尾を尋るハ幸藏頭を掻ながら今

親分お咄すのも實は面目ない譯だが兼て言れし其通り用  
心殿しき那家の構ひ中の様子を知らずして無闇に忍び入る  
危ふく依て斯様くよして首尾能く五百兩盗みしが其儘  
逃ての我仕業と直に知るの目の當り夫故態と塀際の畑の  
中へ埋め置き明方行て尋ねしに蛙さへ見ぬ贅骨の高の知  
たる五百兩又能事も有ふりと延喜直しお芝居でも今日  
の一日見物仕様と思ひし處へはしなくも金藏殿へ行達へ  
バおまへが用が有との事故連立歸りし譯と言ふを三右衛  
門の頼へ手を當おま主が手段の随分宜し然れども火業をな  
したるの眞お拙い策略この世の中は盜賊の仕方も數多  
あるなれと罪なき人を殺す事人の住居は火を放つ事他人の  
妻女を奸淫する事此三ツの悪事の極めて古昔よりして名  
ある賊の右の悪事をなさぬなり幸ひ昨夕の風もなく殊  
家内の人々も早く心付し故大事にならで宜しうりしけ以  
後の必らず慎しみ給へと盗人よも又一理ある邊屋三右衛  
門が異見を聞き幸藏大さよ取入て實お親分の言る、如く

我も心お快氣の思ひし譯おのわらざれ共外は是ぞと趣向  
もなく折角土地の手始めお道入込だ甲斐もなく空しく歸  
るも残念といはば苦し紛れの徒ら事此後の蛇度慎しむま  
すど後悔面は顯るゝよ三右衛門は大小威し實お主  
の見上し者なり我等が出過た異見をバ腹立もせず得心せ  
し江流石大氣の江戸育ち夫お付ての主が盗みし彼五百  
兩の一枚も不足を生せず爰おあり受取られよと言ながら  
手箱の中より五包を率と許りよ耳を揃へて幸藏が前へ差  
出せば此方ハ大いお憫れ果て何して親分此金と云るを  
三右衛門打笑ひ昨夜お主が行し跡未だ土地馴ぬ不案内と  
案じて見れば寐られぬ儘よ寐よとの鐘の夜中頃徐々織越  
が村へ行て家の廻りよ伺ひしよ八つ過る頃家内の騒ぎ火  
事よくと云ふ聲も猶も忍んで居たりし折誰とも知らず  
庭口の塀を乗越え畑の中へ物を隠して又元の塀を越て内  
へ入る故跡へ廻つて堀出し見れば夫なる五包是ぞお主が  
仕業よと思へバ其儘打捨て立歸らんとせしりども石も物

云ふ此世の中若も他人よ見付られお却つてつまらぬ譯  
なりと懐中なして歸りし何せ此家へ歸らるゝお主へ手  
渡しする心とされて幸藏疑ひ暗扱もくと三右衛門が其  
親切を謝して悦び借改めて言やうハ我等が一旦なき者と  
思ひし金の手よ入りしに全く親分の汚腐故此金ハ貴方と  
私とニツ分此後のどうり兄弟分よして下されと言ふ詞お  
三右衛門も打悦び兄弟分の我よりも實お願ふ事なれども  
お主の盗んで来た金を假令半分なりとて我等が貰ふ所  
謂なし只お主お言ふべき事ありおの淀辰の手下共ハ四十  
餘人も有なれバ彼等へ何程の仲間入の印を遣バ何うよ付  
萬事都合も宜らんと言ふを此方ハ承知して夫ハ疾うら思  
ふて居る事そんなら兄貴此金ハ無き物として五百兩の内  
三百兩ハお前と淀辰又此私と割符して残りの二百兩ハ近  
江屋の手下の衆へ能き様は何卒分て下されと言ふお今更  
三右衛門も夫迄とハ辭退し兼て夫なら然言事よしやうと  
夫より酒宴を催して又幸藏を饗應たり扱また子分の金藏

ハ先お才助を尋お出し漸く連立歸りしよと幸藏ハ二人  
に向ひ今日より親分三右衛門と兄弟分よなりたりと先此  
事と語り聞せておまへ達の別段なりとて我分取し百兩を  
ニツよなして金藏と才助と廿五兩宛を與へ己れハ五百  
兩の内僅五十兩を取置しハ盗み物と云ひ乍ら欲を放れ  
し仕業なりけり

○幸藏次郎吉と改名の事

并お先の半次圓覺寺の繁昌を告る事

斯て其日の夕方よ三右衛門ハ幸藏と打連立て天満なる近  
江屋方へ急ぎ行き先淀辰ハ對面して三右衛門ハ花又の  
仔細よりして五百兩の金の割符を告知せ金百兩を渡しけ  
れバ此方も幸藏が氣性を譽め然バと其意お打任せ禮を述  
つ、請取て又返禮の仕様も有んと其夜の二人ハ厚く饗應  
し扱淀辰の手下の者へ幸藏よりの嘲を告るよ翌日より  
三三人ハ限りとなして近付に幸藏が座敷へ入来るよ儼然  
氣なる武士もわれハ榮和なる町人風もあり又ハ殊勝氣の

出家も来る寄席出稼の諸人如何なる人々目をつけるも盗みを働らく者共どの思ひも寄らぬ人々が其名を告げて町噂は土産金の禮を述るゝ幸藏大いゝ淀辰が遠慮のほどを感ずる中ふる是での上の役人の目を盗むも尤もなりと思ふよつけても淀辰と三右衛門等が賊あして義心の厚きを稱したり扱又獨り思ふ様我父母の思を忘れ遠く古郷を離れ来て不義の業をばなしながら父母も名付られたりし幸藏と呼ぶの勿体なけれバ切ての名など改めんと或日淀辰お打對ひ探て三右衛門と兄弟分の義を結びたる事なれば彼が弟となるを以て次郎吉と呼替へんと言ふを淀辰打笑つてお主が才の三右衛門の遙りよ上ある事なり何を自身少年を以て卑下する事のあるべきやと言へ幸藏の聞入す次郎吉と名を改めぬ扱鼠小僧次郎吉の淀辰が受人と成て長町お世帯を設け表向の博奕打の附合をし内証の夜毎は大家へ忍び入て多くの金銀を盗み取りそれを博奕場へ蒔散し又お新町の遊女屋も現を振して金銀を湯水の如

く遣ひのすれど又貧苦の者と見れば身分も應じて與へたり然れど平常姿を装して少しも其名を知らせざれば貧人共の何れも皆其何者なるやを知らず且又人の疑ひを避んが爲め博奕場にて三四十兩も勝時今日百兩儲けしと言ひ五六兩も儲る時十五六兩儲たりと恒に偽り言ひ置くゆゑ雖も次郎吉が金銀も不自由なきを疑はず只博奕の上手なる者なりと評判能く三年餘りも暮したれど絶て悪事を知る者なりと扱次郎吉の盗みのそれども中人以下の家への這入らず且又大家たりとて陰徳をなし善根を施す家の都て除き假令無慈悲の家なりども二度盜ん不便なりと思ひし故に大坂おて目を懸し家の大方の運入盡して此頃の少し金も差支へしより能く相談も有んりと淀辰方へ到りし幸ひ三右衛門も來合せて三人一座の酒盛りうち寛いで話して居し時會釋をなして入來る此淀辰の手下なるお先の半次と云ふものなるが聲を密めて言ける親分島渡開給ひ私が先頃京都へ出て處々を遊ん

で居た處餘り暇が長い故見物がてら尋ね行し二里半許りの在所にて字を十生目といへるお無明山圓覺寺と言ふ山寺あり今の住寺の今釋迦と又生佛と云言觸して其隣村のや及ばす五里十里の道を厭はず加持祈禱を願ふ者實は夥多しく有て大繁昌の淨利益の盲目も目も明き勝行も立など針程の串を棒程も言て投出す賽銭の座も積つて山寺の山なす許りの容子ゆる透りの出茶屋で仔細と聞しお今の住寺の四五年以前雲水の僧で何處うら此山寺へ來しものおて逗留中お先住の和尚がくれの遺言として自分お忽地跡へ直り夫より後の一概お不思議の利益著るく人の信仰次第お増て今では大壯富貴を爲し贈は由れば三千兩も金を貯へ居るとの事殊も住持の大力おて彼古しへの辨慶とも言ふべき程の者なりと茶屋の主人の物語りまさり嘘つく亭主と見えねバ疾く親分お告ぐもの急いで只今歸りし處と言ふお淀辰二人は向ひ此頃の味い仕事もなき折なるお幸ひ斗次が聞込し彼山寺の賣主坊主其奴

を欺き有金を取ん如何と言詞も三右衛門の思案をなし私も隙々其隙の聞及んでも居る事よて今年次が言ひし如く富有の寺は相違なららん然れども大力ありとの事ゆゑ此方も心持へなくての毛を吹き疵を求めると言ふ味も落んも知れず能く手段を巡らされよと言へバ次郎吉打笑ひ兄貴の分別餘りお過ぬ是より連立彼處へ参り三人寄て文殊の智慧手段の其時幾許も有へし然も非ずや親分と言ふお淀辰打點頭虎穴お入りされバ虎の子の得難し兎も角も今宵夜船で伏見へ行き船り相談せんといへバ三右衛門も其意お任せ先のお半次を供として四人連立兼支度首の小笠お脚半草鞋何れも履お覺之の一刀日脚も長き水無月の暑さ烈しき下旬船場を指て出行ぬ

○三賊十生目村に到る事

井三太郎後家物語りの事

鼠小僧の淀辰等と俱に夜船お打乘て其次の朝伏見お着朝の支度を調へて夫より京の片邊の彼十生目をさして行き



其日の夜頃その里の山寺近くへ到しよ以前邊鄙の土地  
ふして酒食の店も無しを先頃よりして圓覺寺の加持や  
祈禱の利益も諸人の参詣夥多しく爰や後迄よまま  
の物賣店も數多出來て今大方の驛路よりの賑はしうり  
き有様も次郎吉等の感心して或る酒店に入り酒宴をなし  
つゝ淀辰の二人は向ひ兎も角も寺に到りて如何なる様子  
う見ての後計らひ呉んと囁けバ他の兩人も然るべしと半  
次を酒店に待せ置き是より三人の爪上りふ二町あまうも  
登りければ小芝屋の門の柱に圓覺寺と記しあり門を潜つ  
て内へ入れバ其正面の本堂にて祈禱申の刻限りど書記  
したる札有よど参詣人の我膝前へ一と詰懸るを世話  
人なるみや古變たる袴を若し二三人が其人々を制しつゝ  
願番も出給へど只さへ熱き極暑なるは群衆の人は蒸立ち  
れ老若男女押合へしあひ格子も倒さん勢ひよ世話人共の  
呆れ果て途方お暮るもいと可笑く加持する僧を遙く見る  
ふ年齢六十有餘にて頬骨頭ハれ白き髪ハ長く胸の邊りふ

垂れ身ハ金襴の袷袢を殊勝らしく着用し結加跣座し  
て我前ハの經机など飾り立て口ハ何やら唱へつゝ加持祈  
禱のバ授けるも田夫村婆の何れも皆隨喜の涙ハ袖を濡せ  
り淀辰等ハこれを見て彼ハ正敷孤遺ひく左なくハ山脚り  
兎も角も正しき出家でハなりらふと囁きながら猶も又群  
衆ハ紛れ入込て住持が居間杯見定め置き再び半次を待せ  
置し酒店に到りて淀辰が主人を呼びて言ハ様ハ今日ハ取  
願參詣人の多き譯も何時迄待てバ加持を受ける事もち  
ず併し翌日出直さんハ誠ハ難儀の事なるが爰等邊りハ何  
處なりと宿貸家ハあるまいかと問へる詞ハ主人ハ思案し  
去バ此地ハ寺の傍で漸々此頃開けまして斯ハ賑ハひま  
まもの、未だ旅館屋までハ出來ませぬが是より四五町參  
られると三太郎後家とて六十近き一人の婆が住む家ハ以  
前相應の暮しよて住居もなうく手廣のもの今でハ外ハ  
便るへき者さへもなき獨身よて其日暮しも漸やくなれば  
見苦しさハハ掛ひなくハ元心宜樂ゆるふ頼み否との

中まゝ兎も角行て浮覽なさへと云よ皆々打悦び酒酌替し  
て頼を集め密談數刻も及びしよ今夏の日ハ長きさへ早暮  
近く成たりき四人ハ食事も十分齎せて酒食の代の其外ハ  
茶代をばづみ立出れば茶屋の亭主ハ宵閑の足元照す小提  
灯金の光りよ浮雲なく先立送て彼婆が早くも門に到りし  
りバ此處にて主人を勞らへ歸し次郎吉ハ先へ行き頼んで  
來んと皆々を門の處へ待せ置き本家よ入て見し感嘆々ハ  
蚊蟻しかし乍ら頼りよ糸を取て居たるも次郎吉ハ小腰を  
屈めて若婆さんハ無心乍ら道に迷ひし旅の者連の者ハ  
底豆を頼らひし跡故ふつひ此日の長いよ歩く道さへ掛  
どらず最う京都へ行馬駕籠もないとの事見聞して浮願  
ひなるが何んな處でも能い程よ今夜一夜浮厄介ハ此方へ  
泊めてハ下さらぬりと云よ婆ハ糸車の手を止めて此方  
と身遣り夫ハ脚々浮困りぢらん見らるゝ通り家の中ハ廣  
けれども壁も落て壁もあらず其上ハ蚊蚊と防蚊蚊さへ  
なし然し夫を承知なら遠慮ハ入ぬ此破家幾人なりども泊

られよと言ふも次郎吉打悦び然様なら浮願ひすと表へ出  
て淀辰ハ云々と囁くも皆々も承知して内へ入婆々も厚く  
禮を述べ老婆ハ團圓裏ハ掛し土瓶の温湯と茶碗二ツを  
四人の客ハ應えたり四人ハ家の貧さを互ひよ不便と思ひ  
つゝ淀辰婆々ハ打向ひ私し共ハ今そこで飯も酒も十分ハ  
遣つて來たれば決して掛らすハ仕事をなさるが能い夫に  
付ても見受し處以前ハ何の何某と由緒有氣の此住居夜  
なベ仕事ハ片手業身の上咄しを聞されよと云へハ老婆ハ  
涙を流して氷の流し人の行末いつて返らぬ事柄を浮明し  
中も泪の種元私しハ此土地の者ならず生れ古郷ハ江戸な  
れども若氣のつした誤りハ男と二人亡命して大坂の地  
お暮て居し其男ハ流行病の數ハ入儘ハ頼ひ死しける故  
今更何と詮方なく江戸へ歸らんふも二親ハ幼き時ハ死果  
て頼みとするハ兄許り然れども夫さへ死絶しと風の便り  
お聞し故他人の世話で漸々と料理屋の酌女ハ雇ハれ居  
りしよ此家の主人三太郎殿ハ大坂へ來られし時酒の相手

よ呼れしが後となり此家の女房となつて間もなく男の子  
を儲け名を三吉と呼なして寵愛せしが三吉も成長し隨ひ  
酒を好み遊女通ひの故郷より早晚博奕打の仲間へ入親仁  
願ひ此村にて代々名主とする家なるも三尺帯長脇差自  
慢貞よて押歩行を種々異見なしたるも彼が甘才の其時よ  
親を拾て置手紙江戸へ行とて家出せしが其後の風の便  
りもなく憎い奴との思へども懸替の無き一人子故今日の  
踊るう翌の又便りがあるりと夫のみを樂しむ暮す愛月日  
昔しの我身と思はれて親も等しき一人の兄よ苦勞を懸し  
私しが因果の巡る我子の三吉斯迄親を欺りせなば又彼が  
身も報のんりと末の末迄子を思ふ親の心の遣方なく其  
愛中よ五年以前此村の頼み寺なる圓覺寺の住持が死なれ  
て終つ雲水の旅僧が遺言なりと云ひなして後の住持と成  
しより今迄の去る事もせざりし加持祈禱をなし所々の人  
を集るを三太郎殿が兎や角言ふて止めしが其罪を佛の情  
ませ給ひしと今だよ人々罵ると聞私しの胸苦しき其年極

月の事なるが此家へ盗人忍び入三太郎殿を切殺し有金  
らす奪ひたり夫より後の此妻一人仕様様も泣けり寄  
る年故田畑の業も出来兼ねバ只有ものを賣喰して漸々  
今日迄生甲斐無命を繋ぎ居ませるが行術知れざる三吉が  
再び歸り來るりと夫のみ日毎よ待ます斯身の恥を汚  
しやも若其悴三吉も逢ひ給ふ事の有もせバ婆が難儀の今  
の身の上知らせてお貰ひやたさとの云へ雲を掴むと云  
ふ當ふのならぬ事乍ら深切の伊等お甘いてや悔悔咄し  
唇薄き婆なりと笑ひ給ひそ旦那方と泪乍らよ物語りぬ  
○三賊圓覺寺へ忍び入事  
井住持を生捕事  
初も老婆が身の上咄しし孰れも不便と思ふ中も次郎吉  
の心中我身も矢張彼三吉と同じやうよ親を拾て遺言他  
國よ三年餘り江戸小居らるゝ親達今此婆の如くふて無  
や歎いて居られんと身よつまされて自くら頼りよ古郷の  
懐りしく今宵の仕事を限りとして最早江戸へ出かせんと

思案しながら淀辰等と俱々老婆を慰めつゝ奥の一室を借  
受て蚊燻しの灯を燈火の代へ何れも時刻を待内お老婆も  
最早寝たる様子次第よ更る真夜中の丑満頃よ成けれバ時  
分の長と半次郎を其家へ殘して三人連立見定め置し圓覺  
寺へ到るや否や淀辰が先へ立て本堂へ其手を翳して差招  
けバ得たる奇術の不思議も自然と入口の戸を開たり三  
人其處より忍び入俱々住持の居間よ到り有明の燈火を接  
立て釣たる蚊帳を三右衛門が切落して和尙起よと叫ぶ  
聲と諸共に次郎吉の用意の細引取出し蚊帳より出るを戒  
しめんと待折しもぬくくと這出るの住持ならぬ五十許  
りの老父なり三人の自見合せ是のど許り惘れしが淀辰の  
老夫お向ひ汝の何者ぞ住持の何方よ有と偽らず告よと言  
ふよ老父の三人の様子を見て何れも盜賊と見て打驚き聲  
を震はして我の當寺の下男與助と言ふ若和尙様の毎も夜  
分り居りませぬ留守の我等が獨り寝の寺の明店同様よて  
ほんの佛の造作許り禪宗ならねど無一物盗人さんなら伊

氣の毒と斷り言ふを淀辰が是親仁手前も此寺の下男と言  
ふららハ豈夫住持が居處を貯へ金の有處を知らぬと言ふ  
事これ有まじ若言ぬならバ言して見様と腰の一刀抜放し  
目先へすつと指付けバ下男の顔色青染てマアく待て下  
されまし是許りの和尙様より様々堅く口止され何な人か  
尋ても云ふてのならぬと云はれたれども命も替る寶もな  
い實の此本堂の後お別間が有て其所お旦那居らるゝな  
り併し其座敷へハ外より這入所なし此臺の下を明けて見  
られよ座敷へ通ふ板道あり斯許り敷へし上ららハ我等が  
命の此まよ何卒情よ助け玉へ南無阿彌陀佛と伏拜むよ  
不審乍らも次郎吉が腰を一枚押明て下なる板を取除るよ  
中ハ分らぬ眞暗黒手を挿述て探り見れば其處よ階子を懸  
てあり次郎吉先へ入んとするを淀辰が押し止め私先へ見  
て來やうと階子を下りて行程も僅六尺許りあして又横の  
方へ行く道あり其道六尺許りを行けば又横よ道あり又々  
其所を行よ三間餘りあして突當り又上り口あり其階子を

上つて見るよ六疊許りなる綺麗の座敷に蚊帳を釣て行燈の側よ酒肴杯取散し蚊屋の中よ晝間見覺えし老僧が年若き女子二人を左右よ寝させ酒に甚く酔しと見へて高窟お眠り居たり扱ひ此坊主も矢張賊の仲間なるり今斯の如く寝たる處の我一人おても縛しめらるれと斯ての兩人が本意なく思ひん先々兩人を呼來らんと彼階子を下りんとする時和尙早くも目を覺し蚊屋の中より覗き見るふ一刀帶せし曲者ガ階子を下りんとするさまを驚きたれども年經し曲者盜賊待と言ひながら蚊帳を刎除突然と淀辰ガ帯引捕へ捻伏んとする勢ひは淀辰横お身を捻り其手を取て捻上りと攫みり、りりせしりども年よ似合ぬ和尙の大力淀辰元來然者なれと終に組伏られたりける其時和尙の女を起して細引を持來よと言ふよ女の盤ひ乍ら戸柵より細引出して和尙は渡せば住持の夫を受取んと左りの手を出すと俱よ側を見違る其折しも穴竅の中より踊り出たる次郎吉ガ和尙の肩よ手を懸てやつと仰向お引倒すを淀辰得



たりと剣返し今の三人上を下へと組合ふ折柄三右衛門も早く此場へ走來り俱よ力を添し程は流石の和尙も縛しめられしよ切齒をなして目と見張こ、な小盗人共汝等如きよ縛しめられる我ならねども昨夜の酒を過せし故不意を許られ此不覺率速りお繩を解左なくハ賊殺し與る、とど息急荒く匂りしハ實に凄じき勢ひなりし

○鼠小僧天井働きの事

井三賊穴熊ガ金を奪ひ去事

狸跡よ毒を以て毒を制すと今惡僧ガ三人と口を極めて罵るを此方の三人ハ笑ひ居しハ淀辰竟よ聲を聞えし此賣僧め汝先空言を止めて命を惜くハ今迄諸人を欺きて賣りし金を疾く出せサア其有所と白狀せよと云へハ和尙の聲を荒らげ汝等如き小盗人ハ我名を語るも残念乍ら今宵の仕義お是非なくも言ひ聞す問能く聞き以來ハ此身の手下とあれ我ハ北國お隠れなき穴熊大太郎といふ強盜なり汝等如きが追ればとて争り金の有所を知らせん夫より早く頭

を下て報謝を願へハ百や二百ハ異ても遣ふと云る詞を打消しながら淀辰ガ業突ばりの欲張坊主め云すハ云など腰刀抜より早く首打落し傍なる二人の女よ向ひ汝等ハ何者ぞと問よ女の慄いて恰も面色土の如く聲も出兼しハ一人の女云ふ様私ハ京都の嵯原に近き藤子の龜と申者是なるハ同業の花と申者なるハ此月始めハ二人して相談し互ひハ持病の瘵ガ強き故人の噂お聞及びし圓覺寺様ハ何様の難病おてもお加持で愈すと言ふ事故何卒急して頂度と漸々暇を貰ひ駕籠に乗て此寺へ参りしお其日の生憎休みど申事よてお断りありしより力も氣も振て歸らよとせしお此寺の與助とやらが呼止めて和尙様ガ言る、よハ折角京都より態々來りし者を無下よ歸さん氣の毒なれば連て來いど仰やるゆゑ一所よ來よと連れしを偽りどハ露しらす其詞よ任せし處一人宛此隠れ座敷へ押込られ否應なしの無理往生憂き月日を半月許り地獄の責も是程の苦しき事ハ有まじと泣てハつくり居りましたを今晚貴方様方がお出ありしハ誠ハ幸ひ何卒お慈悲よ二人が命お助け下されて此寺を逃して下され拜みますと年増の龜ガ言

ふ尾よ付てお花もともよ手を合して頼む詞のいちらしさ  
 又流辰ハ打點頭修前達ハ罪ハなし命取らぬハ勿論なれ  
 ども此惡僧ハ貯へ置し金の有所ハ何處なるリ定めし知て  
 居るだらふ夫を包ませ知らせよと云ふハ二人ハ居置る行  
 燈ヲ指さして是の上にと言ふ側より次郎吉私ヲ見ませう  
 と云ひつゝ其身を閃めりし件ハ行燈と踏臺として天井へ  
 と手を懸るが否や板を一枚押明て天井裏へ這上り中を尋  
 る形勢を藝子二人ハ云ふも更なり流辰三右衛門も憚る  
 許り其身の鹹み軽くして自由自在なる働さよ舌をど巻て  
 感じける猪次郎吉ハ天井の中を那處此處と探りつゝ文庫  
 三ツ四ツ取出し手渡しするを三右衛門ハ下ふて是を請取  
 り跡ハ蜘蛛の網をつりりだど戯れ乍ら次郎吉ハ足と放すと  
 見えたるが飄然と下へと飛かりければ兩人ハ是を勞らひ  
 つゝ終つ三人一致して麻呂敷の大なる又文庫の金を打  
 明けて其儘取と包みければ此度ハ私ハ荷物持親分先へ行  
 きさへと三右衛門ハ金包を肩お引懸立上れば流辰ハ先  
 立又次郎吉ハ跡ヲ添ひ二人ハ女子と誘ひて元の座敷に立  
 出るハ最前次郎吉三右衛門ハ彼板穴へ這入し時下男の與

助を腕りと柱に縋り置しりバ動きもやらす眼許り光らし  
 亂視くして居る有様を見て三人ハ打笑ひ見向もせず  
 門へ出れば半次ハ其處ハ待詫て親分餘りハ遅い故先刻  
 り待て居ました首尾ハ如何と尋るを夫ハ固より上々吉夫  
 ハさうと宿を借た老婆ハ幾許り遠たうと云へるを待す次  
 郎吉ハ夫ハ先刻私ハ出懸居爐裏の側へ小遣の餘りハ四  
 五兩有た故鬘斗を付て置て來たが又此後幾許でも持して  
 遣たが宜らふと云ふハ流辰三右衛門も行届きたる次郎吉  
 が取扱ひを感じつゝ夫より半道程行しハ早夜も明近く  
 りしよぞ此處まで流辰以下三人ハ二人の藝子と道引違へ  
 大坂指て立歸りぬ

鼠小僧實記上巻畢

編輯人不詳

出版人 東京深川區富岡門前東仲町十六番地 東京府平民 廣岡 幸助

發兌印行 東京橋區三十間堀二丁目一番地 山内 文三 泉 三 期社

定價一冊金二十錢

鼠小僧實記中卷

○與助大太郎ハ惡業を白狀の事

井次郎吉宿屋の亭主を欺く事

借も十生目村にてハ其次の朝世話人共ハ例の如く圓覺寺  
 へ打連立て行たるよ何り様子の怪しきより直さま住持の  
 居間へ到れば下男與助ハ慘酷もも縛しめられて居たるハ  
 ぞ早速解て仔細を問へば此與助も和尚とハ同類乍ら偽り  
 て只盜賊の忍び入しと語りしのみよて和尚の惡事ハ少し  
 も言はぬハ世話人共ハ不思議と思ひ先二人計り中へ入て  
 彼座敷へと至り見れば和尚ハ横死の有様よこは如何ハ  
 と打驚き只事ならずと早速村役人ハ告知すれば直其筋  
 へ訴へ出しハ檢使の役人出張して彼板穴の様子より和  
 尚ハ死せし有様杯篤と委細ハ取調へ與助を召連役所へ到  
 り殿しく吟味したれども與助ハ偽り陳するのみ然れども  
 何りハ口の合ざる處ありたるより拷問ハ懸て責問よハ與  
 助ハ苦痛ハ堪へ難て和尚の事を透一ハ白狀したる趣ハ

今の圓覺寺の住持と云へるハ元北國の強盜よて穴熊大太  
 郎といふ者なるが彼ハ山中ハ成長して自然ハ備はる大カ  
 あり壯年の頃より山盜となり旅人を殺害し金銀を奪ふ事  
 數知れず殊ハ山中よて怪しき異人より奇術を傳り人を  
 迷ハす事ハ妙を得たれば其業を以て愚民を迷ハし金銀を  
 貪り榮花を盡せしハ邊鄙の所ハ自由ハ足すと都近くへ姿  
 を替て來りしハ幸ハ圓覺寺ハ逗留の折り先ハ住持ハ死  
 去せし故遺言と偽り後住と成り彼奇術を以て愚民を迷ハ  
 し加持祈禱をなし多分の養錢を貪りしが十生目村の長た  
 りし三太郎と云者ハ是を拒み支へしと復恨に思ひ或夜其  
 家へ忍び入三太郎を殺し金子を奪ひ諸人ハ佛の利益を  
 妨げし罪ハ依て此禍ハ罹りしならんと云ひ觸し其後ハ  
 誰ハ憚る所もなく加持祈禱をなし不思議の業を見せし故  
 諸人ハ活佛と尊敬し日毎の參詣ハ夥多しく養錢ハ山の如  
 く集るハ大太郎思ふやう斯數多の金銀集まり酒食ハ飽  
 足と雖も我四十歳よして異人ハ奇術を授りし時女の肌を

騷事を戒しめられしが最早六十及びぬるお何造生んや人間の樂しみをなさざるの愚なり此後奇術の驗し失るども自能き女を寵愛して樂しまん夫も就て其隠れ家を設けんと手下の内大工の有しを幸ひと他の七八人の手下手傳いせ夜な〜忍びて此春より昔請ふ懸りし處漸々五月頃出来上りたるは太太郎の手下の口より洩ん事を恐れ其事は係りし者を祝ひよとて酒を十分飲せ酔潰れし處を切殺して墓所へ一所埋めし故誰知る者も無りしなり然るは此月の始め島原の藝子龜八小花といへるが休日を知らずして來りしを太太郎垣間見て其良美よ心を迷ひし加持をなすと欺き彼座敷へ止め置き好淫せし事共の仔細と逐一白状せしり大助も太太郎が手下にて年頃悪事遺れし懸者故死罪となり又太太郎が首の獄門も勇られける依て今迄活佛と尊敬せし諸人も此有様に始めて夢の覺たる如く大に驚き合りとぞ扱も淀辰等の大坂へ立歸り彼近江屋の離れ座敷にて彼太太郎が貯へ置し金を

を改め見るふ一千二百五十兩ありたり依て四百兩宛を配分ちし残り五十兩を半次と與へ互に悦びの酒宴を催しけるふ次郎吉の言ふ様我等事最早三年も當所居て此頃頻りに古郷の親の懐しくなりたれば此酒宴を別れの盃蓋として一先歸國する所存なりと告るは淀辰三右衛門も名譽惜くの思へ共親を案じて古郷へ歸ると云を止むる譯も行ぬ故切て今宵の夜を俱に飲明し翌日鏡々ど立立われと種々お察應して四方山の咄し其夜を明し初翌日次郎吉の名残の盡じと暇を告跡の住居の事ハ兩人は頼み置き終中太坂を出立して東海道を下り或日水口の驛に宿を取て草臥休めぬ按摩を呼療治をさせ乍ら土地の様子杯を咄し面白き事ハなきうといふは彼按摩の言様世の中は欲と色氣のない者のありませんが此家の旦那くらの強慾たけ人の澤山ありませぬ先伊聞なされし私共の療治代さへも二割宛の割符を取る程故百でも錢の儲かる事なら夜中でも斯歩くし又斯言ふ金儲けがあるなぞ、人々咄でも

すると現成て儲かると見込が付はせん〜金を出しますぐ又這入事も多く先此土地での金持されども毎も替らぬ泣事許り殊も今より還言して己が死んだら有金の一所も早桶へ入て埋めて呉と言ふとの事と物語るふ次郎吉打笑ひ金の難しも欲けれ共死んでうら一所も早桶へ入られても地獄へ行て世帯を持たしよも成まひ而して此家の主人の幾歳位と聞ば五十六歳位で伊座りませうと言乍ら旦那腰を揉ませうら横は伊成なされと脊中を擦るを次郎吉ハ居直つて何さ足の草履ぬりら止む仕様と二朱金一個を療治代と與へけれは按摩ハ是を探り見て是ハママ仰山な斯様お多分頂きまして〜と驚くを能いりら持て行な大きき伊苦勞と言ふは按摩ハ悦び勇み其處の座敷を出て行跡ふ次郎吉ハ幾乍ら烟草を吞今按摩が咄した欲張た此家の亭主とらう驚りして遠慮ものと思案をしながら其夜の眠り明る朝顔杯洗つて後下女を呼び時女中さん私ハ商ひの事で暫くの内逗留するら伊亭主ハ然様言ふて

下されと朝飯を喰ひ夫より二階を下來りて一寸買物有ら下駄を貸て呉んな荷物ハ二階へ置て來たり氣を付てよと頼み置き表の方へ出行し〜間もなく小さな金櫃の様な物と其外何やら買調へ二階へ上り乍ら姉さん何り味ひ物で酒を持て來てお呉と云ひつゝ我借し座敷へ行小屏風を立て何り種々と叩いて居る所へ女が來り酒肴を出すふ次郎吉ハ屏風を出て姉さん氣の毒だ此小判を兩替屋へ持て行て二朱金と取換て來て呉なと五六枚出す〜ハ〜と云ひ乍ら出行し〜程なく取替て來りしを次郎吉ハ二朱金二ツを紙包んで是ハ使買だ女中〜遣れハ女の禮を述酌杯して暫く居しを次郎吉ハ未だ仕事有ら酒ハ晩は仕様と晝飯を食ひその女を下へ遣て又種々と夕方迄叩いて居りし〜頼て屏風を取除け手を叩いて下女を呼酒肴を眺へつゝ又小判十三枚を出して二朱金と替て呉よと頼むは下女の長まりましたと二階を下り表へ出んとするを此家の主人が呼止め是々其兩換するといふ金を

一寸見せなと金を受取目録を掛て色々と捻り廻すよと見ても正銘の小判故其ま、下女も渡し腕換ひて考へる様那二階の逗留客の晝前四五枚程小判と二朱金と換今又十枚同じ小判と同じ二朱金も替るの何としたり事や聞か屏風の中で磁々何り叩いて居ると言ふが何もしる怪しい奴ど一人不思議と思ふ折柄下女が金を取換來るを又主人の呼止めて今度己が持て行と金を受取二階へ上り次郎吉が座敷へ至りて私しの當家の主人權右衛門とす者お取替のお金が大金ゆゑ手前が持參致しましたと次郎吉が前へ差出しぬ

○次郎吉金子を騙つて氷口を立出の事

井關の地獄尊由來の事

人を欺くよ道を以てすれば賢者をも欺き得るとりや切も次郎吉の權右衛門は向ひ是はくは主人の使使がら恐れ入ますと言ひ乍ら彼二朱金一兩を紙に包み半分私しも伊厄介も成す故少し乍ら伊前さんへは折付の印よと差出

り仕揚たを兩替して見た處滯はりなく通るゆゑ伊前さんの家の氷も薬の性ふ合のならんと實に嬉しく思つたゆゑ翌日早立大坂へ行て白銀を四五十兩仕入て來て又此座敷を借る積りの處伊前さんを見顯はされて宿を替すはなるまい折角薬の性ふ合し此家の様な宿屋と探すが難儀なれ知られし上の詮方なし併し此事の密々ふと言を權右衛門はよく笑つて且那斯宿をして伊馳走を受るも他生の縁何せ旅籠へ伊泊りならば我等が方々毎迄も伊滯留有様は私しより願ひませ夫は付物の伊相談なるが當節押當家も不廻りゆゑ手間次第は千兩程も拵らへて頂き度其代りも旅籠錢の勿論三度の伊膳も肴を添へ伊酒も伊好み次第は差上せずが如何でせうともみ手をして欲目のなき權右衛門の皺を延しつ縮めつ頻り頼むは次郎吉の承知して夫なら翌日早く大坂へ行程は何程もても元金を用意して置なされ併し見ず知らずの伊亭主より只金子を預るも氣が辨ねははなくて叶はず又金で

せば權右衛門の満面お笑を含み是はくは多分の賜もの有難く頂戴仕つりませすと押頂く折柄下女が持來る酒肴次郎吉の權右衛門は猪口をさし猶も女お種々の肴を言付て馳走をするも亭主も素より飲口故腹の痛まぬ伊馳走酒多く飲程店の儲けと追従たらしく幸樂と互ひ酒酌替す中權右衛門の聲を潜めて斯うては如何なれ共旦那なりく伊器用の伊方先刻の小判の伊手細工うと言ふは次郎吉の打驚さける風情をして伊亭主も斯見顯はされては何をう隠しやさん實は私しの手細工なれ共石や瓦を手細工とするよの非ず白銀を求め私しが秘傳の業を用ひしものにて手数を考へると然程の利益も伊座らぬと言へば權右衛門の膝摺寄シテ其徳の何程位と聞よ次郎吉は仕済したりと然様さ先千兩拵へるふの百兩程の白銀を仕入すは出來上るまじと言ひつ、懐中の胸巻より金包を取出し是見られよ此金の太坂まで拵へしものなるが傍の者も五月蟻故實の遊て來ましたが私も千兩程仕懸度今日知らるゝ通

買れぬ藥なれ共大坂より歸る途伊前さんお預る程お大切お仕舞で置て下されと先よ表へ出し時奇麗なる砂を拾ひ西の内お包み置さしを悉敬しく差出すも亭主の太いよ安堵して然らば是は私しが造りお預りませすと言つ、下へ行たるが頼て箆筒より小粒金百兩を取出し直持來りて次郎吉へ渡し之よて白銀を買て早く千兩の額を見せて下されと大悦びの大欲人次郎吉の員数を改め購取て然様なら翌日早立故女も能言付て下されと互ひよ詞を約しつ、猶も女を呼び酌をさせ暫し酒宴をなせし後其懐枕も付たるが太臆極まる次郎吉の前後も知らず酔臥ぬ扱又亭主の痛しくて寐も遣らず一番鶏の鳴を待兼女を起して膳の支度をさせ次郎吉を起しけるよ漸々起て貞を洗ひ悠々と飯を喰ひ身支度して未だ明やらぬ闇きを幸ひ四へへ行りず東お向ひ土山さして行きたるに其日も暑さ強故日中の茶屋に休み晝餐杯をして申の刻下りの頃關の宿も差懸りぬ扱此宿の邊りお地獄尊の在ますは是は行基菩薩が

蘭州傳書中巻

111

作どの事なるが一年再興の時紫野の休和尙此地を通ら  
せ給ひ我地蔵尊を開眼なし得させんと讀給ひしその歌  
「釋迦の過彌勒の未だ世の出ぬ斯る浮世よ目をあけ地蔵」  
と二三遍唱へ立乍ら小便を仕懸行給ひし里人共の餘り  
の事と憫れて今の坊主其儘の濟し難しと何れも立腹し  
たるが先地蔵尊を淨めよと洗ひ淨めける其夜よりして  
里人共大熱を發し且地蔵尊の近々名僧の來られて尊を  
開眼を受けと嬉しく思ひつると凡夫の爲め洗ひ落されし  
事候みふ堪す再び彼名僧を開眼を願みてと踊り上りく  
示現有しりバ里人の中此事は關係ぬ者大に驚き彼僧を呼  
來れとて跡を追懸漸々桑名まで追付しりバ彼事共を物語  
り何卒今一度開眼せらるゝ様と願ひける一休の再び歸  
るも面倒故是を持行て地蔵尊の首に懸よと古く汚れし憤  
鼻揮を里人共與へられしバ里人急ぎ立歸り歌への如くな  
せしは彼祟り有し里人等ハ以前の如く平癒して何事もな  
くなりしと斯靈驗著る地蔵尊故次郎吉ハ參詣して其處

を立出し早日も暮果て七月三日の月影ハ西山より出し  
て行過る村雲は道いと聞くなりたり然れを元より開路  
迷のぬ眼ゆる眸消傳ひハ本街道を志さし行向ふよりと  
ばく歩行來る者の年の頃定うならね共老人と見え杖を  
つさながらいと殊勝氣は念佛を唱へつゝ溜息して今宵が  
此世の名残りや定めし跡は残りし悴めハ無々歎くで有ふ  
嗚呼金ヶ敵の浮世ぢやと叱り乍ら次郎吉ハ摩連ふとも知  
らす道は年經る松の樹ハ我帯を結び下げて既首を結ん  
どするを次郎吉憫て押止めマアハ親父さん何なせつな  
い事や有りの知らぬが死んでハ花が咲ぬ警輪仔細を私ハ  
咄しなせへと言へバ彼者の泣聲よて何方の何方知らね  
共深切の其詞併し生て居られぬ此身の上何卒見遣し  
殺してといとも哀れの有様なりし

○次郎吉首級を助ける事  
并幽霊に止めらるゝ事

初も其時次郎吉ハ彼者ハ向ひ今浮前が獨り首金ヶ敵の

浮世と言ひしが何程あれバ死なすハ濟のう私ハ話して聞  
せなせへと問は彼者の涙を押へ其金と言ふも五兩り十兩  
の金なら又詮術も有ますが大枚五十兩と言金のあけれバ  
可愛や一人の悴めが終半へでも入られん若半内て死ん  
だなら跡を残りし此私ハ何様の駄きで有ふと夫ハ愛さよ  
先へ死なふと思ひ詰たる今宵の仕義深切ハ忝けないう  
助けると思ふて死して下されと言ふに次郎吉打笑ひ何の  
事だ五十兩やそこらの金で死んでつまる物ハ私ハ江戸の  
大商人何の某しと言ふ土藏地面も澤山持て居る者の悴だ  
が今度大坂へ親仁の名代ハ仕入來た道すがら此宿の地  
藏様の江戸でも名高い佛故供の者ハ宿へ待せ一人で參詣  
み來た途中浮前の死ふと出懸た處へ行逢ひしも皆佛の助  
けて遣れとの誘引合せ私ハ五十兩上る程ハ譯ハ知らねと  
息子の難儀早く救ふて還なせへと嗣巻より金取出し數改  
めて手ハ渡し最う夫で死なすとも宜うらふり早く行な  
と言ひけるハ彼者の眼を潤し夫ハ有難い事乍ら見ず知ら

之の江戸の方ハ大金を貸入所謂なしと田舎育ちの律義者  
返さんとする有様ハ面倒なりと次郎吉ハ金さへ渡せば用  
ハなしと思へバ其儘一趁道を撰ます逃出せしが素より  
身輕の早足故十四五町も遠ざかり發と一思繼々向ふより  
是ハハ選き若先刺より待受すましたと云ふハ次郎  
吉ハ不審して星明り透し見るハ五十有餘の老人ハ杖ハ  
縋りて叮嚀ハ挨拶なす夫ハ親仁さん人違ひだらふ私ハ  
ハ江戸の者だ今人ハ追れて道も知れねハ此處へ出て來  
たバうり併し浮前ハ逢たハ幸ひ何卒宿へ出る道を教へて  
下せへと云へバ彼老人ハ貴君の存存ヒなきハ尤もなれ  
共私ハ事ハ三年前桑名の宿の邊りなる小家の親仁で浮  
座りまを彼時ハ大病故深切の一伍一仕ハ失禮乍ら寝て  
居て殘りを承まひりました又跡よて娘ハ市ハ貴君より悪  
んで下された大金も私ハ見せて悦ばせ夫より十分の藥  
用で今での達者ハ成し此親仁も皆々貴君の事情よて其後  
ハ家業ハ取積き親子三人氣苦等なく暮して居りましたが

浮世草子

〇

娘も今年十六歳庄屋殿の世話にて爰より僅四五即先  
て村の中でも律義者正太郎と云ふ者の女房に成ました  
先も親がな故一所成宜しうらふと庄屋殿の差  
圖に任せ今で桑名の小家を賣て弟の太吉と私し俱々一  
所此方に住居して居ります程何卒是非く立寄と  
云ふ次郎吉の心中の中切の孝女お市の親なりしと思へ  
バ今疑ひ晴し立寄て世話成んも氣の毒と暫し猶豫  
なしけるは跡より追來る二人連一人の若き男が提灯の火  
影をうさし咄しをして居る次郎吉も向ひ若や爰へ江戸の  
浮方の参りませんうと尋る詞と諸共連の親仁が次郎吉  
の顔を情々見て悴よ此浮方ちや今私お五十兩といふ大金  
を下されて死ぬる處を救ひ下された江戸の旦那様  
はないと云ふ若き男の腰を屈め是れ親仁の命を  
助け下されし旦那様で浮座りすなり私し此關の宿の者  
よて荒物渡世をする政吉とす者今度京都の本願寺様へ土  
地の講中の者少奉納金を致す迎集めし金お五十兩私し



吉の迷惑して居たりける

○次郎吉孝女の家を忍び出る事  
井吉岡村の落着を聞事

持て参る關が當り今日晝過世話人方より金を受取て我家  
へ歸る道様子を知りし悪者が待伏して直に喧嘩を仕懸二  
人して乱妨も私しを打擲なし彼五十兩と奪ひ取り行  
衛も知れず逃失し且詮方なく我家へ歸りしせしもの、無  
言で居る譯も行せ親仁も咄しをして何卒金の工面をど  
言ひ置き當りなければ如何うせんぞ獨り我家を立出し  
が親仁の話しをした時痛く力を落したる様子見受し  
事なればどんな間違ひでも有てならぬと又立歸る我家  
よの親仁の見えね爰彼處と尋ねし漸々道よて出逢ひ  
しゆゑ様子を聞バ云々と貴君の慈悲の物語り切て一  
言浮禮もや度追参らせし親子が心を汲分られ何卒今宵の  
私し方へ浮泊りなされて下されと次郎吉の手をとるよお  
市の父の腹立て浮前の方何云譯く知らね共私の爲よの  
大事の旦那今宵の浮宿をする約束マア旦那此方へと言ふ  
を政吉親子の承知せず何でも今宵の私等の家へ浮泊りさ  
ねハ氣が濟ぬと互ひも争ひ果しなれば中よ立たる次郎

初も次郎吉の二人の老人と一人の若者引止られて困  
果しが双方を宥め浮前達の深切誠有難し併し一ツの體  
で兩方へ行譯も行ぬら今夜の先へ迎ひ來て呉た親  
仁様の家へ泊り翌日の政吉さんとやらの家を尋ねて行  
ら其積りあして下さいと言ふよお市の親仁の悦びし政  
吉の親仁の本意なく思ひ悴よ旦那が斯おつしやるを無  
よども言れまい兎も角も今夜浮泊りなさる家迄浮供して  
行くでいないうと漸々と納得し四人打連お市の親の案内  
よて正太郎の家へ到るに政吉の提灯を持居る故先へ道人  
て江戸の旦那が浮出なすつた離れ浮出といふに不審して  
娘お市今此家の妻成しお奥の方より出來り次郎吉が良  
と見るよりチャ貴君のいつぞや浮深切私し共を浮助け  
下されし江戸の旦那様能くマア浮出なされました何卒此



手へ誘上りなされて下されど甲斐なくしく座敷へ通し夫  
 正太郎は次郎吉の事と告るゝ豫て聞及びし女房が一家の  
 恩人との事ゆゑ弟太吉と俱座敷へ出挨拶して其時の禮  
 を進茶を進め杯しける内お市の太吉より手傳ひせ酒の用意  
 をするゝ次郎吉はお市に向ひ今送つて来た政吉と言ふ親  
 子の衆り歸りましたりと尋るゝ否未だ出口は腰を懸て何  
 やら此方の親仁さん相談があるとの事なれど一向譯が  
 解りませんと言ふ次郎吉は左様うへ實に此方の親仁さん  
 がどうして知たり私を迎へ出の處アノ親子の衆り是非  
 自分の家へ今夜私と止ると言ふて先刻道まで争ひしが親  
 仁さんと何り咄でも有のだらうシテ浮前の親仁さん何  
 處うへ誘出りへと言ふゝお市の不審貞私しの親仁に此間  
 亡なりまして今日が初七日で浮座りますと言ふゝ次郎吉  
 の悚慄して夫でも今迄備ふ一所ゝ此家迄咄をしながら來  
 たものを其年の頃の五十あまり若物の儲り相鼠で大きな  
 三ッ柏の紋が付て居たのを提灯の明りで見受えて居るが

幽霊なるゝ夫とも狐狸の化せしりと云ふお市の涙を流し  
 そんなら夫の眞實の親仁の幽霊で浮座りませう其譯とい  
 ふの三年跡に貴君はお金を頂き藥を買て養生を致しまし  
 たら段々と病氣の癒り親子三人樂々と浮座で暮しを立て  
 居りましたが私しに此春庄屋殿の浮世話にて此家へ嫁ひ  
 参つた所爰お市外は舅姑もない故家を一ツとしたが能  
 だ庄屋様の浮差圖は那方の家を賣拂ひ夫より親仁も弟も  
 一所ゝ此家へ居りましたが先月の中頃より又親仁が頼ひ  
 出し病氣の左程でもありまじなんだが今度はどうせ助ら  
 ぬと自分も覺悟の様子あて夫も付ても貴君も一度浮目  
 懸り何時ぞやの浮禮と云度と夫許りを云續け終ふ其儘亡  
 なりましたが定めし浮禮りを草葉の蔭で知りし故私し共  
 ゝ先年の浮禮を云せる其爲ふ幽霊の姿を顯したのお違  
 ひの有ません証據は今仰やた相鼠に三ッ柏の紋付の死ぬ  
 時着て居た若物で浮座りますと語るゝ次郎吉は更なり出  
 口お咄しを聞居たる政吉親子も不思議の思ひ死んでも思

を忘れぬとの實は感心な此家の親仁と今外お云へる相  
 手もあらぬ故次郎吉お翌日の約束を堅く契り所書を書置  
 て政吉親子の立歸りぬ扱もお市の夫正太郎弟太吉と諸共  
 ゝ次郎吉を主人の如く敬ひつゝ酒宴をなして饗應しける  
 ゝ其夜も更しりゝ次郎吉は漸々酒を辭退して臥處へ入し  
 が獨り思ふ様此家の夫婦又彼政吉親子の儘の悪みを有難  
 かり長留するゝ必定なれゝ早く此家を出立せんと夜の中  
 お身支度して夜明前ゝ徐々寢處を抜出て疾々草鞋の紐を  
 結び朝の涼き内早く街道へ出んものど替の小笠お面を懸  
 し露踏分て裏道より東を指て走り行し幸ひと關の宿へ  
 出しりゝ只ある茶屋にて朝の支度をなし道を急いで行し  
 ゆゑ其日お桑名の渡しを越て宮の驛へと着しりゝ以前泊  
 りしお吉の家を通過りして外の旅館屋お泊りしお成丈人  
 ゝ面を見知られまじと思ふ故なり斯て其次の日岡崎へ出  
 馬ゝ打乗て馬士と四方山の咄しの中次郎吉が言ふやう私  
 が三年跡ゝ大坂へ仕入物有て来た處此近所で吉岡村の

太郎左衛門と云ふ大盡へ盗人か道人大金を奪ひしと云  
 召捕れたと云ふ噂が有たが那仕舞のせう成しりと問は  
 馬士の氣も付ず且那浮聞なせへ世の中ゝ馬鹿の盗人も  
 有もので二千兩と云大金を奪負たか處で二人の賊は怒  
 支へて出られぬ處を其儘道の中で捕り其筋へ訴へたより  
 嚴しく吟味され終ゝ舊惡の證據の戻と云ふ事まで白状し  
 たので首を捕れたが其仲間の幸藏と云ふ奴は三百兩を  
 盗み跡白浪と逸失て未だゝ行術が知れぬと言ひます其  
 奴の中々氣轉の利た奴だとり云ふ事と聞て次郎吉心中に  
 扱ひ清兵衛文吉の首も成しりと念儀首も口の内款恩の外  
 なりりしけ何時も馬の岡崎宿へ着ふけり

○赤坂街道ゝ兩賊旅人を殺す事

井次郎吉旅籠屋を睡す事

扱ひ次郎吉の晝の中お暑さを厭ひ茶屋お休み日のうける  
 を待て夕方の道を歩行しけ其日も遅く藤川より赤坂へと  
 心ざし彼方へ宿を借んと細き月影を便りとして道を急

行は逃りお那方までアツと人の叫ぶ聲するお何事やら  
んと忍びやりよ到り見るお無慮や一人の旅人を二人の悪  
者切殺せしなり次郎吉今助ん事も叶ひ難く旅人の息  
の絶し跡なれバ切齒をなし彼等様子を伺ふお一人の賊  
の言けるお兄貴思ひの外暗い奴併し今迄の辛苦の並大低  
の事でのなりつたといふを今一人が夫のさうとも闇手で  
粟の掴み取り人の物を只とる商賈少し位の辛苦の當然の  
事とれ胸巻を改めて見様と懐中へ手と入て引出す胸巻よ  
り爲撥落す二包み何だ作七己の眼の高うらふ此間より二  
百兩の儲だぞ積つた目利なんと勘八の驚いたらふと自  
慢良言誇るを作七の悦びながら實お兄貴の當時の流辰  
も劣らぬ盗人先生約束通り一包みと手を出すを勘八マ  
ア待な今夜の赤坂泊りだらうと又緩くり宿で渡さう夫の  
さうとまだ旅人々腰の廻りよ小遣ひ錢でも有たらふ置て  
行のも賤な事尋ねて見ると言乍ら彼金包を月よ騙して何  
だ京都寺町通り佛光寺門前尾張屋與兵衛ハ、ア印の山形

よ興の字々朱印で封じお押してあるな此胸巻ハ紫縮緬下  
り藤の紋を白く染抜てあるうらら其處の主人よても有う  
知らん何しる作七此胸巻ハ己が貰つて置と金を入れて懐  
中するよ作七の漸々二三兩の金を尋ね出し是でも當分の  
宿費よ困らぬと打笑みながら懐中して兄貴行ふと二人  
建立赤坂を指て行跡より窺うよ忍女次郎吉が膝よ付添來  
るとの知らぬが佛り夫ならぬ鬼の面なる赤坂の或る旅籠  
屋よ着きしうバ次郎吉も少し後れて其家へ泊り例の獨酌  
で飲ながら今お那奴が腹を取掻き吳んと心よ笑を含み少  
し酔を催して暫し床よ入たるが其夜寅の刻頃起上り腹  
しく手を叩き下女を呼ぶよ女何事おやと座敷へ來るよ  
次郎吉の驚ける負付して姉さん外の事でもないが私の大  
金がなくなつたが何卒内々お主人を呼で實ひ度と言ふ女  
も驚き主人の寢間へ行て斯と告るよ亭主の取ものも取敢  
ず早速次郎吉の座敷へ來り其仔細を尋るよ次郎吉の言様  
我の江戸の者なるが京都へ仕入の事よ參りしよ彼地よ

りも江戸へ逃へ物有て金二百兩を受取て參りしが毎も  
泊りお其宿へ預けし處昨夜の泊りも遅くなり殊よハ一  
杯機嫌で終お寝て仕舞今日覺て氣が付バ胸巻の儘金の  
なし何でも私と思ふよハ外より入し盗人ならず賤度合宿  
の客と見ゆるが何卒詮議して下さる様御禮ハ十分お致し  
ますと語れば主人の仰天し夫ハマア大變併し手前方ハ戸  
締も嚴重よて殊よハ寢す番も居りますうら外より遁入氣  
遣ひのなく殊お今朝ハ未だお一人も早立の客もあければ  
お前様の言る、通り合宿の中お盗人の有よ違ひも有ませ  
んうら能々吟味致しませう併し其胸巻よ何り證據でも有  
ますりと尋るよ次郎吉ハ有ますとも胸巻ハ紫縮緬よ白く  
下り藤の紋が染抜てあり殊よ金を包んだ上書よハ京都寺  
町通り佛光寺門前尾張屋與兵衛と書朱印で山形お興の字  
が封じのよ押して有ますといへバ主人ハ左様證據が委しく  
ある上ハ尋るお都合も宜しく然らバ其町處名前次ハ一  
筆書て下されと言ふよ次郎吉ハ用意の矢立よてさらく

と認め主人よ渡しけるよ主人ハ夫を懐中して少しの間待  
れよと座敷を出て店へ到り手代共を呼集め細引六尺掃杯  
非常の防ぎよ持せ亭主ハ先立て相宿の客の間へこそ到り  
けれ

○亭主相宿の金子詮議の事

井兩賊旅人の金を取るハ事

宿屋の主人ハ相宿の客を亂さんと客間よ到りて一々仔細  
を告し上旅荷物を改め見るお異さ七月の時なれば旅人も  
皆々單物の身輕の出立裸よなるも幸ひと衣服脱捨る身の  
潔白何れも荷物を手渡して勝手次第よ改めさるも身お  
覺えなき濡衣を着まじと計る人心笑ふもあれバ味も數  
多の客の其中よ彼勘八作七の兩人ハ何やら家内が騒々し  
く相宿の旅人が金を取れた逆他の客を詮議するも聞我よ  
覺えのあけれ共昨夜道おて旅人を殺し奪ふた二百兩若し  
疑ハれていつまらぬと二人ハ座敷お額を合せ惡ハ旅籠へ  
泊つたよ今更悔め詮方なく密々囁く其處へはちの廻

る旅籠屋の亭主が隔ての障子を明て貴君方も御聞及びも  
ごさうませう。昨夜泊り客の金子が二百兩紛失し付し氣  
の毒懺かり存すれ共御銘々の御荷物より御懐中の物まで  
も押り乍ら御見せ下さる様願ひます併し是はほんの彼御  
客への念暗し御早く何卒と急ぐを此方の勘八腹を立て  
私等の正眞堅固の旅人で其様胡亂な者で御座らぬと云  
を亭主の夫の其方許りでなく皆正面のお客なれと念暗  
しの為御頼みやて失禮乍ら御荷物を拜見致すも宿屋の役  
目手前も數代此土地で旅籠渡世も致す者ゆゑ今海道で人  
ふ知られし暖簾は疵々付まじと皆様方へ此通り七重の障  
を八重又折て御頼み申す譯なれば爰の所を駕くりと御聞分  
を願ひ度今更貴君様ばりりを見すお濟すと云ふ譯は何  
分参り兼ますと云ふの世間の情として拒む程難儀はしく  
居居る亭主の跡お付添男共まで忽ち必定此奴と目星を  
つけ主人が差圖あるなら直打居て引繰らんと願く様子  
も此方の二人の氣を吞れたれば偵り悪者如何とも云て通

れんど先勘八が亭主に向ひ左様云ふ譯なら我々が荷物の  
改めさせ様が先へ斷つて讀たいの我々逆も旅とぞる者金  
を持ぬと云ふ譯なく御度二百兩所持して居るが是は空く  
我等の金子其方何な証據が有り知らぬが此胸巻で  
有まいと懐中より取出し主人に見するを此方の直様受取  
て是の紫縮緬儲お覺えの麻の紋白く染抜て有のほど云  
つゝも勘八が顔を詠むるお側より作七が御前をんな不  
審な顔をする事へね其胸巻の年來貴が持て居る事へ已  
も知て居る胡散臭い者でなないと口出しするを亭主の嘲  
笑ひ世の中は似た物を持つもの随分あるが是は餘りも似過  
ます併し入物の兎も角も此方お儲の証據といふ金の包  
紙お書た物が有ますが此中もある金の包み紙お何と印  
が有ますと問れて勘八差詰り左様儲り山形と與の字  
の朱印が封してあり夫より京都寺町通りエと考へて  
居けるを亭主に見つゝも野荒らげこゝな盗人めが我持金  
の表包み夫も五兩り三兩の端た金なら兎も角も二百兩で

いふ大金の表を包む大切の名を忘るゝといふ事は何處の  
國も有物り知らずお私を教へて遣ふと懐中より端紙を取  
出し京都寺町通り佛光寺門前屋兵衛サア此通り此  
胸巻の中の包みは書ておれ一も二も入らぬ江戸客の仕  
入金といひ乍ら胸巻振つて取出す金其表包の紛ひなき主  
人少詞の町處サア是でも手前達の盗まぬと強情張りと  
白眼付れば勘八作七何して此金包を見知られたりと惘れ  
返りて詞もなき其折此家の男共主人の下知もなき内お早  
折重りて二人を縛しめ座敷の柱お纏し付ね亭主の胸巻の  
儲金を次郎吉ヶ座敷へ持參して悦び玉へ御前さんの金か  
出ましたサア御受取なさいと差出すも次郎吉の押頂き御  
亭主さんの御働さで命も代難き此二百兩何と御禮のや  
上様も御座りません併し盗んだ奴もほんの一時の出来心  
金子が元へ戻る上お勘弁して遣て下さいましと云ひ乍ら  
懐中より十兩取出し是は御亭主さんへの御骨折一盃上つ  
て下さへ私しも急ぐ旅故に此金の儲も御賃ひやて出立致

します跡は何分宜しくと行んとするも亭主の十兩の金を  
押戻し何して紛失の金の出ましたの御前様計りの御仕合  
での御座りません私共の店の仕合決して御禮も及び  
ませぬと正直一圓の亭主が辭義を次郎吉の無理も進め左  
様ならバ夕部の騒動で御世話も成た皆々様へ鼻紙代と思  
つて下さい夫でなくつちや氣が濟ねいと江戸子氣前の朝  
子も能く人の物した其物を懐中なして暇を告そく出  
立なしたるの實は大膽の事なりけり

○次郎吉大井川の逆浪を越る事

井筒子宿よて危急を遁る事

名よし負ふ東海道の大井川流る水音凄しく昨日よりの霖  
雨よて往來も止りし川端も十四五人の川越の靈助共が晴  
渡りたる朝日影何れも裸百貫の錢と行ぬ小博奕の車座  
に並居て勝負のの大聲を次郎吉の其處へ行て川越さん  
一服貸て下さいと煙草の火を借て未と川の急よ明ます  
まいくと尋ねれば川越の中よも頭立たる男を見ゆるが且

那急ぎなら極内々で渡しても上ませうが其處がそれ地獄の沙汰も金次第一升はづんで下されば命を限り遣つけませうと言を次郎吉打笑ひ大ぶ安い命だな其を遣て呉ねへ己の急ぎの旅だらう金も糸目を付けて居られねへと小判一枚手渡しする小川越共の打悦びは且那浮氣の毒者々睨り氣を付けて怪我のなげ様するが宜いサア〜且那お召なさいと金の威光の浮手車連登居て八巻も四枚肩なる腕つきき水を押切思ひの外容易く向ふの岸へ着しよ次郎吉登と一息吐き大きき浮世話といひ乍ら島田驛へと行過る跡は残りし川越共の今人の強氣が氣めへのいゝ奴だ何でも懐中も四五百兩の大丈夫何をしても有所の有りものだと贈するさへ聲高なる雲助共の後の方の様子を立聞一人の旅人獨り何やら打動頭道引返し次郎吉が跡を慕ひて追行しが漸々追付て若旦那浮前様の江戸へ浮出と見詰ましたが私し江戶横山町の若で浮座りませうが兎角一人旅といふ者の心細しい者さうり道連も成て下さいと

馴々しくいひ寄るよ次郎吉の其男を見るよ年頃四十位人品能赤銅造りの旅脇差柳行李を肩よ懸けたる様子三度飛脚とも言べきなるが眼ざしの虚勢くしたるよ此奴も清兵衛同様の護魔の灰くと心付しが獨り旅より咄し相手の有こそ宜けれと夫のママ能い道連浮察しの通り私し江戶へ行もの左様ならバ浮一所も参りませうと四方八方の咄しを仕乍ら行し其日の夕方駒子宿泊りて名物の碧積汁食し處大酒も進み次郎吉も大増し酔し跡よて浮前様免なさへ少し横も成ませうと宿の女も枕を借て轉寝せしが前後も知らぬ高野彼道連の旅人の深く酒を飲ずして食事をなし宿の女を呼姉さん此人の大増酔た様子ゆる早く蚊帳を釣て遣てお呉私し少し庭へでも出て涼んで来るうらといひ乍ら我赤銅作りの旅脇差を腰へぶつ込み二階を下り行くよ素より次郎吉の睡も眠りしふの非も只道連も成し旅人が様子を見る睡入故宿の女少釣て行し蚊帳の中も眼乍ら一人思ふ様那旅人が涼みに行と

言ながら脇差を指て行し何う了簡の有事ならん何おしても迂濶く寝て居られぬ今夜の殊も寄たら彼奴を置去おして肝を潰させ呉んと蚊帳を徐と抜出て素より身輕の一人旅金より外も荷おなるべき物もなければ身支度なして此家の庭口へ忍び出るよ垣根も誰やら密々咄し忍びの術の知らぬ其自然と妙を得し次郎吉故彼等が側へ身を寄て耳を引立聞とも知らず最前出し彼旅人が聲をひそめて語るやう今夜の首尾は十分よ一盃喰せた碧積汁泥の様よ狭腐つた那生意氣の青年懐中なしたる金といひ又人跡格好の彼清兵衛文吉が吉岡村よて白状せし幸藏と云ふ盜賊も必らず相違ない事と大井川よて見止しが怒の事をして仕損じて折角見付し甲斐のなしと此宿屋迄の味く欺して連となり今酔倒れとせし上の最早還さぬ此方の者腕お覺えの有とて天命盡し網の魚併し侮らぬ様我も續けど懐中より捕縛出して身支度するお子分と見ゆる三四人が心得ましたといひながら何れも赤総の十手を携へ然

れが親分遣りませうと俱も随ひ行はせよ兼て此家の主人よる内通をせしものと見え家の内の出口くを下男杯よ守らせる様子を釣りに立聞したる次郎吉の大驚と彼奴の清兵衛文吉と同じやうなる護魔の灰と思つて居たの間違ひで所の目明しで有たるう何しる送るお如くはなしと垣根を乗越逃出しぬ

○次郎吉孤付と成事  
并徳助を討る事

借も次郎吉と道連ふなり横山町の旅人と云しし東海道岡崎宿の目明しめて高田屋卯之吉と首者なり三年前吉岡村の太郎左衛門方へ忍び入たる賊の二人其場で召捕れ追々吟味お及びし處逃し一人の幸藏とて其顔容の斯様くど委しく白状なしたるより人相書を以て忍びくお探索あれを其行衛の何分今まで知れざりしが討らず卯之吉が次郎吉の岸よて次郎吉を見懸且川越共の噂を聞彼幸藏と認せしゆえ跡を付て道連となり油断と見濟し召捕

んどの手段まで有ける其時卯之吉の四人の子分と同道  
 なし次郎吉が座敷より蚊帳の釣手を切落し上意くと  
 四方より聲をうくれと一向に動く態さへあらざるより蚊  
 帳をたぐれば是の如何の中へ何時しり蚊の売身は空蟬の  
 影だに見えねは是の驚く捕手中へも頭卯之吉の  
 切齒をなして口惜かり倍の彼奴様子を悟り風を喰つて立  
 去しり未だ遠くへ逃去るまじ何れも東へ下り道疾く海道  
 を追駈よと先立行より子分の者共勝手知たる裏道傳ひ東を  
 指て追駈ぬ愛お又次郎吉の彼旅籠屋を逃出せし本街道  
 を行どきハ必らず追人ふ捕へられんと夫より道を横切つて  
 野道畔道嫌ひなく何處を目當と定めなき身の浮雲の足よ  
 任せ三四里も馳たりし流石も勞れて息せひしく暫らく  
 何方りで休まんと立止りつゝ四方を見るよ愛の片山里の  
 小村みや所せばら此處彼處茶屋何軒も見ゆるよぞ次郎  
 吉獨り打悦び豈夫愛送追人の來まじ暫し此處で一休み  
 仕度ものだと透りを見れば右手の方より締りもなす物置小

屋のありければ先其内へと這入込み足を伸して横み成し  
 が忙て走りし體の勞れへ昨夜の酒の酔が出て終に寝入じ  
 高野夜の明るをも知らざりし此小屋の持主が鉢を擡て  
 野邊へ出懸よ計らずこれを目よ留めて驚き乍ら揺り起し  
 俵前の何處の者り知らぬが斷りもあく怒々ど人の物置へ  
 寝なさるといんだ人だと腹立を次郎吉聞て眼を覺し面  
 目なげお言ふやうの是のいんだ事を仕ました鞠子宿うら  
 出た處何時しり道と踏違へ寝るともなしお終とるゝ而  
 して愛の何と言ふ處と問へば彼者の次郎吉が顔を借々見  
 乍らお主の何を言つしやる鞠子宿うら如何様と道を問違  
 よよ逆も此處へ来る事ハ出来しねへ愛の山中といふ處  
 でもと問道の事だらう所の者の其外よめつたよ此處と  
 街道へ往來をしねへ習だのよ殊よ奇たら擲れたお主が  
 眼さしの處附掛梅狐を様と違ひないと云れて次郎吉を  
 たり顔態とどばけた風をして故の流石も目が高い實我の  
 京都稻荷山の俵使よて江戸の王子の稻荷へ行孫太郎都と

云者なり昨日東海道を下りし鞠子宿よて計らずも犬お  
 取巻れ餘義なく此男の正直者故暫し五体を借て此地へ逃  
 來りし最東海道箱根手前の懸々ゆる我の木の葉で非  
 田信者が奉納せし正銘の金子を出す程よ此男を山麓籠よ  
 乘て日數の少し懸つても能き程よ裏道傳ひ箱根山を越  
 ゆる様お頼み存る先手當金として金十兩故お渡す間能  
 く勤めよや首尾能く我を送らんよ汝が家内安全ハヤ  
 及ばず諸願満足すべしと金十兩を手渡しけるお百姓ハ肝  
 を潰し左様なら貴公様ハ俵稻荷様の俵使で俵座りますり  
 實私しの寒村乍ら此郷の村長を致します徳助と申者斯俵  
 手當金を下さる上ハ随分俵送りやませうが俵案内ハ知  
 りませんが東海道の裏道と申てハ大變な處よて山坂も多  
 く俵座りますれば餘程入費も懸りますが夫さへ俵承知な  
 ら俵供致しますと始めよ替りし挨拶よ次郎吉大に悦びて  
 徳助とやら入用の金子ハ何程よても所持致し居る故よ心  
 配なく只餘りよ目だのぬ様よ正直なる者を見立て駕籠を

昇者手代りとも四人を撰んで其方万事道中の賄ひ致し日  
 々の入費ハ帳面へ認める様又其方の世話人と神主と兼帯  
 なを大役故お毎日金二分宛を遣すべし又四人の者への金  
 一分宛を賃錢よ與ふる間随分俱お心を用ひ人目に懸らぬ  
 様穩密よ計らふべしと尤もらしく云けるよ庄屋徳助ハ夫  
 ハ有難い事夫が眞實ならハ道中の入費も手前が致す  
 筈なれ共兩三年ハ不作打續き此村も殊の外困窮致し居り  
 ます故何れも角も思ふ様ハ参りませす依て仰よ隨ひませ  
 併し愛の餘りよ見苦しくいま、先私し方迄俵座下るる  
 様よと叮嚀お案内するお次郎吉ハ其意よ任せ庄屋の家へ  
 連立ぬ

○次郎吉山中の里を賑はす事  
 并庄屋徳助演説の事

扱も庄屋徳助ハ次郎吉を客間へ通し女房お仔細を告て何  
 でも不淨のない様よ磁々で淨めるが能い而して俵膳ハ強  
 飯が能いけれ共問お合ぬうら今朝焚た麥飯お昨日買て來

た油揚げを焼けて付るが能い。万事言付て徳助の懐中石と鎌を入置無間。磁々と叩き散す。よど次郎吉の見乍ら可笑もあり。又片山里に住居して正直一途の木訥なるを不便と思ひ徳助を呼て其方の家内の何人ほど有や。又此村の家數何軒程有て人數何程位居ると尋る。徳助の手をついてハイ。此村の小村で浮座いまして私共を入まして十一軒手前方の人數を退まして五十人程勿論一人前も働く男女の二十四人跡。皆祖父婆々子供で浮座りませす。私共の婆々女房子供三人物領。今年十七歳で万事私しの代り。農業を稼いで呉ませす。夫故私共を入れて働く者が廿七人。浮座りませす。夫のさうと孫太郎様。酒を上げませす。清酒の浮座いません。手造りの濁酒で宜しければ。浮備へやませす。よ次郎吉。夫の有難へ何でも宜しい。二合許り持て来て呉れ。而して先刻頼んだ酒籠の用意を早くせる。機よと言ふ。徳助のハイ。と勝手へ行て女房の手傳をして膳拵へも漸々と目八分。持来り。恭敬しく。次郎吉が前へ



出す。此方の手酌で濁酒空腹時の無味物なく茶碗で傾け居たる折柄。最前徳助が言ひ付し。見え届竟の若者四人止。徳助を昇げ来る。跡より村の者お狐様を拜さんと。祖父祖母子供の手を引或は脊負又抱き門前へ集る。徳助門へ出て是々皆々騒々敷て。ならぬ孫太郎様の静な事。好故拜み度。私し。差圖して一人づ。拜ませせてやると。徳助の神主氣取。よ次郎吉の前へ。兩手を付て。浮座りませす。通り村中一同貴方様を拜みませました。が浮座りませす。一人宛なり。とも拜ませせて下さりませ。れ。斯中庄屋徳助も如何計り有難い事。で浮座りませす。よ次郎吉も。心と思ふ仔細。あれ。早速と承知して善哉。我適々此地へ来り其方達と結縁なす。も。全く稻荷山浮座主人の導き給ふ所。あらん。一人宛の面倒故。一軒毎。打崩ひ来る。様取計らふべし。夫。よ次郎吉の多少。抱らす。一軒前金一兩宛。我が土産。お遣のす。間其方宜しく取計らへよ。と懐中より小判十兩取出して。徳助も興へる。お切々氣前の能き。浮座。徳助と庄屋を始め。人々。皆信心前

は彌増て。徳助の泪。字売の。蒸びた親仁の。第一番。よ次郎吉。露なしける。様此者。此村。年久しく住ます。一。郎兵衛と申者。家内の孫とも五人暮し。彼の名うての。連者。も。今年。六十三。なれども。浮座の。通り。女房。の。三十六。八人。目。子供の手前。外分。も。隠し。負。せぬ。蝦蟇。腹。も。早。今。月。分。隨。月。で。此。處。ま。で。参。る。も。困。難。の。事。苦。しい。甚。な。した。と。云。ふ。な。か。く。甚。張。親。仁。で。ござ。いと。聞。ぬ。事。まで。喋。々。た。て。る。も。稻。荷。の。野。の。當。ら。ぬ。為。や。たら。し。頭。を。下。さ。せて。彼。一。兩。を。頼。か。せ。サ。ア。夫。で。宜。いと。立。せ。れ。親。仁。の。面。目。内。証。の。夜。な。べ。仕。事。を。打。ま。け。られ。禿。た。天。窓。と。諸。共。よ。良。を。赤。めて。送。り。下。る。第。二。番。目。は。罷。り。出。る。男。を。徳。助。打。見。遣。是。の。新。屋。の。勝。右。衛。門。と。て。此。村。で。の。口。利。な。れ。を。生。得。の。吝。嗇。此。上。なし。の。變。人。で。三。度。の。食。さ。へ。十。分。の。喰。ひ。一。文。錢。も。生。爪。を。割。さ。う。と。云。や。ん。ら。ん。者。夫。故。人。皆。澤。名。を。して。世。の。假。借。お。客。坊。の。柿。の。種。とい。ふ。を。以。て。勝。右。衛。門。と。呼。な。す。や。ら。な。り。ま。した。去。せ。も。外。も。惡。氣。は。なく。先。々。様。一。方。の。正。直。者。で。ござ。います。と。頭。を。共。に。上。たり。下。たり。齧。物。ふ。さ

れるも狐々様のは前なれば是非もなく且つ金も貰ひた  
さふ黙止て居るを徳助の次へ居直るいぐ栗坊主俗り出家  
り白髪雜りの頭を下て殊勝氣は珠數爪縁て禮拜なすを又  
徳助の見て云ふ様是は此村の旦那寺妙傳寺の和尚めて名  
を海珍と申者去共以前矢張百姓天然備へる無性者で農  
業おとの大嫌ひ其癖女と酒と博奕の米の飯より大好物有  
や無やの身代も僅の中は棒又振手ふり編笠乞食よりせん  
すべもなき懶惰者誰も相人よする者なきを妙傳寺の先住  
が不便がられて拾ひ上げ坊主となして飯焚やら田畑の業  
をさせ乍ら喰して置れ玉ひしよ一昨年和尚の九十九ふて  
黄泉へ遷化あられし故ある甲斐もなき寺なれ共まさり其  
儘捨置れず餘儀なく渠を後住とし當時の和尚と頼め共經  
の切置一文不通は假名さへ覺束なきはんの名許りの  
和尚なり然れども近頃發心して晝の田畑の事をし又夜な  
どに繩をなす今ハ並女房も持て三日一度の乾魚  
位ハ喰ふ様も成たお寺の住持と又々跡を畔んとするふ此

方よ見て居る次郎吉ハ氣の毒でもあり可笑もわり何分  
て居られぬようく夫で深山だ最早時刻も移るゆゑ聚  
つて来た鈴々の故事來歴ハ廢止あして跡ハ一所金子を  
遣れと云ハ徳助畏まりて名前丈を呼集め夫々金を渡し  
けれハ百姓共ハ打悦びこハ能ハ福徳の浮稻荷様迷子札よ  
り形さへ見た事もなき小判をハ銀一文も上ぬ先うら下し  
賜る有難さ斯云事の有ると云ハ我々共ハ身ハ幸ひ切て  
ハ宿の取附迄浮稻荷様を見送らん皆の衆早く支度しなど  
悦び騒ぐ老若男女さて次郎吉ハ愛飯を否々ながら喰ひ終  
りて徳助ハ女房を呼び當家ハ別段世話せし故是ハ内へ  
土産ちやと金二兩を興ふるハ女房ハ更なり婆々子供も小  
踊りとして打悦び親仁ハ日頃正直な宿りし福の神準立  
と門口へ送り出れハ徳助ハ差圖よて持出す山籠籠ハ七五  
三廻廻し清らりハ不淨を拂ハ先拂ハ村の子供ハ八九人短  
き竹を手ハ持て下ハ一の制止聲次ハ村の若ハ者何時  
の間ハやら認めけん正一位孫太郎稻荷大明神と頼ハ書さ

たる旗押立次ハ次郎吉ハ乗物の側を放れぬ徳助ハ袴股立  
附添へハ前後左右ハ村の男女打交りつハ送るこそ實ハ仰  
々しき事なりける

○孫太郎稻荷利生の事

井次郎吉娘ハ身賣を聞事

初次郎吉ハ徳助ハ目違ひなせしを幸ひハ狐付さぞと欺さ  
て東海道ハ裏道を駕籠ハ搦て行たりしが彼仰々しき送り  
の者を若ハ他人ハ見咎められてハ化の皮の願ハれんと一  
里程も行し頃徳助ハ云ハ付て男女ハ一緒ハ押歸し跡ハ徳  
助ハ百姓の駕籠昇四人の人數よて山道傳ハ二日を重ね漸  
々よして箱根山の裏道を抜しハ最早街道を行とても更  
ハ氣遣ハ有まじと約束通り徳助ハ一日二分の割にて遣  
し駕籠を昇たる百姓ハ同じく一分の割にて遣ハし又路  
用よて徳助ハ預け置たる十兩ハ僅四兩程遣ハしのみゆゑ  
六兩計りの殘金を錢ハ直し徳助ハ渡し此内一兩ハ五人ハ  
骨折の祝儀残りし錢ハ途中送送りし村中の人數丈けハ分

て遣るやう致すべし我ハ是より當所の稻荷へ用事ある事  
ゆゑ最早是よて別る、なり汝等も今宵ハ此宿へ泊り翌日  
ハ東海道を急いで歸れ去ハくハ夕間暮次郎吉足をわけ  
るが否や元より身輕の早足なれば瞬く間ハ何處へり姿ハ  
見えず成よける此有様ハ徳助等ハ切もくハ感心なし只  
狐付とのみ思ひて少しも心ハ疑ハず其夜ハ小田原宿ハ泊  
り其次の日箱根を越え本街道を行し日數僅ハして山中  
の里ハ歸り兼て言付られし如く六兩の錢の内一兩を五人  
で分け残りし錢を老若の男女ハ更なり嬰兒ハ迄孫太郎狐  
の賜物なりと夫々分て與ハけれハ皆々悦ハびの餘り小祠  
を立て孫太郎稻荷大明神と崇め祭り五穀成就村内安全を  
祈りしハ二三年の不作ハ引替其年より五穀能く實り殊ハ  
野菜物も十分の出來よて村内の者何れも家豊り成しハ  
ハ是ハ全く孫太郎狐の利益ならんと其後年々祭りをなし  
其地の鎮守と信仰せしハ誠ハ靈驗著りて病氣其外も祈  
れハ必らず其利益有しと彼齋の頭も信心がらどハ斯る事

をや言ならんこの是後の物語りなれ共序でお愛お記すなり夫の扱置次郎吉の徳助等お別れ道三四町馳たりしが今ハ彼等も知るまじと只ある旅籠屋お宿り久々よて娘張と湯入道入酒を酌下ら最う江戸への廿里ばかりゆる日付あも行れる位併し三年以來音信せぬ江川町の二親へ何を野面で行れるものやう工風をせねばならぬと思案をなせる其折しも隣り座敷の二人連良の知れぬを親仁と娘が語り出ける咄し聲聞氣のないや聲高きる親仁の言葉の手を取る様よて是お峯家を出る時うら云通りたつた一人の手前をバ賣氣の更々ないけれど此盆前の大難滋苦し工面の算段も十段盤玉の手めへが目當で漸々通れし盆の瀬戸深みへ陥つた博奕の埋草併し手前を品川の苦界お沈める上りら向後心を改めて律義者となる程お僅三年の事だら辛抱して稼で吳よと云は娘の泪慶夫の最う私しども親の爲世間よない事でもなければ何様辛ひ勤めでも辛抱をして仕様けれ共阿母さん亡なつて未だ百

日も立ない博奕お許り身を入れて家の諸道具着物の更なり手當り次第お買拂ひ上句の果お私しまでを賣て博奕の元手よするとの餘り強ひ共了簡夫故私し品川とやらへ行の否だど云のさと言へ親仁の聲として馬鹿を云へ是うら手前を賣た金を博奕の元手よするでいなし借た金を返すのど家業お取付く元手金よすると言の分らぬが假令己の賣子でなくとも五年以來育てた思ひまさらんれて仕舞ひしめへ今更否だと言たどて手前の骸品川の圃戸お咄しも仕て有うらら運鈍言ても賛な事夫より彌よ行積りお覺悟をして寝るが能い草臥たせいり一盃やつたら強氣と酔が廻つて来て何だる眠氣が差て来たと言ひつ、枕よつさしと見え咄し聲ハ打止みて跡の親仁の耳喧嘩く聞えけり

○次郎吉お峯が身の上を聞事  
井金を獲して欠落する事

扱親仁が博奕お負け娘を品川へ賣といふ事だ可憐想よ何は親の爲だどて是が病氣で困るとり年貢の金お差支へるとり餘儀ない譯なら仕方もないが自分の榮耀の慰み事よ子を賣と言ひ強ひ親仁と素より慈悲ある次郎吉故をうり助けて還てへ物だと獨り心お點頭つ、翌日迄思案をして見やうと寝仕度なして小用をたしお縁側傳ひお用場へ遣入小用をたして出合がしら隣の用場より出る女あり五ひよ手水鉢よて手を洗ひんとせしおマアお先へお辭儀する折次郎吉の釣燈籠の火影お彼女を見るよ年の頃十七ハの娘よて髪形の風ハ田舎育ちと見ゆれ共天然備の美しさ粧いね共色白く櫻の貞お柳の眉愛敬醜る、其目元よ潤みし泪の跡あるを次郎吉扱いと推量して若姉さん御前の私しお隣り座敷へ泊り合した親子連の方でいないりへお尋るよ娘お峯はハイと言ひ乍ら次郎吉を見るお年の廿一二位色の少しく淺黒けれど眼清く鼻筋通り最柔和なる男なるおど何となく恥しく外よ返事おなされ共立去も

せずおみ居るよ次郎吉の聲を密り私しハ今度大坂うら江戸へ歸る者だ先刻浮前と親仁さんお咄しをバ聞どもなし唐紙一重聞さへ辛き身賣の相談餘處事乍ら私し一人て泪を隠して居たが何程位の金子が有たら身賣をせよ濟事お斯一ッ宿屋お泊り合すも何うの縁願石さへ縁どろ云ハ浮前の身の上を聞た上ハ如何り相談の仕様も有ふと思ふが一体浮前の家ハ何所だへと云は娘ハ深切なる男の詞お漸々おハ私しハ三編宿の者で浮座ります先刻浮父さん云た事を浮聞の上ハ承知で浮座いませうが今の男親ハ二度目の親仁さんで私しの實親ハ奥左衛門とやせしが五年跡お亡なつて私しが十三歳の時今の親仁さんお近所の人の浮世話おて浮出なさりしたの、商賣の事ハ少しもせず只店で賣る酒を勝手よ飲み夜晝と出歩いて處々で博奕を打べり家でお母さんと私しハ二人して何やら斯やら其日の稼お杉葉酒屋の身過世過も尋し兼たる瘦世帯細き籠の其前よ焔燭うへりしお母さん



染々私しへの浮咄しよ男が居らねば家業が出来ぬと思ふが故に媒人を頼んで貰ひし今の夫始めの眞實な働かしも二三年も立り立ぬは打て替りし不行跡今の辛さを苦しと思へば事を後家で暮らしたる斯云ふ難儀の爲問敷ものを殊に私しは此頃の次第も数も弱くなり翌日を知らぬ露の命若も私しは死んだ跡で那の鬼の様な親仁さんか浮前を苦界に沈め様うと夫計りか冥途の障り何卒左様の事も有たなら宿役人又譯云て身を運れる様よせよと云れしが今更思へば遺言よて其後僅病み煩ひ今年四月の月末お終よ空しくなられし親仁さん私しの歎きの四年分思ひも寄らぬ身買の相談欺されて来た此小田原幾許云ても親と云字は勝れぬ此身知らぬ貴方よ此様な恥かしい事すのも伊深切の浮詞よ甘へて中不仕合せ何卒察して下さいなと娘心のせら一ばら云も便りのなき身ゆゑ涙の涙よ袖濡すお峯が背中を次郎吉が撫撫りはお峯さんどやら左横して今度浮前を賣る其金の何程位り知て浮出りと問よお峯

す何も一縁と思し召浮腹立無様は浮頼中以上  
月 日 與左衛門殿 相宿何某

と云へる手紙よ金廿五兩を包み隣座敷のお峯を招きそんなら是を親仁さんの枕元へ密と置て来な私しも支度をするうらと云はれてお峯の唯々を忍び足よて出行よ此方の急ぎ身支度して金子二分を紙よ包み其上書よ酒肴代として我枕元へ置きたるの跡お泊り遊なりと云れまじどの用心なり初次郎吉の忍び来し少女お峯が手を取て操傳ひよ庭口の雨戸を明けて庭へ出雨戸の元の如く閉め大磯さして行たりしが時しも七月下旬夜も丑濃の物淋しく月さへ有ぬ間路をば戀と情の曲者が恐れもやらぬ忍び旅最賤太き事共なり  
○次郎吉江の島へ参詣する事  
井七里ヶ濱ふて盗人を救ふ事  
お峯の手をば鳥が鳴く東をさして小田原を夜遊よせし

のハイ三年で廿五兩とり聞せしたと言ハ次郎吉思案して廿や三十の金の何でも宜が那親仁さんの様子でハ表向懸合ふたら彼是云て急めハ浮前を放すまいお峯さん斯云たら否な奴と思ふら知らぬが親仁さんへの親子の縁切として私し廿五兩置て行程お今夜此所より私と一所此家を逃げて江戸へ行き所帯を持って睦く夫婦よなる氣のないかと云れてお峯の生娘の發と赤らむ其良お袖を捲きて去りするふアイト返事の仕業れと心の中の嬉しさハ飛立許りの其風情を見て取る次郎吉情うらさお峯が手を取耳よ口寄何りひそく囁やき示し後よくと別れしより直次郎吉の座敷よ到り書認むる一通り  
一筆中入ハ私し事隣座敷お罷り在ハ所浮娘よ浮峯との儀此度江戸品川宿へ身買の儀承まハり素より罪無して苦界へ沈めハ義賊お氣の毒よ存せられ右身の代金廿五兩を結納として我等貴い受妻を致しハ問右浮承知下さるべし殊の外旅中取急き目よ懸りヤ

次郎吉の婦女の足の排せらじと親を雇へてお峯を乗せ己れハ總と付添ひ行しハ藤澤宿より道を轉て彼江の島へと到り着き岩本院へ宿を取んと其儘急ぎ行たるハ江戸搦中の大客ありとて斷られたるハ已を得ず外の旅館屋は宿をとり早いと徳と二分金を茶代よ出せハ響應も別問へ通す世辭機轉相客なしの差向ハ誰よ遠慮も投出す諸座敷ハ膝望やハ無浮草臥で座んせう些浮休みなされまし浮足を擦つて上ませうと寄添ひ来るハ次郎吉ハ何勿体ない足なを擦つて貰ふと問が中るマア夫よりの茶でも飲で未だ日か有り湯お入て汗でも流し岩屋をハ一緒よ拜みよ行ふぢやないりと次郎吉先ハ湯よ遣入お峯も代て行たるが間もなく湯より上りしより二人連立岩山へ登りて浮堂を伏拜み又岩穴の辨財天を拜み終つて元來たる道を行んどする折柄すれ違ふたる一人の旅人小弁慶の單衣よ道中差をよつ込みしが菅の小笠よ夕日を掩ひ豆絞りの手拭お汗をば拭ひ行く様子ハ次郎吉一寸見るよりもどうやら

知た奴と思へば其場を早く行過てはて誰ならんと考へしが漸々思ひ當りし三年跡宮驛にて出會て其後逃去りし彼伊勢參の八藏故切の彼奴の今爰等を稼いで居るりと勘着たれと別心注めずして彼旅籠屋へ立戻り上の膳部を眺らへてお釜を酌み飲乍らサア伊前も一ツ飲ねへ無勞れたらうと小盃を出せばお釜の袖を口も當て不調法で伊座りますうら旦那の伊酌しませうと銚子を持て次郎吉の不斷の兎も角今夜の別だ是の伊前と祝言の盃蓋だうら少しでも祝ひは飲で吳なくつちやあ巳も何だり氣が濟ねへと銚子を取て半分許り繼お釜の嬉しさうおはるくもので口へ當ぐつと飲み干し次郎吉へ酬て溜息する状を見て次郎吉の打笑ひ何だい此様は味へものを藥何りを飲様もお前も餘程野暮ぢやあねへり夫のさうと今時分親仁さんの猿眼で多分江戸だと勘付てあの藤澤の戸邊邊りを麻勞く探して居るるも知れねへ夫ゆる巳が道を替へ此江の島へ来たのだと言へばお釜の口も口も否々彼

親仁さんのなりくひせい方ですうら尋ね立なぞ致しままさい只でも遊たら兎も角も廿五兩と言大金と旦那が下さつて見れば品川とやらへ行より伊金お徳の行事ゆゑ何で跡を追ます物う彼處りら歸つたよ迷ひありませんが彼又お金を博奕と取れ跡の振方を何致しませう僅の内どの言ひ乍ら親仁さんとした事ゆゑ考へる程心配で伊座りますと兎の様な繼父を察するお釜が志ざし次郎吉の感心して伊前の餘つ程能い心懸氣立と顔の可愛らしさ私に迷ひ込だのもまんざら無理でいなりらよとお釜が手を取り引寄る折しも下女が伊子と明る喚に仰天し次郎吉飛除き此方を見て姉さん跡の飯お仕様と酒も程能く夕飯もはや終りたる頃おひよ下女が仲たる夜の物一ツ布團よ並べたる二ツ枕を蚊帳の中二人が爰に初契り何なる夢をや結ぶらん斯て其次の朝次郎吉の早立を好む故外の旅人より早く朝の支度を調へてお釜お銚子を見物させんと江の島を立出七里ヶ濱へ差懸るよ浦の童が鏡乞ふて涙

間を潜る處とや見渡す海は青々と空り水りと見分たぬ云ん方なき景色お二人の其處邊迂濶く微吹風お送られて鎌倉近く來る時後より砂煙りを蹴立六七人聲々泥棒くと罵りて追來る者有は腰に疵持次郎吉が仰天して胸よ釘我身の歸も若もやと振向き見るお八九間彼方よて今捕へられし一人の旅人土地の漁師おや六七人何れも輝一ツの眞裸手取足取散々お打叩き此奴懲しめの爲沙水を喰はせ遣んと長き荒縄お體を縛め今海へ打込沙水を吞せんお情用捨もあらくれ男が宙よ釣して行んとするに彼旅人の頻りみ泣聲して救し玉へくと打詫るを次郎吉見兼て彼漁師共を宥め何様の子細り知らね共此人の悪いと見え涙を流して誤つて居るうら最う勘辨して還て下さらぬり私しも辨天橋へ參詣し行た歸り道見ても居られぬ此場の様子と宥むるお漁師の中も年重なるお伊前さん聞て下され此泥棒が今朝早く私しと留主へ付込で仲間へ分る香の代と十貫許り盗んで逃る出合頭出くしたる我々

が折船く鏡の取返したるが海人が沙汰辛き鏡を盗んだ憎さよ此始末と語るよ次郎吉夫のママとんだ奴併し私しも今云通り辨天橋へ參詣し今來た事故とらう放生會同様よ助けて遣り度思ふけ私し一盃買入程よ勘辨して還て下さいと懐中より一兩取出し年重の漁師よ與へるよ何れも目と目を見合せ俄よ替る追従笑ひ旦那是でハ誠お伊氣の毒様此様よ頂いての濟させんと差戻すを次郎吉のママ少ない取て置て伊吳なさい何う此男を私しへと云ハ皆々彼旅人が繩を解れし髪採繕ひ遣りコレ手前ハ仕合者此旦那が伊口を聞て下さるうら此儘勘辨して遣るぞ手前の爲お此旦那の命の親能く伊禮をヤが能いと云乍ら皆々も次郎吉の禮を云て管屋をさして立歸りぬ

○次郎吉恨みを忘れ悪みを施す事

井悪者素性を語る事

扱も今漁師等お打叩れし盗人の次郎吉を伏拜み大地へ頭を付て何方の伊方り存じませんが既お命を捕る、處伊敷

ひ下され有難く伊神の中上様も伊座りませんと口管悦び  
神を言を次郎吉の嘲笑ひ汝の今日始めても有まじ毎  
もくけちな野郎だと言ふ彼男良をわけ次郎吉を能く見  
ても思ひ出さぬ其様子お次郎吉の手前己を見忘れたる三  
年以前宮の驛で僅の端た金を攫つて逃た伊勢参り其時名  
乗た八藏だらう昨日岩屋の上り口すれ違ふた手前の負一  
目見て知る爲生た者の有餘る此江の橋へお餘りでも攫  
ひお來たりと思つて居たよ今又手前の身の難儀見ての捨  
ても行れぬゆゑ口出し仕たる他生の縁最早けちな盗みの  
止ふして眞人間の家業をしるゝ懐中より金子五兩取出し  
少ないは是を元手取付て身を粉も糶ひだら喰ねへ事も  
有めへうち心を改め辛抱しるゝ金を與へて行んとする次  
郎吉が袂をば八藏殿と捕へ旦那暫らく待下さいまし  
つどや宮の旅籠屋で伊前様の金を盗んだ私しを憎ひ奴ど  
も伊前立寄く今の難儀を伊救ひ下さるのみならず又も元  
手おするが能いと此五兩を下さると親も及ばぬ其伊情

三十餘年の誤まりを今更知りし此身の罪私しども素よ  
りの護魔の灰は非せ色と欲と親を捨て古籍を離れし旅  
鳥二十歳の時より江戸の破落戸悪い事ふ終馴安くいつ  
しり登えし巾着切り夫がかうして街道の護魔の灰と成  
ましたが元私し江都の邊り十生目村と片在所の名主  
役三太郎の一子三吉とやせし者今で親もさうなりしり  
歸りそびれし不孝の私し是ら貴方の伊見見し隨ひ  
古郷へ歸る人を頼んで親への詫事向後心を入替へて百姓  
業と致します夫も付ても大恩請し伊前様の切ての伊名を  
知らせて下さいまし悪い心の出ぬ爲毎日唱へて居りま  
すると流石無頼の悪者も誠の情立歸る眞實面に願われ  
し伊勢参りの八藏が我身の素性を打明すを聞て驚く次郎  
吉が此六月の下旬淀屋等と俱に圓覺寺へ押入りし時僅一  
夜の宿借し三太郎後家の一子三吉と云し此八藏よてあ  
りしどの是も不思議の因縁と思へば次郎吉親更も老母が  
願ひも甲斐ありと心と思ひて三吉お伊前さう本心お立歸

れは私も何程嬉しいう知らねへ伊前少し咄しもあるが  
爰の往來最う八九町行の鎌倉の入口彼朝日奈の切通し名  
物の力餅でも奢るうら一處お來ねへと先立行か三吉の只  
ハイくと言つ、俱に隨ひ行ぬ

○三吉非を悔て古郷へ歸る事

井次郎吉品川へ泊る事

扱も次郎吉の三吉を同道して彼朝日奈の切通しなる或る  
茶店へ入て奥の小座敷を借り茶杯飲乍ら三吉は向ひ縁と  
言もの不思議なるの私今此六月の未頃大坂連中と京  
都へ行き名高い十生目村の圓覺寺へ遊山ぐてら見物へ行  
しよ日の暮る伊前の伊袋の家へ一夜厄介よ成て連の者け  
様子を聞か一部始終の身の上咄し聞た時實可可愛想で  
何う三吉とやらと尋出し一日も早く逢せて遣り度と思つ  
た念の届さしう今日の難儀と救ひ思はず聞た身の素性過  
去し事の仕方ぐねへうら今より直お道を急ぎ早く伊袋よ  
逢て安心させて遣るが能いと云つ、又もや十兩取出し是

の伊前よ還るのでない伊袋よいつどや世話も成し神と  
言て手渡して呉な併し親子の中故伊袋うら借るとも貴よ  
共して夫を元手よ百姓なり商人なりして堅氣ふなり親を  
大事おするが能いと金子を渡しけるお三吉の有難涙お咽  
ひ何と伊神をやて宜しいやら重ねくの伊厚恩死んでも  
忘れの致しません願て貴方様の伊詞お聞ひ是より直よ  
伊別れや夜を日よ繼で古郷へ歸り伊袋よ詫を致しますう  
ら先程もやた通り貴君の伊住所伊名前を伊知らせなされ  
て下されと云よ次郎吉の何も名を云よも及ばぬ私ハ次  
郎吉と云者生れの神田江川町子細有て三年以前大坂の親  
類を便りて行さしよ間が能く商法で金儲けをし古郷の空  
の懐敷久し振での江戸への歸り併し伊前よ意見の云もの  
己も矢張親不孝伊前と天秤お懸たら五分と五分一す先  
の知らぬ世の中縁が有たら又逢ひませう随分體を大切よ  
して是うら健康よ衰しなせへ茶代を出して其所へ置さ  
サア伊前も急ぎの旅故一刻も早く出立とするが能いとわ

峯を勝ひ三人連立川口迄俱み出て袖を分つよ三吉の次郎吉を伏し拜み見返り乍ら足を早めて終み其ま立去りぬ斯て次郎吉の勝手知りたる鎌倉の第一番の鶴ヶ岡二の下の下らぬ建長寺長谷の觀音大佛殿裏を忘る星の井戸其外名所舊跡を荒方お峯見物させ其日の早く雪の下宿をとり翌日の江戸へ行んと思へ古郷へ送る錦ならねど或る古若屋にて未だ巳の時許りなる薩摩上布の當世好み己れも求めお峯か夫々揃ひて宿の女房お峯の風を直して貰ひ銀糸目内服の夜の稼ぎの盗人といお峯も未だ白波の其行末の兎も角も今榮耀暮さる身の有様お峯を此方の相手酒酌替し盛生々夢の樂しみも碎く枕お告渡る早曉日の鶏の聲解かれて鳴鳥可愛くと聞さへ口の惜さと次郎吉お峯を呼び覺し朝の支度を聞へて駕籠を二挺頼み其日の通し駕籠めて品川迄来りしり次郎吉の思ふ様三年以來音信せぬ實家へ打つけし行れもせず誰を頼みて説事をして貰ふ迄飯お世帯を持お峯を

其所へ當分住らせ置んと思案を極め夫ふしても家を借んよの店受がなく無間家主が貸まじとらう愛等で店受を拵らへ度ものだと工夫をなし品川の宿中で駕籠を隠し態どけちな旅籠屋を見立て運入れ宿屋の女は是の早いお峯サア此方へお峯座敷へ通すよ次郎吉お峯よ向ひお前と實と云た品川の刃だせ此宿の江戸の出口で四宿で一番能い處で女郎も吉原より負ぬ處よさうして此様なけちな宿屋のねへと小聲で云折柄下婢が茶を持来るお次郎吉の一分包んで茶代を遣り酒肴と眺へるよ入違つて茶代の禮も来る此家の女房年の頃五十許りの太つちやう欲張婆々と云ふ事お峯の目も誤りなし握らぬ先うら追従笑ひ是の早いお峯様只今又多分の茶代を頂きまして有難う存じます貴方方江の島鎌倉へでも見物のお峯よりお座いますお峯若し同士のお二人連立お峯しみてお座いませう江の島も當年の大分参詣が廻りますうら願やうでお座いませう夫も付てもお内室さんお能

いお器量で旦那様と能いお釣合ナニお湯が出来たり左様なら旦那様お風呂が宜しいと申すぞうお湯道入遊バします様コンコよやお浴衣の奇麗なのを二枚持て来なうしてお二人様のお背中を洗しやなサア此方へと案内なし浴室をさして出行ぬ

○次郎吉宿屋の女房を頼む事

井お峯が父有家を尋來る事

扱も次郎吉の湯より上りて毎の如く酒酌替し心の目論見下女も言付此家の女房を其座へ招きお峯さんさんだ事を頼みますが實の私し江の島江川町の者ですが商賣用で大坂へ往き間が能く金儲けのしした道中で此女お深くなり連て来たものゝまら親の處へ自慢らしく連て行く譯にも行さうして友達の家を頼むも面倒ゆゑ事お懸隔れた此近所へ一寸した小体な家を借て當分圍つて置たいと思ふが夫も付ても店受がなければ困るが無理おどの言せせんが成べく此方で店受お成て下さらぬら夫

も長い事でお二二月三月の間其中の表向も然るべき人を頼んで内へ入る積りだが何と御禮の仕ますが其店受をして下さらぬらと言ふ素より欲の皮厚き女房ゆゑ齒を脱出して笑ひながら夫の何番お安い事貴君の様お峯の方のお世話ならんぬお致しませう幸ひ高輪の申程よ此間迄住居りました富本の御師匠さん今度能い旦那が出来て江戸へ引越ましたが平家ですそれ瓦屋根日中りも能く庭も廣いとの事夫も造作の勿論建具勝手道具も現らす付てサアお出なさいと言許りの住居ださうでそが三十兩なら譲るとの事直此先お居る谷八と言國戸が世話を頼まれたと云て丁度今朝参りましたお峯様なすつてお峯お入たら其谷八さんへお相談なされお直出来ませし又受人の所お私し方でお度致しませうと後先見すの安受合欲目のなき盲目蛇のお恐れぬ女房が話よ次郎吉の打脱び夫の誠み丁度能い今まで人の住だ家別お見るよも及ばぬ故やう私しを御前の懸念の者だと谷八さんと

やらへ咄しをして何卒取極て貰ひたいものと金を一兩紙  
よ包み是の借前受人の判錢又引移つた上の新宅開きの  
間似ごとく借家ながら祝ひ酒酒禮の別に致しませすと包  
みし金子を與へる女房の打悦び善急げと言ひますり  
ら外へ口の懸らぬ様谷八様へ言ひ込んで万事手都合の能  
い様として置ませうらら二人さんで後繰りと酒酒を上  
つて休みみさいと禮さへそこへ立出るも判錢の一兩  
を盡餅ませじとの欲心なり次郎吉の先一ト安心と其夜の  
打臥翌日の宿の女房の挨拶を待より外へ用ひなしと常  
引替へ朝寝したるがやうく起て貞を洗ひ朝酒の腹直し  
も買ひ置ぬ女房お峯お酌をさせて飲折しも此家の女房  
の彼圃戸の谷八を誘ひ来て次郎吉お引合せるよお峯の彼  
谷八を見るよりもチャ前様へと言ひ此方の谷八もチャ  
前前へ三島のお峯さん不思議の處でと言ひ乍ら次郎吉が  
貞をしげく詠むるよ次郎吉の切の彼與左衛門がお峯を  
買渡す圃戸と云ひ此谷八成し何れもせよ廿五兩の身の

代金の親仁へ變して来た事故只口入の世話賃を彼遺た  
ら仔細のあらじと若谷八さんとやら此娘の三島の與左衛  
門殿うら私か貰つて来ましたが今お峯と前様の様子此度  
親仁が是を賣と言咄しが有たが若や前が口入をしたの  
で此娘を知て出のり併し左様言譯で親仁の方より前  
おお禮をしない事なら私か夫丈けの禮の仕ませう夫ども  
只知て出のり先と潜りて尋るよ谷八の賣方貴方か仰  
の通り此子の親仁様へ元江戸の者で私しも懸念の中  
たが夫らどう言繰り三島へ行てお峯さんの家へ入夫と  
成たどの事今度女房の長い頼らひで大さお身代も不手廻  
りにした故と相談の上で娘を賣てどう都合を仕様と思  
ふが世話をし呉ねへうと先月末戸塚迄用が有て来たり  
ら前様の處へ態々頼みよ来たと言ひなさる故其處が商賣  
の事故或る宿場の旦那お咄した處その旦那が幸ひ箱根へ  
湯治へ行り一所へ行て見様と仰しやる故私しも子供を  
して此娘の家へ行き此子の親仁様と相談願ひ年一ばい百

兩と取極私し江戸は用が有うら湯治場でも旦那別れ江  
戸へ歸つて来ましたがママ能く那の親仁様を前様の女  
房にお峯様を與ました併し此子が賣買なつた時の親仁  
様ども懸念故五分の禮金百兩で五兩買ふ約束の仕ました  
が未だ金の貰ひませんと語る折柄隔ての障子を足で明け  
匂引の大盗人斯見付し上の身動きもさせぬと其處へ居直  
り大安坐片髪禿し疵跡の一癖有べき面魂是の誰ぞお峯が  
親の與左衛門にてありしなり

○お峯父を諫る事

井與左衛門後悔の事

再説次郎吉の計らするお峯の父の與左衛門が此座敷へ來  
りしよ折悪しと思ひけん差俯きて顔も上ぬよお峯の  
氣の毒さの遣方なく親仁の傍へ寄添て若親仁様此旦那  
が相談もせず私しを連出たのの悪いければ三年の身の  
代金廿五兩と云お金へ手紙を付けて置て来れば何も匂引盜  
人といふ譯のなし云バ前が子とした私しを救つて下す

つたお恩のある旦那様を云ども悪口をつく所聞にな  
いと云せも果す與左衛門のお峯を突除け置ましは淫亂女  
手前ふの思がある情が有り知らねへが此親仁よの盗人  
野郎手前ふ三年の勤めで廿五兩と云たのの賣の皮財  
布金の廿や三十で今十七の花盛り何で手前を手放す物  
年一ばい百兩と愛お居る谷八さんと相談願ひ欺して手前  
を連出したがまさうと思ふた油斷大敵一盃機嫌で寐た障  
をどう乳縁合たりア野郎と親の寢息を考へて忍び出し  
も白川夜船覺て悔しき彼宿を尻に帆懸て尋ねよ出しが何  
でも江戸と推量して道で聞々様子を問へ馬士雲助が口  
裏も必定期夫と心も勇み昨日谷八様の所へ着き是ら江  
戸中を毎日忍んで尋ね様と思つて居たを昨夕の事爰の  
内室様が來なまつて味ひ咄しの相談を餘所事とのみ思つ  
て居たが必當りの二人連大坂よりの戻り道江の島りけて  
鎌倉へ廻つて来た通し懸籠錢切の能い若夫婦と聞た故若  
も手前で有まいうと谷八様と一所お來て破れ小口の障

子越し覗ひて見れば、峯のじやう手前が居たり。安心した  
 が安心ならぬ。此野郎僅廿五兩の端た金置て行たを能い  
 氣よなり亭主氣取も鉄面皮いアノ廿五兩ハ昨夜で三夜抱  
 寐をさせた揚代金安いものだが、負て遣ふ倘谷八さん斯云  
 譯です。から何分此間の親方へ何卒お峯を浮願ひやませサ  
 アあま此所より用いねへ己と一所よ來やアかれと手を取  
 て引立る。娘の身も世もあらばこそ泣聲立て親仁さん夫  
 ハ浮前除りでないうへ少し浮世の義理人情を思ふた  
 ら其様非道い言れないものなれば私シ親子の縁を結べ  
 ばとて此事許り。浮前の言ふなりよハ成ませんどうよわ  
 き娘も一生懸命座敷の柱に緊拵着身動きさせじと居すくま  
 るを與左衛門ハ大お怒り此あま其了簡ならバ斯してもど  
 拳を堅め打んとする。谷八と此家の女房ハ憚て、左右の  
 手お縫り是ハア短氣の事どうう咄しの仕様も有ふハマ  
 ア〜と止むるを聞ぬ親仁ハ打捨て置て呉んねハ癖  
 お成りらと互ひよ三人争ふ折柄始終無言で差俯き居し次



郎吉ハ膝立直し是虎公金を欲くハ呉て還る。うら殺風景な  
 立廻りを止まして酒でも一盃飲め能いと言れて親父ハ不  
 思議顔己が名を知て居るお前ハと次郎吉ハ良をしげ〜  
 と打跡め仰天してお峯を打捨兄さでしたり是ハ〜と始  
 めの勢ひ何所へやら青葉は挽の情々どうづくまりたる有  
 様よお峯ハ元より谷八もあつけ取れし其中よ宿の女房  
 ハ勿と一息心の中の安心ハ既での事よ判鏡の彼一兩を返  
 す事りと大きよ心配して居たよ此様子でハ大丈夫と胸算  
 用の合たを悦び翳も様子と伺ひ居る人の心の翻々なる中  
 よも與左衛門ハ叮嚀手をつけて兄貴が手前も面目ない今  
 日の仕義早く知らせ下さつたら此様強い事ハしまいも  
 の何卒今の不調法の勘辨して下さいましと憂へ頭を摺付  
 て恐れ入たる其風情に次郎吉ハ打笑ひ浮互み知ず知れず  
 不思議の縁浮前も逢着て結構だの様子ハお峯くら聞たが  
 何も定まる因縁づくお峯が今度の身の代金ハ廿五兩と聞  
 た故夫丈け置て來たけれ共百兩といふ相談なら跡金ハ己

が通る程よお峯と親子の縁を切て己が女房よさして呉ん  
 ねへと懐中へ手を入るを與左衛門ハ憚て、押し止め浮前様  
 くら金お貰へるもの併し私しも那の廿五兩の中少しハ  
 手も付ました殊よ愛よ居る谷八さんへも少しハ禮もしな  
 けれハ濟ぬ故どうう那の廿五兩ハ浮世話お成た虎松様々  
 と思すよ三島宿のお峯が親仁見す知らずの與左衛門と云  
 るのへ親子の縁切お遣たと思つて下さいまし私しの體も  
 浮存じの身の上最う浮殿を致しままも懐中より金子五兩  
 出し谷八さんは約束の禮金精取て下せへ夫よ付て浮前  
 様よ浮願みといふハ此後私しお成代り此旦那の身の浮世  
 話且ハお峯が不調法でも有た時ハ小言を言て旦那へ浮世  
 をして下せへと鬼の様なる與左衛門も思義の綱よハ惡念  
 を我と我手お取捨さしはれ返りて居たりける

○次郎吉高輪へ所帯を持事  
 井父母の退轉を聞事

お峯が親の與左衛門ハ元來恥えし惡者なるに何進次郎吉

なりと知り俄らお欺せしものやと言ふ彼元下谷生れの  
博奕打よつて膨臭れの虎松といふ無頼者なりしが一年騙り  
押借等の悪事は依て八丈島へ三年の流刑となり彼地は愛  
年月を送りし幸ひ命恙なく放免の時を得て江戸へ立歸  
りしが其後の猶々恣まゝの行ひをなして居しが強情我慢  
の者も病ひよの勝れぬ習ひ不計風邪の心地を臥せし終  
は大病となり重き枕を打臥たり元より獨り者なれば外  
世話する者もなく殊に外の博奕仲間も付合悪く  
手前勝手虎松故誰一人見舞者もなく殆ど困窮極りしが  
聞傳へたる次郎吉が不便と思ひ早速山伏町の裏住居を尋  
ね金子と興へ長家の者へ金子と興へ虎松の看病を頼み  
折々見舞て深切に世話をしけるは虎松の夫が爲る病氣全  
快に赴きしうべ流石の悪者も其恩を感じ何り事ある時  
其恩義を報せんと思ひ居し酒狂の上仲間の者ど口論し  
て相手は疵を負せし咎も依て又もや牢舎仰付られ終つて江  
戸藩への所置となり僅の知背を便りて三島宿に至りし

或人の世話みてお峯が家へ入夫となり杉葉酒屋の名前を  
繼ぎ與左衛門といひなり夫の扱置き次郎吉の虎松の昔  
しの恩義を打解し心を感じ宿の女房に云付て酒肴を澤山  
出させ谷八虎松お馳走をなし暫し酒宴及びし其日も  
晝過と成し故虎松の次郎吉お暇を告げ三島へ歸らんと云  
ふ次郎吉の餞別として十兩を與へけるは虎松始めの辭退  
しけるが再三の進めは黙止難く請納め厚く禮を遣へ取  
告て出立なしぬ斯て酒宴も終り谷八が案内し隨ひ次郎吉  
のお峯を運て彼高輪の借家へ至ると思ひの外座敷も奇麗  
よて家の様子も氣に入しうは早速谷八の手傳ひよて家の  
掃除杯して夕方家移の酒宴をなし万事谷八の世話を悦び  
て金五兩を禮として遣ひしけるは谷八も過分の禮お悦び  
勇みて立歸りぬ跡に二人が差向ひ旅路は非ぬ我家と思へ  
ば心も移付て次郎吉の酒酌乍らお峯に向ひ縁と云もの  
不思議な物で次郎吉の親の與左衛門と己が知て居る者ど  
今迄知らなりつたらう併し今の様子と見たので次郎吉も大

略氣が付たらうが私しが大坂へ仕入を行たると云て商人の  
様な事を云し偽りよて伊前の親仁と同じ博奕打鼠小僧  
と仇名のある者さう聞たら伊前も愛想が付やうねと云へ  
ばお峯の側へ寄添へ何の愛想が付る處で有ませう貴方の  
爲は助けられた私しが身の上此上逆も伊前捨なく可愛が  
つて下さいぞ膝へ凭て差俯く其可愛さよ次郎吉が伊前が  
左様直心なら私しも安心したと言もの翌日早く離れよ  
頼み親仁の處へ説事も三年以來不沙汰の不知末直も時  
明くめへが何しる出懸る積り最う能い加減酒も切上げ  
飯でも食て寝ると仕様先刻谷八様か何うら何迄世話をし  
て置て呉たりら新世帯の様ぢやねへ伊前も一所に伊前を  
やんねへと中睦じき取贖も又珍らしく漸々お仕舞て取片  
付二人して釣蚊帳も結ぶ間短く其夜も明けて次郎吉の朝  
の支度をさしお峯も留主をさせ心置りの辨慶橋も春米屋  
をする森田屋市五郎と云ひ親吉兵衛の懸念の者故夫を顧  
んで説事せんと其家お到りて市五郎も對面なし久々大坂

よ有し事共を語り何卒親吉兵衛へ家出せし説事を頼み度  
と云ふ市五郎の打驚きそんなら未だ伊前家の様子を  
らぬのり伊前が三年跡お家を出て行衛知れずなられた  
故兩親の歎きは何程り夜の目も寐すよ心配して居なすつ  
たが其翌年博奕が大そう嚴重く吉兵衛様も少し餘炎のさ  
める中田舎へ身を隠そとて身代を仕舞夫婿連で遊られし  
が其後の風の便りもなしと語るは次郎吉打驚き忙然とし  
て居たりけり

鼠小僧實記中巻畢

編輯人不詳

定價一冊金二十錢

東京深川區富岡門前東仲町十六番地  
東京府平民  
出版人 廣岡 幸助  
發行所 東京橋區三間堀二丁目一番地  
社行主 山内 文三 期

廣告

○今古 大岡仁政錄

○村井長庵記	上下	二冊	定價金四十錢
○越後傳吉傳	上下	二冊	同 金四十錢
○時倉重四郎記	上下	二冊	同 金四十錢
○松田阿花傳	上下	二冊	同 金四十錢
○小間物屋彦兵衛傳	全	一冊	同 金二十錢
○白子屋阿熊記	全	一冊	同 金二十錢
○鈴川源十郎記	上中下	三冊	同 金六十錢
○水香村九助傳	上下	二冊	同 金四十錢
○鯨論裁許卷	全	一冊	同 金二十錢
○雲切仁左衛門記	全	一冊	同 金二十錢
○安間小金次傳	全	一冊	同 金二十錢
○後藤半四郎傳	上中下	三冊	同 金六十錢
○花咲屋藤作傳	上下	二冊	同 金八十錢
○さられ與三郎記	上下	二冊	同 金四十錢

右の史ども世よ有名なる大岡越前守忠相殿勤役中數多載許の中最も面白き事人意の外に出し明瞭を書つりて勸善懲惡を明了ししは婦女子方の浮心得よも成へる冊紙なれば何卒浮愛看あらん事を希ふ

鼠小僧實記下巻

○次郎吉途中大雪の逢事

井親實菊松を構む事

父母在せば遠く遊ばず遊事必らず方ありと古き教への有といへその白波の次郎吉が縁りの林に世を渡る途みを業と仕乍らも沈石思義の忘れずして父母の行術の知れぬと開氣の張弓も打折て矢の根も抜し心地しつ教へて具し市五郎お暇を告てそこくと弁慶橋を跡まなし高輪へどの歸りしげ鬱々として樂しむらねは是よりお登を引運て江戸の名所を見物させ己れも心を慰め居し以前に朋友又ハ吉兵衛が子分杯よ所々出て出逢様子を聞よ此頃の少々宛博奕も出来るよ云ふ事故素より好な手慰み己れが爲よハ表家業其所の土場うら彼所の内會大名都屋の居積けり遊び暮して日を送りし其年も暮果て新玉の春となり今日ハ正月の初卯なれば龜井戸へ參詣せんとお登も仕度を促させ雪催はしよや持病の癩の起りしゆを留主を

○參考源平盛衰記

全部十六冊 定價金三圓二十錢

此書ハ源平兩氏の盛衰興廢を委しく記し長物語りて世の人の能知るゝ處なれども此書ハ彼の本書盛衰記ハ當時の事を記し諸書を參考し精に精と盡せし珍書なれば題名ハ参考の二字を冠らせしなり然ハ當初一の巻出版以來大お世の喝采を博し自來日を陰月を閉し漸く過般十六巻の大尾まで落成仕つりハ間何卒本社および最奇書林繪草紙店等にて浮求浮覽下されたく伏て希ひ上奉つり

○南廷尉秘鑑

全部三十冊定價金六圓 但一冊金二十錢

補氏の 王室に忠あるハ人の知る處よして今在ハ其忠功を記せる書籍世よ多しと雖も就中此史ハ其春花秋實とよま摘得て當時の實況を目前に見るが如く著述せし原書よして三百六十巻の大部なれども史函の出入り便ならんが爲今回僅三十冊お縮刷せり然りと雖も一事一語の遺漏なく第一編 上巻ハ既ハ其功と後りて發兌よ及びたり後巻ハ續引續き一ヶ月二三冊づ、必ず發兌いよ、四方の諸法何卒續々浮覽求浮愛看あらん事を希ふ

するとの事なるよぞ次郎吉ハ去ハ一人で出陣んと龜井戸へ參詣なし歸り道お或る館屋へ道入寒さを被り熱烟ハ腹と痒へお登ハ土産の皮包み手よ提乍ら陰謀と酒の機嫌よ遣掛ぢらす之加ならず春とハ言よ未だ日も短く且蒲燒屋で間取しゆらふや永代橋近く來りしよ火燈し頃となり殊よ昨夜よりの冷たき風と籠俱よ降出す雪ハ宛然と綿をちぎりて投るが如く籠籠屋のわらハ棄て行んと町家の軒下を歩行つ、尋ぬるよ生憎さる業をする家もなく漸々永代橋まで來りしりゆ雪ハ次第ハ降積りて今日日和下駄でハ歩行りぬるお詮方なくも橋詰の出茶屋が仕舞し技費張替しをやみを持たんとて其所へ道入て辻廻籠杯通らハ乗行んと表を詠め居たれども日ハ暮果て往來ハなく犬の子さへも通らぬ折よ永代橋を渡り來るハ十二三歳位の子供よしと小さき盤盛を天秤棒よて昇きなから覗々と呼ぶ聲も幾さよめけて震へつ、雪路分て來るよぞ次郎吉ハ歎息なし雪の日や彼も人の子傳拾ひと酒屋の浮用を憐れみし秀逸



も今の思はれて那の小僧も並々の子であるなら此雪の火燧へでも這入て寝て居る刻限なる此永代を枯燈の観々と賣歩行の其口癖知らねども何しろ親の能々な貧乏人と思れる實不便な者も澤山ある浮世ちやと情心の次郎吉が思ふ折しも今我居る後置の前を通るより其親の姿を見るに淺黄木綿の筒袖草鞋も履ぬ形勢を見るよ忍びず次郎吉が小僧よくと叫止れば親賣の振返り雪明りよ透し見て伯父さん何だへと立戻る貞をしげく詠むるよ丸顔よして色白く最可愛らしき面ざしゆゑ次郎吉不便の彌増て伊前今此橋中を覗くと呼で居たが不斷馴て居る口癖又の残りでもあるのうと問ふ此方の打養れ伯父様聞て呉んねへ今日四盤賣昇いで出たのよ朝うら懸て今迄は漸々三盤の賣て来たが未だ一盤賣の手付ねへのよ夫だうら終々人の居ぬも知らず呼で来たのよ伊前安く負るうら買て呉ねへ是を今日買ねへと翌日の阿母よ藥と買て遣る事が出來ねへうら後生だと思つて助けて呉

ねへと詞の賤しき土地乍らも愛想のなきが猶可愛くさうう残りも幾許でも己が買て遣ふが此大雪も終雨具を持って來なりつたゆゑ辻襦袢でも通るうと此後置張よ先刻りから見張て居れども生憎襦袢も來す困つて居る處だつ伊前番傘でも能うら一本買て來て呉ねへく澤山と使ひ買を遣るうらといふお親賣の伯父さん直よ此佐賣助の傘屋があるうら己が買て來て遣らう錢を出しねへと盤盛を後置の中へ昇ぎ込む次郎吉の打祝の金子を一分取出しそんから伊苦勞だつ頼むよと渡せば金を受取て伯父様買て來るうら此盤盛を氣を付けて番をして呉ねへと雪を蹴立て走り行くよはんよ可愛らしい小僧だと暫し歸りを待折うら彼親賣の買て來たりし番傘を片手お持五十心かりの老人が杖を力お辿り來るよ破れ傘をさし懸て勞りつゝ漸々爰へ來り伯父様懸待遠だつたらう今道で親仁さんご己を迎ひよ來て呉ため手間がとれたのよア是の釣だよと錢と傘を差出だすよ次郎吉の請取て彼親賣の親仁に向ひ伊前

様此子の親仁様ですり利し今日日井戸へ參詣し行た歸り道に降出され時方なごの後置張壯意節を持折しも伊前の長子を通り懸りしゆゑとんだ用と頼みました聞べ此子の伊母さんご長々の病氣との事夫よ伊前を見る處が大分五昧も悪い様子さぞア伊難儀であんなさるだらうと言ひ乍ら腹懸の懸しへ手を入れ底をいたいて八九兩の金を紙へ捲り是親仁さん是の此子の親代と今の使ひ買最う少し遣ていけ信心参りの戻り道生憎持合せが少ないや何れ伊前の家へ尋ねて行け何所お住居して居なさると聞よ親仁のハハ私しの直よ始町の裏家住居家主甚兵衛が店を借て居ります花澤七兵衛と中者倅が賣方へ對し何り伊無理の押賣を致せしよ伊腹立もなく斯様お澤山伊鳥目を頂きましての濟ませんが折角の思し召此下され物の頂きますお入れ物もない伊様子この親の何して伊持なさりまをと律義一圓の七兵衛が金との知らねも多分の錢と心嬉しく我子も神を述さするよ次郎吉の空打詠め身仕度

して親仁様利も此大雪も刺を持っても行れぬうら夫の伊前も預て置よ翌日買なら買てもよい随分體を厭ひなせへ又此子もも編絆や股引位買て遣ねへと此家でもし煩らひでもすると仕方ねへうらと言つゝ着物の帯を尻うらげ日和下駄を其處へ脱捨て親仁さん失禮だつ此下駄も昨日買た計りだつ伊前懸なら履て呉な又此皮包の内へ持て行うと思つたが邪魔だらうら喚て呉なせへと傘をさし能く降雪だなど永代橋を雪踏分て渡り行ぬ

○花澤七兵衛困難を助る事

井原小僧御町にて夜盜の事

次郎吉お悪みを受し花澤七兵衛と云者の元九州の何某侯の家士ありしが生得律義正直めて人お婿船とを嫌ふより彼水掛ければ魚住とやらよて重役の憎しみを受聊の事を越度として惡様に上へ讒言なせしうは是非の詮聞よも及ばずして七兵衛の無實の罪よて長の伊腹となりたり依て僅の知己を頼んで江戸へ來りしが外お世渡る術

庫小僧買訓下巻

もなく己れの下地杯拵へ妻のおろくの人仕事などして親子四人細くも煙を立て暮せしが五年以前より七兵衛の大病を煩らひ只でさへ暮されぬ瘦世帯かれ僅の衣類調度さへ賣代なして今ハ藥を買ふ錢もなく世の縁の如く子を捨る敷ハあれども身を捨る敷ハなしと姉娘のお雪といへるハ容貌といひ心だてさへ飽しき者なるハ父の大病と貧苦を打越さ十六歳の蕾の花我くら手折て親の爲身を浮川竹へ沈めんふハ父の病の藥の代且ハ家の貧苦を救はんと勤め奉公を父母よ乞し物堅き七兵衛夫婦も然業させんハ心染ねども外手段もあらざるゆゑ其道の人を頼み吉原江戸町二丁目松葉屋方へ金八十兩で娘のお雪を賣り其金子にて七兵衛の藥ハ更なり古き借財杯を返し日々必用の品をぞを買調へ殊ハ身身の代金八十兩の旨もの、彼是禮なき引しゆへ手元へ残しハ六十兩程の金子なれば七兵衛其翌年病氣の全快せし頃ハやう、十四五兩をり残つてありしくらなるハ如何なる祟り

よや去年の秋七月頃よりまたく妻のおろくが大病を打臥七兵衛も煩らひ後ゆゑ以前の如く影も健なりならぬおろくが大病娘を賣し殘金も今ハ遺ひ捨む雪が弟菊松ハ今年十三のうよわき腕ふ日々娘ハ賣歩行し親子三人ハ生活はせの敷けもなく殊ハ母の大病ハ貧苦ハ以前増のみゆゑ詮方つきて七兵衛松葉屋の娘雪今ハ松山とて並ひなき全盛の箱敷となつて居るゆゑお秋ハ絶りて心ならずも無心ハ行ふ素より孝心厚きお雪なれば工面をして金子ハ送りし身、にならぬ勤めの身殊ハ親方の手前朋輩への外聞着難や雪の筋りまで買入れ杯して金の才覺なす様子を見聞する七兵衛が假令子とハ首へ浮川竹の勤めをさする其上お父もや金の無心をして苦勞をうけるハ人間の行ひハ非ず此ま、飢死をさるとも此後ハお雪も苦勞の懸せじと兩三度行し後ハ吉原へも行ざるゆゑ此頃ハ貧苦云ん方なく折柄はちらす菊松が次郎吉より賣ひし金の錢と思へど心細しく親ハ建立故體の皮包日和下駄さへ

押頂き我家へ歸り賣ひし紙包を開き見るハ錢ハおらで二分一分二朱なと取交九兩足すの金子ゆゑ親子三人顔見合せ夢かどバウリ打驚さし何處の人だり名さへも聞ま彼時斯る金を貰ひしと知るならハ又陰術も有べきハ殘念なりと七兵衛菊松彼方へ向て伏拜みかるくお云々と宵の咄しを聞するハ妻おらぬ袖の雨嬉し涙まくれたりける夫ハ初置り次郎吉ハ去年戻りてより貯への金子の少なからねバ只酒食遊びお遣ひ暮せしぐ座して喰へハ山も空し況て慈善を旨として貧しき者へハ夫々ハ身分ハ應じ五兩三兩と恵み與ふるゆゑ最早貯へも盡しうべいさや本職ハ懸らんと時しも彌生の月始め越町三丁目を忍び歩行しお其夜も子の刻頃土藏造りの立派の店構ハ今日店開きと見え積物の明櫛杯山の如く門お積重ね何分も富有の酒店と見ゆるおぞ一稼ぎして呉んど積物の明櫛を足代として忽ち大屋根より中庭へ忍び下り櫛子を見るハ漸々店開きの祝儀ハ酒宴の濟し跡と見え酒肴の器な盛處の片隅

積重ね飯焚男の其側らハ打臥居れり次郎吉ハ奥の門へ忍び行金籠等の引出をぬき口分したる金包を一個握め數ハ算ねる小百兩懐中なして跡白浪と立去ぬ

○次郎吉酒店の難儀を聞事

井三河屋へ再び忍び入金子を返す事

扱も次郎吉ハ久々よて百兩足すの金子を奪ひ取しうハ其夜の新宿ハ一夜を明し翌日ハ下谷ハ能き定賭場の出来しと聞て其家へ行んと己の時頃越町ハ差懸りしハ昨夜己れが忍び入りし酒店ハ戸を閉て商ひをせぬ様子ゆゑ次郎吉ハ怪しく思ひ昨日店開きの様子なりしハ何ぞと今日店を休みしやと其店の隣りなる煙草店へ立寄て委細を聞し此家の女房小聲よてママ世の中ハ何の悪い人も有ものよとお隣の三河屋様ハ去年旦那が亡りまして跡ハ今年漸々十五なる息子様を心よして淨内室様ハ一生懸命働いて今度店の賣出をするお付店藏を表丈遠直し此日ハ景氣も能く積増や何りも十分ハ行届き思ひの外商ひも有た

さうでそぐ運の悪い事ふの昨夜盗人か遁入て可愛想ふ昨日賣た賣溜や問屋へ拂ふ金さへ都合九十三兩二分と言大金を盗まれて今朝氣が付た家内中の騒ぎの實は一方ならず息子の青くなる内室様の癪を起す親類の眞赤ななつて家事不取締ゆる斯の仕合だと恨みを言ひ又問屋うらひ約束の金を頻り催促する見るさへ聞さへ浮氣の毒それゆゑ今朝のあの通り店も明ない譯ですと仔細と語る小次郎吉の忽ち大に後悔して其烟草屋を立出し心の中快よりらず我とても悪い事と知り乍ら持たが病ひの盗人根生併し自分の榮耀計りでいなく貧乏人を救はふと思ひ立たが賊の始め夫ゆゑ今まで所々方々よて盗みし金も大方の人は施したぐまさら那の酒屋が夫程の内証とも思ふなうつたよとんだ罪を作りし事と氣も鬱き其日下谷の博奕場で遊び暮しけるが十四五兩の儲けも有しゆゑ次郎吉の心も悦び是で酒屋で盗んだ金も纏めて返せると其夜子の刻過下谷を出て彼越町の三河屋へ再び忍び入りし

に奥の間あて此家の親子が密々咄し唐紙越ふ次郎吉が聞どり此方の知らされば彼母親の涙聲今も私しが言通り折角店も直し賣出までをしたけれども詮方もない夕部の災難今更金の工面も出来ねば前も其了簡も爲て四五年も奉公も出て辛抱した後小くも此家の立様よしなければならぬよと言ふ悴も泣聲もてハイ夫の吃度辛抱して奉公を致しますが阿母さんも段々と浮年を浮取なざるの不時の事あて此様苦勞をなさると思ひますと夫が悲しよ浮座りまそと言葉絶しき殊勝しよ次郎吉の歎息して思はずなせし咳の聲親子はたと打驚き昨夕も徳し盗人の又も遁入し事なるうと恐怖乍らも女房が其處も居るの誰ぢやいと咎むる聲も次郎吉が唐紙押明ぬつと遁入る姿を行燈の明か透し見るよ見形もいさな職人風唐紙づくめの着物と羽織盲目縁の股引腹懸渡黄の手拭目計り出して良の誰とも白浪の夜稼なせる悪者を知る物うらよ親子の俱ふ色青さめ聲を立なげ命をとりられんりと露居たりし



小次郎吉の聲を潜り若内室さん無驚さなすつたらうが實は私しハ昨夕此方の家へ遁入た盗人だ今日横子を聞ど私しが金を盗んだゆゑ折角賣出をしないすつたよ戸を閉る機も成たどの事夫が氣の毒さに金を返しよ來ましたと懐中へ手を差入れ紙も包みし交りし金を二人が前へ差出し私ガ持て行た金高の九十三兩二分能く改めて購取なせへ併し債の内どの旨乍らとんだ心配を懸ました堪忍して下さへと唐紙をノ切て何方へり逃去りける跡も親子の夢も夢見し心地して互ひも顔を打守り願て包みし紙を開き見るふ正しく金高九十八兩二分別お一通の手形の表も返済金 隠書とあり聞さ見るよ

昨夜賣殿方へ忍び入り浮斷りやさず金子九十三兩二分借用す恐れ入り右も付家業も被休以段何ともや譯無之聊りながら利分として金五兩と元金返金仕つりい問浮開店可被成此段中入い先ハ返納金隠書如件

江戸無宿何某

三河屋様

と認めありしうへ親子の者へ嬉しくも又利分の添し心  
懸りなれば夜の明るを待兼て家主へ届け早速其筋へ訴へ  
しよ仔細なく事済まなりしゆを取敢ず開店して以前の如  
く家業をなせしふ次第は其家繁昌して後々の先代も勝  
りし身代となりし其頃ハ盗人酒屋と仇名をされし由彼  
徒然草ある僧の度々強盗に逢ひたるを人々強盗法印と  
呼し事を書残されしは是は似寄の事なりし

○鼠小僧諸大名旗本へ忍び入事

井藤堂家伊賀組の事

爰は又次郎吉の盗みし金五兩の利を添へ越町の酒屋へ  
返せし後一人つくつく思ふやう大きく見えても町人の身  
代ハ高の知れたるものたましく仕事をし見れと骨折損  
の草臥敷け然れば此後町人の家へ這入る能々聞定め全  
くの金持ち無理非道に金銀を集める高利貸などあらね  
ば再び這入るまじ夫も付て盗んでも害ならぬハ大名旗

威しなごして爰は五日彼所は十日と寝所の床下或ひハ庭  
の木影忍び出處を人々知せずして伊納戸金を奪ハぬ屋  
敷ハなりりける或時外神田の和泉橋なる藤堂家へ忍び入  
りしハ外の諸侯よりハ用心も厳しうらず且夜廻りなども  
あらぬ様子ハ次郎吉ハ得たりと伊殿を志ざし忍び行間ハ  
あやなき後より曲者待てと呼び止られ次郎吉大いハ驚き  
身を忍ばせ右手の方へ足音を走り退れて一息間もあ  
らせず爰も我を見咎むる一人の武士がエイと捕ゆる襟  
髪を振拂ひつゝ逃出だすハ何方ともなく八九人取たく  
ど取巻れ次郎吉身体谷りて今ハ捕へられんとせし時誰と  
ハ知らず次郎吉が手を取て我と俱来よと云ふりと思へ  
ハ忽ち大地を放れ二三丈の高さ處へ飛上りしハ又とつと  
突落され驚きながら透りを見るハ闇といへハ鼠小僧が  
目ハ知る前町の伊堀際あるふぞ不思議の中の不思議と  
怪しみながら恙なきを悦びて遂に逃去ける

傳は曰く次郎吉が身軀忍びの妙を得て諸大名方の金子

本先祖の功と云ながら人の上よ立て衣食住不足なく  
榮耀榮花の日を送る誠ハ羨むべき事なり彼も人なり我も  
人なり同じ浮世の裸虫飛で火入る業ながら諸侯の邸へ  
忍び入り伊手元金を盗まん大膽不敵と思ひ立て諸々の  
大名旗本の殿々寝所へ忍び入り伊手元金を盗みしハ自然  
と忍びハ妙を得し鼠小僧の名ハ恥ぬ身軀自由の働さハ三  
間四間の堀を乗越丈餘の堀ハならなり高き屋根より飛下  
ければも身の軽き事綿の如く物音さへもせぬ自由其他柱  
を登り天井を這ふなど實ハ不思議の盜賊に諸家までも自  
然評判高く用心厳しく守れどもいつの間やら奪ハるハ  
金の行衛ハ白浪の今宵ハ寄せん翌日の夜ハ如何あらんと  
案とられ人数を増て殿の居間を警固の諸士追取刀ハ取奪  
けハ又夜廻り嚴重ハ諸門の堅めハ等閑ならず又即奉行所  
にても奉行役人等其賊の踪跡大方ならされども手掛なく  
徒らハ月日を送りけるハ次郎吉ハ只でさへ忍びハ妙を得  
し上ハ勝手覺えし伊殿の様子女中部屋まで忍るハ女子を

を奪ひしハ藤堂家のみの伊殿も入らず召捕れんとせ  
しハ向故ぞと云ふハ該家ハ伊賀組とて忍びの達人廿  
人あつて太平の世乍らも懇切ハ扶持せらるハ故ハ當時  
諸家へ怪しき曲者忍び入り恣まハ伊手元金を盗み取  
影を見せざる由評判高かりければ藤堂家ハ外ハ夜  
廻りを用ひず彼伊賀組ハ豫防の備へを命せられしハ果  
して次郎吉忍び入る事能ハず却つて召捕れんとせしハ  
り藤堂家の深慮賢しと云ふべし

扱も次郎吉ハ彼越町の一條より志ざしを替へ諸大名へ忍  
び入り金子を奪ひしこと數多なれども素より貧乏者を救  
ひんとす本意とすれば取より早く貧乏人に見る時ハ  
五兩三兩と身分ハ應じて人知れず施し與へ己れも榮耀榮  
花ハ世を渡り彼の高輪の飯の妻ハ峯の外に圍ひしハ所々  
ハ二三ハありて最寄りの假の宿月の内ハ二三度も行通  
ハ居たりしハ彼藤堂家まで危きを助りし時ハ命りらハ  
後草摺廻り寺店ハ圍ハ置くハ國といへる女の許を志ざして

走りたり扱其處へ來りし頃、早明近き寅刻頃なりしが我  
家ながら直と入らず先中の様子を伺ふに、附馴ぬ男の  
聲あり扱、お園の外、お旦那をりでもして居るのり何の  
兎もあれ聞正さんと口口は耳をさし寄つ、息をこらして  
居たりける

○次郎吉園ひ女の門は様子を聞事

井お園仔細を語る事

扱る次郎吉が門おひみ聞と知らず中なる男が密々咄し  
そんなら、お旦那を欺して株金どりの百兩を翌日首尾  
能受取たら、跡の野となれ山の手へ、當分忍んで世帯を持  
夫又付ても目印の植木鉢を忘れまいと云ふお園の聲  
として夫の承知しました、お園の植木鉢を出したりらと  
云て、餘り早く来て、人目があるうら成丈遅い方が能いよ  
さうして今夜の最う夜明も近いうら早くお歸りと言ふ  
は彼男がそんなお何も追出す事、おねへ併し此ま、歸るも  
残念だが二階お客が有るとの事なら仕方なへド、お是

うら吉原へでも行へいと立上る様子、次郎吉の聞きを幸  
ひ隣の軒下へ忍び居ると、お氣も付す門の戸明て立出る男  
の手拭で面を包み頃しも九月の末つ方明方寒き夜の道吉  
原さして行過る跡を見送る、此家の女お園が門の戸閉んと  
する袖を潜りて次郎吉の座敷へ通り火鉢の際へ走り行  
行燈の燈火を薄暗くなし、頼冠のまゝ、大安座まで煙草をく  
ゆらし居る折しもお園の門の締をなし座敷へ来るふいつ  
の間に入り替りしや一人の男が煙草をくゆらし居けるよ  
どお前のマアどうして愛へ何處うらお出と云ふを聞て  
次郎吉がお園驚いたらう己も驚いた色男、無言のみで有  
りませうと言ひつゝ、冠りし手拭取らばお園の仰天なしお前  
さんどうして今頃と言ふお次郎吉の打笑ひとんだ時分お  
不意に來てお邪魔な成たり知らねへ、堪忍してくんなせ  
へと言はばお園の涙ぐみ次郎吉が側へ寄添ひてお前さんの  
お詞で、何う私しお浮氣の事でも仕たやうお眞綿で首を  
締るやうなお疑ひ今出た男が有りますうらお無理で、有

ませんがあの男の私しが見も知らぬ者ですといへる詞を  
次郎吉押し止め何もおれが甚助らしく言ふのでないが實  
の今來た處で男の咄し聲がするゆゑ、是れは必定お前が  
外お旦那取でも仕たのうと様子を聞、百兩どりの株金と  
外の旦那から翌日受取て二人此家を欠落と約束、堅き常盤  
木の松り夫とも色深き黄菊の白菊の何の兎もあれ鉢  
植を目印は出すと云ふ味い事までを、残らず聞た内緒話し  
今出て行たあの男、お前の色と儘お知りし、此大郎吉併し  
何もそれを悪いとい言ねへ、お前も一人のお母と不斷大  
事おする癖おごんな深い譯があるう知らねへ、外の旦那  
が百兩といふ大金を出して何の株だり買てくれると言ふ  
のと自分勝手な欠落をして、第一お袋のどうする積りだ  
お前は限りそんな了簡と、お思ひなりつた忘れもしねへ、己  
が大坂から歸つて來た翌年丁度今時分九月の末時、後れの  
枝豆を、お前が雷神門前で賣て居たゆゑ、様子を、お親仁が  
亡なりお袋一人で其日暮しも困るゆゑ、斯して枝豆や何う

を賣て暮しの足おすると言ふて、其時お前の未だ十五間も  
不使と山崎町の所帯を仕舞せ、愛へ越させて足懸五年今で  
お前も、奥山で梅本お園と言ふて、お指折る、茶屋女多  
くの客を取扱へば、能い旦那も付くだらうし、また色男の二  
人や三人の有たと言ふて、夫を兎や角いふ己でも無言親へ  
不孝なる様な心得違ひ、お止ませへと、醉な詞の強異見を  
聞てお園の涙を流し、譯を、お存じないゆゑ、今出た男を私  
し、お徒ら男と思ひなされる、お無理で、おありませんが、何は私  
し、お女心の薄情なれ、おどて、今仰しやつた通り、山崎町は居  
た時分、お母さんと只二人、其日暮しも立兼て、喰や喰すの貧  
乏世帯、お前さんのお影で、人並の暮しも出来るのみならず、  
水茶屋の株、お更なり、此家を買て下され、月々小遣も下さる  
は、おの、お前さんを、何で私し、お餘處よして、外へ、お浮氣を致し  
ませう、夫おつぎ今出て行た男、お泥棒で、お母さん、お今日、日本  
所の、お庭の、處へ、お泊り、お行ました、お夫を、お付込で、お遣入し、お裏口  
の、お雨戸を、お外し、お敷うら、お梅、お金を出せ、なんでも、能い、お旦那、おあ

るは違ひぬへと懐中より短い刀を出して威した故もし聲を立て疵でも受ていつまらぬと嘘八百の口車欺すも手なしと色仕懸元より伊前さんより外ありませぬ旦那様株金百兩を翌日下さる約束ゆる夫を受取翌日の晩次落仕様と云ひくるめ又二階は田舎の泊り客があるうらと鼠の騒ぐを幸ひは漸々歸せし泥棒と色男との嫌疑ひは無理でいさゝか斯云始末翌日伊母さんと相談してどうう工風を仕様と思ひし所伊前さんが伊出な成たの私しが身おどり何はと嬉しいう知れませぬ何とぞ翌日の工風をなされ彼奴が再び来ぬやうな伊願ひの上ですと仔細を語るよ次郎吉が切のさうりと今更にお園が手前も面目なく我疑ひも良解て跡の互ひは睦敷枕をりはして寝ぬるなるべし

○次郎吉植木鉢を出して賊を釣事

井三右衛門が手下は逢ふ事  
 初其次の日次郎吉のお園が咄せし昨夕の盗人のごん野郎り偽引よせ慰み遣んと合圖をなせし植木鉢を目付や

通りを出ると角は料理茶屋があるうら先へ行って静な處で一盃飲で居てくれ今跡うら直へ行うらと言ふよ夫ぢやあ親分待て居ますとそこへ立出ぬ跡は次郎吉お園を呼び伊前此間預けた金を出して呉んなど何氣さく言ふよお園のハイト箆筒の引出より取出す金財布を次郎吉の受取て其中より五十兩を取出しお園や今来た夕部の盗人の己が大坂お居た時分同じ博奕仲間の悪者で良も知て居る者ゆゑ今更にも歸されず殊も伊前を己が園つて置といふ事が知れると又無心よでも来るぞ面倒だらうら己の只懸念の者で今日此家へ遊びお来た事と咄しをして置うら伊前も其積りで又今の男に限らず此後せんな者を探ねて来ても決して己が世話も成て居ると言ふていならねへよ己もこどお寄少しの間田舎へ行けりも知れぬうら五十兩を置て行はせよ翌日でも阿母あが歸つたなら能く相談をして人を頼んで預金よするとも又能い様でも有たら買ひ能い金子を渡し立出るよお園の何となく氣も懸る次郎吉が詞の

うら二階の窓へ並へ置きお園と相手お酒酌ながら日の暮るを待居たるお其日も早く暮果て淺草寺の六ツの鐘耳元近く聞ゆるよ最早時刻と次郎吉のお園を二階へ忍ばせて一人座敷お大安座火鉢の側は煙草をくゆらし待と知らず曲者お書間借りよ見定め置きし窓の植木の松枝の我を待との知らせり時刻を計る宵間の戀も心もくらまぐれ門の戸明て咳ばらひ跡は切て中仕切の障子を明て今上らんとする時まで無言で居たる次郎吉が手燭へ燈す大燭燭思ひけけなき曲者お鼻の先へさし出して伊前何所から伊出だど不意を打れて彼曲者私しんと跡の口は明た口結びうねたる其顔は打泳めたる次郎吉が伊前の金藏ちやアねへうと云れて曲者又仰天し眼を定て次郎吉が顔をしげく打守り伊前の次郎親分とんだ所で不思議の對面しうし伊無事で伊目出度伊聞なされしう知らないが大坂でい大ぐりのお淀親方も又私に親方もと云ふを次郎吉押止め聲を密めて金藏よ愛の少し咄しも仕替いうら直よ此

はしと思へども平常の氣質も知るゆゑよそんなら此お金の伊預りやしますが又近い内来て下さいましと送る門の戸次郎吉の立いでながら此處の籍を能く仕など詞を殘し金藏が待て居る料理茶屋へ至るお奥座敷は酒肴を打並へ待捧へたる金藏が先其後の挨拶などして小聲も成て言ひけるの何うら先へ伊咄しうさうやら私しも此春の騒ぎうら大坂を遊延び古郷の此江戸へ歸たされども二十年餘も遠ざうつた古郷ゆゑ知る人もなく僅うの稼ぎも漸々ど其日を送て居りましたがをうしても住馴た大坂が戀しくなり好機仕事で路川を流へ高飛と思ひ懸なく昨夜伊前の居た宅へ女一人を付こんで威した處が彼奴も業者其名も床し梅本のお園とくいふ茶屋女いやな旦那も園の強面月日を送るの欲と二人で漸々お欺して頼んだ百兩の株金を翌日貸ふ約束ゆる其金を貸ふたら私しを連れて逃て呉ると牡丹餅で頬叩く味ひ咄しよ今夜二階は泊り客も有ゆるよ翌日金を受取たら印しよ植木鉢を出して置けり

らと何うら何まで抜目もなき女の氣轉も心嬉しく彼が詞  
は随つて昨夜の吉原で夜を明し今日晝間来て見れば約束  
の植木鉢が出て居るうらの上首尾と約束違へず時刻を計  
り明る門の戸敲りら棒は浮前も燈火を差出され跡へも先  
へも行止りせうして能り逃端を失ひとんだ仕置を受やう  
うと心配したく浮前の浮顔で大仕合彼お園とやら親分  
の浮樂みりへ左様ども知らぬ私しが不調法勘辨して下さ  
いと言ふに次郎吉打笑ひ浮前も餘程女おのいくじのねい  
男さしうし彼女へ已が譯のある女でないが奥山で馴染  
ゆゑ今日晝間に遊びお行た所が昨夕の盗人か道入たりら  
口より出任せと嘘を並べて置たが今更急は此所を越す譯  
もゆるす置は困ると鬱悒で居るうらそんなら己がせう  
り咄を仕てやらうと女は代つて浮前の來るのを待て居た  
が三右衛門の子分金藏と夢も己ア知らなんだ浮前も  
折角百兩の金を盗ふと樂んだそのぐれはまの心休め己  
がせうり仕様が氣も懸る大坂の淀辰親分且の兄貴の三

右衛門さん何う怪我でも有たのうと問ふ金藏膝指寄せ  
親分未だ聞なさらねへり怪我處り此春の大騒ぎ淀親方の  
いふも更なり三四十人の手下の者も大方上へ召捕れ首  
成た其元を糺せば矢張女ゆゑ訴人をしたの浮前が江戸へ  
來なざる時十生目村の圓覺寺で救つて還た鑿子の二人お  
龜お花が恩を仇えて返せし始末マアお聞なせへと金藏が  
是より淀辰の話しを仕出せり  
○淀辰新町遊興の事  
井藤子龜八小花の事  
扱も大坂の盜賊屋三右衛門の手下の金藏が今說出す淀  
辰等の仔細といふの五年以前次郎吉と俱にお先の半次が  
知らせよ依て十生目村の圓覺寺へ押入りて彼穴熊大太郎  
を殺し千二百五十兩を奪ひ取て三人して配分おし次郎吉  
が江戸へ下りし後淀辰等も彼十生目村の様子を聞に下男  
與助が白狀お依て穴熊の首の獄門となり與助の死罪を爲  
て圓覺寺の落着の濟し其時忍び入りたる三人の強盜高

の知れぬ穴熊の所持の大金を奪ひ取逃去たるは是又容  
易ならぬ曲者なりと京大坂のやあ及バす所々草を分けて  
詮議しければ元より彼與助の三人俱面を見知られ  
ざる事なれば人相書を以て尋ねる術もなく雲を掴むが如  
き尋ね者ゆる久しく其手懸もなく打過しが此年の春淀辰  
が同業の宿屋仲間と參會の戻り道今宵の是非とも新町へ  
出無遊興せんと何れも酒の機嫌お勤められしお淀辰も否  
とされぬ付合も表家業の詮方なく浮世の義理と俱々新  
町の揚屋へ到りしは十四五人の大一座飲や話へや人々と  
内へ孫も有ふれて藥罐頭の老父が先立てそゝのうすお  
若者等も得手お帆懸て己れくの隠し懸團扇の恥を明る  
みへ自慢らしい淨瑠璃のふしも端のね高調子聞え付け見  
るよつけ片腹痛く淀辰がかゝる酒宴の始めより樂みとせ  
ぬ生質ゆる只繼よ任せて酔酒一人心を慰め居し早夜  
も次第更ぬるゆる酒宴を止め各々相方の遊女と連れられ  
夫々の寢間へ到るよ淀辰も相方の遊女海茶といへるよ案

内され其座敷へ到りしげ元來奇術も害ある女の肌一生觸  
じと覺悟せし淀辰ゆる我合方の貞さへも碌々見覺えも亦  
かりしが最前より人々の盛衰しを見聞しつゝ飲過せし酒  
の酔し流石大丈夫の魂ひも浮されてや我合方となりし女  
の如何なる女もやと燈火の元おしげく彼海茶を誑む  
るよ年の頃ハ二八バウリ其面影の美しさ櫻梅の香りを  
添し如くなる容顏は鉄石心も忽ち碎け恍惚とせし淀辰  
が前後のほども打忘れ彼海茶が手を携へ一ツ布團比  
翼の契りを結びしりの奇術を破り且の龜八小花を寵愛  
せし穴熊大太郎を一刀お切殺せし報ひなるり又ハ天命の  
爰も盡たるり夫も付淀辰が身の亡ぶべきといふりの淀  
辰等も助けられし京都の鑿子龜八小花の兩人ハ彼時三人  
の者お助けられ我家へ歸りしが半月も行術知れずと成居  
し身ゆる其親方の所々へ手を廻しその行術を詮議なし且  
上へも訴へ置し事ゆる早速二人が歸宅の趣き又十生目  
村の圓覺寺へ捕られ居りし事とも一々上しうハ二人と

も奉行所へ召呼れ大太郎が所行且其夜金子を奪ひし強盜の面良格好等見知り居らば委しく上へ旨を仰せ渡されし二人とも隠れ座敷に居る時淀辰等が大太郎と細打ちし包みし手拭もどれし事ゆゑ薄々面良を知らざるよりあらねども流石に賊ながら命を助けりし恩義の有ゆるふ曖昧ある浮答へを中上し上後人も大太郎が切れるほどの事ゆゑ若き女子をも驚き恐れて眠と見究めざるの尤もなりと強て尋ねず只此後もし三人の中一人たりとも見當らば早速其筋へ届け出べし本人の違ひなければ浮寝美として一人は付金百兩宛賜はるべしと言渡され仔細なく歸されし小八花も其後の心は懸す藝子の業をなし居たりしが圓覺寺の一條より彼藝子の強盜は奸淫されし者なりとて京中の評判高く座敷の勿論町中までも色々嘲けられ指さるゝも最愛く他所へ行んふる自由もならぬ抱への身ゆる其儘愛き月日を送りしが三年は過て後藤八の年季も明自前となりし京の住居の後ろめ

たく元より兩親もなき事ゆゑ心安く僅うの知音を便り大坂新町へ來りて稼ぎ居たりしありの妹分の小花も龜八も一年も後れ是も年季の明たれども思ひの同じ身の請ふ京の住居の物憂くて同氣求むる龜八を便りて新町へ來りしは同病相憐れむとやらみて中よく二人一ツ家も稼ぎ居たりしが計らず旅籠屋仲間の大一座酌し呼れし龜八小花の近江屋喜左衛門と云ふ儲り見知りし圓覺寺の強盜と淀辰も眼の付しと彼方の知らぬ様子ゆゑ成丈面を合さぬやう二人の其所と取廻し早酒宴も濟しう其家へ暇を告げ連立我家へ歸りし留守の雇ひ婆々一人ゆゑ龜八小花の頼を合しりの喜左衛門が事を叩きて彼を訴人なさんふの備手で粟の百兩といふ大金を浮上より賜る約束の盗人少しの恩義の有ければせうせ一度の浮上の厄介私しどもが訴人せずとも遅りれ早うれ召捕れる喜左衛門なれば外うら知れぬ其先お是うら二人で訴人して五十兩宛の山分けの味い相談でいなりうへといふ龜八が甲よ

りも厚き心の強欲の夜半の嵐の露知らぬ小花も俱々打笑みて何事も姉さん能きやう私しん否と申ませんと自ら龜八の身支度してそんなら一所の會所までと打違立てを叫ぶける

○淀辰等罪お亡ぶる事

井三右衛門藝子を切て自訴する事

愛お又淀辰の年來慎しみ守りたる奇術も書ある色欲を如何なる天魔の所爲なるう薄紫の色香も迷ひ其夜樂しき夢を結び大い心氣を懸さめしが早きぬくの明の鏡又の逢瀬を約しつ、何れも連立立出るゝ淀辰も身仕度して薄紫も別れを告出んとなせる唐紙を明る間運しと紐子の面々上意捕たと八九人花も嵐の殺風景生捕んとて紐付を右と左へ取て投こし何ゆゑの上意呼はり此喜左衛門身も取て悪事の覺え更まなし人違ひをし玉ふなと言せも果す口々に証人有て儲りも知る圓覺寺の大盗人殊も汝が家内を詮議せしが同類往返の書通且深く秘置し奇術の一巻

夫を所持せる汝こそ出投自在の賊の首領淀辰は疑ひなし最早天命盡たる身の上さあ尋常も浮寝を受よと呼はりながら追取圍む捕方の幾百人と數知れず空飛ぶ鳥も非されバ違るべくのあらねども腕も覺えの淀辰ゆゑ打破つて逃れ出んと一時定めし胸の中然れども荒き事をしつて多くの人を害すに至らん然る事なすの本志もあらず且昨夜の思はずも酒宴の餘り我あがら女も肌を汚せしは是運命の愛お盡ぬる前表ならんと觀念して差爾と笑ひ云ひけるは離りの知らぬが訴人有て我悪事の顯るゝ上は今更際するも無益の事又手向ひして殊更に罪造り爲んより尋常も繩受ん率何れへ成とも引立られよと少しも動ずる景色なく手を後ろへ廻しけるが捕手の唄人出來り流石の淀辰神妙の至りと紐子も命じて繩打せ奉行所へ引立て入半させしが奉行の其後白洲まで是までの悪事を尋ねられし淀辰やう私事悪事を働きて金子を奪ふ事數知れず然れども善人を害せし事なく又奇術を行ふはせゆゑも森淫等



勿論せず其得たる金の皆我自由由遣ひ捨しのみ又同類  
 手下の四五人も是ありしがいづれも死果又の行衛知れず  
 となり今一人もなく且近江屋方召仕の者皆々私しを  
 實の旅籠屋の主人と思ひて奉公致し居る者なれば彼等ハ  
 一同修免し下さるべし其外ふや上へも事更ななし一日も  
 早く修仕置仰付られ下さるべしと其後一言も物言さる  
 り浮奉行も淀辰が心底假令如何なる拷問も懸るも同類  
 ハ白状致すまじと察せられ其儘牢内お繋ぎ置れ忍びく  
 む餘類手下を詮議あらせらる愛お屋屋三右衛門の淀辰が  
 召捕れしと聞早速才助金藏の兩人を招き此度親分ハいつ  
 どや圓覺寺まで救ひ遣し二人の藝子の爲に訴人され召捕  
 れしと併し親分の氣質同類を白状する事ななければ追  
 り手下を召捕れん汝らハ早く此地を立退き身を全ふせよ  
 我ハ今の恩を仇ませし二人の女を切殺し自首して親分と  
 俱に冥途の道連れせんと思へば疾々支度せよと五十兩づ  
 を遣りして逃し遣り猶召仕の男女を呼び此度我等用事

有て江戸へ参るに付此家を仕舞ゆを汝ら夫々自分の荷物  
 等今日中取片付よと言聞せ所持の金子を分與ふる召  
 仕の者の寝耳も水の思ひのれれも主の言付け辭する  
 術なく夫々も眼を告げ金子と貸ふて立去りぬ三右衛門ハ  
 理る方なく家を取片付淀辰が召捕れしより五日目の夜三  
 月の始め覺之の業物腰ふばつ込み番町なる彼龜八小花が  
 家お忍び行内の様子を伺ふ未だ兩人共座敷より歸り來  
 らざるゆゑ暫し其軒下よみみ歸りを待よ斯ど知らぬ  
 龜八小花二人連立酒樓縁客の噂もどろく歸り來るを  
 儲りよ夫と三右衛門が身を忍ませ二人を家へ遣入せて  
 んどなせる門口より續いて遣人よ二人ハ驚き浮前の雄だ  
 へと言を三右衛門の門の戸をみて上りながら冠りし手拭  
 取より早く見忘れのしめへ己が面能も淀親分を訴人をし  
 たな其返禮ハ此金をと強刀引抜き龜八が駒板目懸け差貫  
 くよ叫と一聲魂消聲小花ハ驚き人殺しくと呼りながら  
 ら裏口へ逃んとするを飛懸り肩先四五寸切付れ死鳴と

俱に倒るゝを髪を毛取て引摺來り龜八が髪を毛片手お振  
 り二人が貞を白眼で面お似氣なき欲ぬ女め斯されても金  
 が欲ひくと頭と頭を打合するふ二人ハ苦痛も絶難く聲を  
 限りよ呼んとすれども早息も枯々なるも最早往生させて  
 呉んと二人が首を打落し濁さし咽を濡さんと鉄瓶の湯を  
 口から呑みはつと一息繼ぐ折しも先此家の雇ひ婆々が  
 耳こそ聞えね眼で知りし三右衛門が有様も速早く裏口よ  
 り近所隣へ知らせしゆゑ早速其筋へ通達せし幸ひ會所  
 捕方の役人出張有し折かれバ夫々人數の手分をさし  
 三右衛門を召捕んと表の方の騒しけるよを固より期した  
 る人殺し我より訴へ出んと思ふ三右衛門ゆゑ少しも騒が  
 ず自ら名乗て縛しめを受終り奉行所へ引れしが是も淀辰  
 の如く自身の惡事の白状せしが同類ハ一人も告す依て是  
 非なく裁許も極り四月下旬淀辰と三右衛門ハ獄門へ行ハ  
 れ其餘の賊ハ死罪も處せられたる其中よ三右衛門の手下  
 金藏ハ親分より五十兩を貸ひ暫し大坂へ忍び居しが幸



ひ天の網を洩れ事落若の後江戸へ来りぬ去れ元より無頼の悪徒ゆゑ所持の金子の遺ひ果し所々よて小盗をなし居る中計らず次郎吉が捕ひ者お國の家へ忍び竟り又次郎吉が對面して淀辰三右衛門が事までを斯物語し譯なりき

○次郎吉金藏の金子を與ふる事

井兩國よて観賣お誘引る、事

初次郎吉の淀辰と三右衛門が鼻首されしと始めて聞き流石お我力と頼み又兄弟の約束さへせし者共なれば片腕をもぐれし心地をなし只溜息を繼りり暫し詞も無りしが併し悔て返らぬ事と思ひ返して金藏は向ひ知らぬ事とて迂闊く此身へおはちの廻るを知らず能い氣も成て居たければ最早斯して居られねへと斯己が言たら浮前の三右衛門とも兄弟分の一人で命を欲がる臆病者とさげすむり知らねへが浮前も知ての通り大坂より歸つたも親仁やお袋と逢度計り歸つて見れば行衛も知れず頼みの綱も切果て木より落たる様同様せうせ一度の浮上の綱お懸る

覺悟で居るけれども此世も生て居るならお親も逢て詫事を言度計りよ斯道で未だ尋ねて居るもの、如何した事やら手がかりなく今日まで逢ず居る事ゆる猶更親が懐しくどうり巡り逢たなら最う先のねへ親仁とお袋少しの氣休めでも言て見送りて己が心底しうし植木鉢の一件だぐ五十兩路用を遣るうら夫で金藏縁切よして呉ると懐中より金子を取り出し與ふるよ金藏の笑ひつゝ、親分それで済ませんが先刻も言通り最う餘熱も醒た時分是から此度の中仙道を登る積り夫お付親分への耳打だぐ浮前が圓覺寺へ行た時供に連た彼お先の半次めが持問の苦しさよ仲間の者も言も更なり浮前の事も身の上を知て居るとけ鏡口散したゆゑ來懸り仕事をした三州吉岡村の極印金又花又の織越が家へ忍んで稼いだ五百兩の一件まで残らず上へ書留られ半次を始め二三人見知人として其筋うら江戸へ送られ浮前を詮議するとの事を道中でちらりと聞たが夫が實の事なら浮前も江戸の浮雲ゆる何處うへ姿を隠

しなせへとされて次郎吉打毟眼能く深切に知らせて呉たそんなら爰で別れるうら随分達者で居るが能いと次郎吉の其家の拂ひをして金藏と俱立其儘袖を別らしが獨り情を思ふやう金藏が胸ながらも聞しといふ彼半次等が我を見知人となつて此江戸へ来て居るとの事なればうら〱晝間の歩行れず夫お付お袋を始め廻つて置く女共へ跡の難儀を懸ぬやう始末をして置すべなるまいと思案を定めて其夜の本所へ圍ひ置く女の許へ行てお國お言し如く言聞せ金子を與へて其夜を明し次の朝其所を立出兩國橋へ來懸りしよ肌吹通す川風お冠りし手拭の如何しけん解しゆゑ結び直さんといひ折柄且那樣で有ませんうら一人の若者が聲を掛るよ次郎吉の誰ならんとしげ〱貞を詠むれども終り見知らぬ若者ゆゑ浮前の誰だり知らぬいお私し見忘れましたと言を彼者が打笑ながら且那樣の浮忘れなされしも無理で有ません私し未だ前髪の有し時殊よ日の暮雪明り永代橋で観を賣とて貴君も多分

の金子を頂き親仁と共に立歸りし小僧で浮座りすとされて次郎吉さていと心付言れて見れば見覚えのある面貞と打笑ひつゝ、大壯立派の男も成たのですつうり忘れて仕舞たが親仁さん達者うへと言れて菊松悦ばし氣よ旦那さまの浮情で頂きました彼お金貧の病の藥よハ賊も利目早くしてお袋も病氣を癒る其上は私しが姉の身分も定まり今でハ此本所の相生町へ引越して小間物の渡世を致し居りますうら鳥の鳴ぬ日おあるとて貴君の胸をしない日ハ浮座りません何卒家へお寄なされて親仁やお袋又ハ姉もも浮達下されまじと云詞さへ大人びて以前お代りし菊松が様子よ次郎吉悦ばしく夫ハマア何より結構併し浮前が風跡せうも小間物屋さんとの見ゆすせう見ても頼人としり見えねへと云ハ菊松それハ旦那の仰の通り私し子供の時分から船が好で浮座りますうら彼年姉が世帯を持やうに成ましてうら私し親へ願ふて此兩國川岸の船宿へ奉公同様雇れて來て居ましたが今でハどうり斯う一人

で船を漕やう成ました夫の鬼も角今やた姉の家迄何卒  
浮出なまつて下さいと袖を取へて放さぬゆゑ次郎吉の迷  
惑の思へども是非なく菊松を連れて相生町の其家へ  
到るよ二間問口の二階家まで店も奇麗な品々と並べ立た  
る小間物店菊松のいそくと親七兵衛夫婦姉のお雪も知  
らざるよ夫のく親子の悦び下へ置ぬ二階の座敷へ  
誘引て敷毛氈も赤き心を願ひせる正直一途の七兵衛が妻  
と娘を引合しぬ

○七兵衛身の仕合を語る事

井原小僧大川へ飛入事  
斯る折しも菊松が詠らへしと見え酒肴所狭まで打並一  
人の客を三四人代るくお献盃蓋七兵衛のいと嬉し氣よ  
云るやう若旦那さ貴方は恵みを受ました彼時の酒所  
の浮座りません薬さへも飲れぬ貧苦の中女房あるくケ煩  
らひよ薬を買ふも菊松が小腕は稼ぐ其儲けと私し内職  
よ鈍き手業の端な錢思ふよ任せぬ看病よいとと愛し病人

せ少し寝りして下されと不禮を説て横なればハイ浮枕  
と姉のお雪がそれ者の果浮風邪めすなど絹布の夜着そつ  
と懸れば次郎吉が憚りさまと云舌も廻らぬ計りみ酔臥し  
が咽の乾くよ眼を覺し見れば何時しう日さへ傾き申の下  
刻おなりしう打驚きて起上り二階を下りて小用をたし  
口な酒き皆々よ暇乞し立出んとしけるを七兵衛無理お  
押し止め先刻浮腫も上らぬゆゑ珍しくの有さじけれとも  
近所の事ゆる與兵衛すし浮一つ何卒召上つて下されと大  
皿よ盛り鮮を肴酒の燗さへ程と計らふお雪が酌み辭み  
難く二つ三つ猪口を受漸々にして暇を告れば七兵衛の左  
様ならバ最う浮出よ浮座りますう生憎菊松の貴方が浮休  
みありし時彼丸善の大番頭が淺草へ寺参りよ来られしと  
て菊松が世話となり居る船宿より迎ひて参り無理お連れ  
れ浮宅までも浮送りや甲斐もなき跡の年寄女子のみ何卒  
菊松が歸るまでと止むるよ次郎吉の宿更に住所定めぬ己  
が家送られての面倒と親仁さん是非二三日の内よ此方へ

なれと彼時頂きました鮫の溜焼流浪の後ハ薬も喰した  
事なき賜物ゆる其次の日少々づ喰させたのケ藥の利目  
驗が見えてり一枚紙を刺如く日増癒る病人と俱よ我等  
が身にまつはる貧の病も彼金子よ半年餘り樂々と暮して  
居りしよ是なるお雪が幸ひよも小網町の丸善とて紙問屋  
の浮主人お身受されぬひ者と云ひながら此家も買て賃  
ひ今での親子氣苦勞なく旦那が別よ月々の下され物ハあ  
らずとも活計の出来る小間物屋夫よ今でのお雪の旦那が  
浮宅より表向賜る分米冥加よ餘る親子が果報も貴君が  
彼時賜りし金子お解いた今の仕合思ひ廻せば有難く何卒  
一度ハ浮目よ懸り浮禮を一言上度神や佛よ招ひを立心  
願なせし浮利益よ再び浮目に懸りませ親子の者の悦び  
ハ何よ望へんやうもなくと眞實面よ願ひれし七兵衛の悦  
びあつながら女房姉弟とも嬉し涙よくれけるを次郎吉  
ハ能はせお挨拶なし頻りよ酒酌替して居しけ分量の過し  
う強く酔て其居よも絶棄るはせなれば漸々不意を納めさ

用事もあれバ浮禮がてら参ります今日ハ少し廻り道  
もある間しい體大きお浮厄介よなりました兄いへも宜し  
くと漸々其家を立出しケ晝間の酔を酒引出されたる  
微醉機嫌早爰彼所火燈頃良を包む及バサと手拭腰引  
狭み船渡前を大橋へよるゆゑなぐら行折しもタイ兄貴  
浮久しふりと脊中を叩かれ難かど振向見れば昨夜金藏が  
物語りせしお先の半次なりければ次郎吉ハ驚き胸よ釘浮  
前の半次りどうして此地へ何時来たのだと口よハ言さ少  
しも油断せぬ様子を見てとる半次の寄りそへて親分そん  
なよ肝を潰す事ハねへ一寸聞たい事があるから少し良を  
かして下せへと言つて手を捕ゆるを次郎吉ハ振拂ひ此  
犬めと言ながら半次が横面張揚り付行んとせしお何方お  
忍びしや七八人の捕方が上意捕たと左右より打んとする  
を次郎吉が彼方此方へ身を潜り飛鳥の如く一目隠大橋  
の真中まで遊延しお合圖や有けん彼方よりも捕たくと  
人數の次第よ加はり今ハ身体遊るお道なく最う是までと

次郎吉がひらりと登る橋の欄干名も大橋の川中へさんふ  
と計り飛込だり橋の上より捕人の面々上意くと釣りけ  
れども流石も積りて飛込む者もなく夫川上より川下よと呼  
ぶる聲を多し

○鼠小僧再び菊松の逢ふ事

井丸善の番頭物語りの事

扱も鼠小僧次郎吉の思ひ懸なくお先の半次も出會し兼て  
手配りありし捕方は追詰られ逃るよしなく絶跡絶命身  
を捨てて浮む瀬もあるやと飛込む大川の底いと暗き宵  
闇は咄嗟と己れも覺悟あし腕を任せて水中を遊ぎ廻れん  
と思ひしは豈計らんや水も浮みし猪牙船一艘橋の下を潜  
り出し其中へ飛落て是のと驚く次郎吉より不意と打れし  
船の客船機押切る船頭が森耳お水と仰天なし是はくくと  
夕沙を引れて下る船あしる早一二町行過る折次郎吉の手  
を付てもし旦那無々仰天なさいましたらうと私しは今人  
違ひで盗人とされ腹の立ま、捕方よ手向ひなし罪はなく

ども夫はどの所置を受けるか否さよ苦し紛れ飛込ました  
を思ひ懸なく幸ひは貴君の船へ遠近のたつきも知らぬ此  
聞さ捕人の衆が私しを川下より川上よと尋ねて居る那の様  
子何卒迷惑で有りませうと助けなされて下さりま  
しと實を嘘とを打交て頼り合合たる船の客も心能き人  
と見え夫のまア飛込事でありました併し私しは乗て來  
た船の中へ飛込むといふも何う深い縁のある事世の壁も  
も弱鳥懐中入時の鐘師も是を捕すとやらましてや今日  
の佛參の歸り道決して心配なく同船なさいまし併し私  
しの直お永代り上りますと那の通りわやくと捕方衆  
が馳廻る様子彼處へ船が若られぬゆゑ浮前へ何處へ出  
だり道順の能い處まで送らせませうと情けも深き其詞も  
次郎吉の打悦び實も有難う座ります何卒高橋邊まで行  
て下さるは大概捕方の目も懸るまいと思ひますうら何  
分宜しく浮迷惑機なぐらと頼みつ、船頭の方を見遣若  
衆様飛込厄介者や對込で捕前も肝を固しなまつたらう

思忍して下さい殊に餘慶の手間と懸て浮氣の毒だぐ滑折  
の浮禮の致しませうらと言ふ船頭の星明お良を見て浮前  
さんの旦那ぢやアありませんらと云れて次郎吉の傍々見  
遣り菊松さんで有たり是はくくと計らずも再び逢し嬉し  
さの我身おせまりし危さを通る、便を得たればなり其時  
菊松の機をわやつりながら旦那へ先程の丁度浮店の大番  
頭さんご漢草へ佛參も浮出なさるは付私ご毎も浮供をそ  
る處より今日も親方うら使が來たので浮前さんご浮休み  
の時浮取を告すに出懸ましたた浮前さんの未だ内へ浮出  
なさるうと思ひの外飛込災難も浮達なされたなど云  
つ、も船を高橋の方へ漕行ふ彼菊松の店の番頭が菊や手  
前へ其浮方を存じて居るうと云ふ菊松のハハ知て居る處  
ぢやアありません浮前様へも浮咄しして浮存じの五年以  
前大雪の時彼金子を下されし旦那で浮座ります今朝私し  
が久し振れて雨國で浮目も懸り親や姉へも浮禮を下させ  
度無理も相生町へ浮連やた今日の中再び浮目も懸ると

云も能く深い浮因縁情請た浮恩報じ浮前様への私しは  
一生の浮願ひ何卒此旦那不都合のない様お浮計らひ下  
さるやうと身も引受け菊松が頼みも番頭小腰を打とん  
ら手前が早晚や咄した其浮方う夫のハハ何しる貴君も浮  
怪我がなくて結構の事と云つ、次郎吉も向ひ不思議の浮  
縁で浮目も懸る私しは小網町丸善の番頭廣左衛門とす者  
浮前様が浮深切の毎度菊松親子が浮取をすて悦んで居り  
ますと叮嚀の挨拶も次郎吉の體も手と付て是はくくと私し  
事の當時高橋邊に住居します次郎吉と云んとせしと思ひ  
うへして心も願頭も鼠小僧次郎吉とて最早浮上の機も付  
し賊名を流石も云ひ兼てハハ幸藏とす者浮見知置れ下  
さるやう夫も付ても今宵の危難を浮救ひ下さつた有りけ  
たさ實も親とも思ひますと云ふ廣左衛門何思ひけんら  
くと涙を流し扱ひお前さんも幸藏と云ななるう始めて  
逢ふた浮方よ老の浮言浮聞せやも異な事ながら取を云ね  
ば譯す私しは武士の浪人何をするにも商人願す其日く

の事しも立兼て夫婦の中の一人子を捨てたが其子の名も矢張幸藏守袋へ書付置し今で何と名乗て居りま  
 すり三十四五年も逢ぬ悴生て居る事やら死だ事やら此頃  
 不思議や其子が身の上聞て見れば悲しひうな彼は今盗人  
 となり所々を吟行居るとの事捨てた子ながら血を分し實子  
 で見れば知られず如何う一度に逢ひたいと今日も佛堂よ  
 り歸りけけし佛祖師様へ参詣しては百度踏で参つたも子  
 ゆゑ迷入親心それや是やで斯まで遅く成たる船の中  
 始めて目目に懸りし貴君へ斯様の事をやの菊松より聞  
 たは深切の御方ゆゑ奥底なしと申す云ふ次郎吉御所  
 事との思へども盗みするとい我も同じく名も幸藏と云ふ  
 を聞扱も似た様な者と藤左衛門が心を推し何と應へもな  
 かりし船の高橋へ着しゆゑ次郎吉の藤左衛門より厚く禮  
 を述べ何れ宅への別段に菊松さん案内頼みは禮も出ま  
 すると懇切な暇を告げ又菊松も又の逢瀬を約し現在實  
 の我父なる紀伊國屋藤左衛門とい互に知らせ知られずし

て別れけるこそ本意をけれ

○次郎吉が案内旅行を告る事

井實父藤左衛門へ逢ふ事

斯て次郎吉の高橋より上りしは是非とも今宵の高輪の我  
 家へ歸りか案内身の上跡の難儀の懸らぬ様始末をなして  
 置みやと高輪藤左衛門に見覺え置たりし古着屋にて田半甲  
 懸又門の番太ふて草鞋を調へて人目を掃入旅装束の先へ  
 の頬冠りま門をよて種々と問も高き未代橋を素知らぬ  
 顔で打通り素より達者の早走り駕籠より早く亥の刻過る  
 頃我家へ歸るよ案内不慮なれたる次郎吉が十日廿日の  
 夜泊りゆゑ外苦勞のなさを委ね異なる旅出立し不  
 審な草鞋の紐も俱々解き火鉢の側へ居直る次郎吉  
 打向ひ何で御前さん旅の支度をして御出なさいませ  
 最早御歸りなされたのり夫ども是より御立なされるのり  
 問ふ次郎吉の態と笑ひ御前も悦んで與な實の今日下谷よ  
 ころ付て居た所漸々親の有家が知れト遠方だて翌日の

詫ながら逢は行積りと何気なく云ふ案内打悦び夫のマ  
 ア能い御咄しとして何所で御座いますと云れて次郎吉差  
 支ひし口より出任せよ何さ京都寺町通り佛光寺門前尾  
 張屋兵衛と云者の内へ居るとの事よ兼て赤坂宿めて  
 悪者掛八作七ヶ旅人を殺し奪ひし金の包紙二百兩を騙り  
 取りし其名よて常よ心に忘れぬゆゑ當座連れ云くるめ  
 何れ百廿里もある所の事なれば日數も長く懸るだらう就  
 て己が留主中万事の翌日谷八さんへ頼む積りと云ふお  
 峯の心の中夫と思ふ次郎吉が親を尋る長旅ゆゑ俱に嬉し  
 く思へども逢り隔てし上方と此のうらゝ女衆の行ぬ先  
 くら降る日を尋ね杯して初云やうお前さん何時七里ケ  
 濱とやらで敷つて御遣なされた三吉さんとやら今日貴  
 君を尋ねて参り内々御咄しがあるよ云ましたが留主な  
 れば又翌日参りますと申て彼旅館屋の御内室さんの處よ  
 今夜泊るとの事ですと縁と云もの何處もあるう知れ  
 ないもので私しの親仁さんとい元江戸で懇意の處丁度三

島宿で逢ひ互ひにお前さんの咄しが出たお付品川の谷  
 八さんの世話で高輪に住つて居るといふ事を私しの親仁  
 さんより聞たこの事又親仁さんも此頃ハ博奕を止て大壯  
 幸抱して私しの御母さんの甥を養子として女房と持せ三  
 人して稼いで居るとやら是非御前さん一度江戸へ來  
 て逢ひ度と云て居るさうですと云ふ次郎吉夫の何  
 しる結構だそんなら翌日三吉が來たなら殊も奇たら一處  
 道中してお前の家へも寄つて來やう鬼角今夜ハ寝て  
 翌日の事に仕様と其夜ハ俱に打伏て明る朝次郎吉のお峯  
 の酒肴の用意をさせ彼十生目村の三吉が尋ね來るを待折  
 柄門口よりハイ御免なさいと云ふお峯が離れだへと立出  
 見るよ一人の若者が微笑ながら且那へさう仰やつて下さ  
 い菊松が参りましたと云ふお峯が挨拶も待たず次郎吉が障  
 子越し菊松さんよりさうして私に居處を知て來なすつたと  
 いひつ、立出れば菊松の腰を屈め且那へ昨夕の番頭さん  
 が御前さん少し御咄しがあるう一寸來て下さる様かと

此先の料理茶屋へ出て出なされるから直私しと一所へ  
出下されましと云ふ次郎吉の不審かしまさる菊松が半  
次の如き大ふの有まじと心に思へども昨夕不慮し事ゆ  
ゑ其儘身縮ひして短うけれども旅籠差を腰よぶつ込用  
意の金を懐中してお峯へ向ひ前より咄さなうつたが作  
夜兩國で私ぐ世話も成た番頭さんぐ用が有と云うら行て  
來若も三吉が來たなら一盃飲して待せて置て與な夫に  
涉前此間預けた百兩の金の用意金として涉前か上るう  
ら大事仕なせへ又後咄しも仕様と云つ菊松と立出  
る次郎吉の心の内よ若も是限お峯へ連れぬ仕儀も至  
るうと餘處ながらの暇を我住家と云なぐら外を憚る類  
冠り人目を包み菊松が案内運られて料理茶屋に到りし  
よ持設けたる藤左衛門は是へくと差相又菊松を呼何  
やら騒ぐお打點頭て其座を立膝の二人の差向ひ次郎吉の  
昨夕の禮を述今朝又早く來られし仔細を問ふ藤左衛門の  
暫し次郎吉が貞を誂め居たりしう體然と涙を流し聲を澄

めて是幸哉今更千万云地も甲斐なき事と云なぐら己れ  
の如く憎い奴斯云バ合点も行まい此身の己れが實の親  
紀伊國屋藤左衛門と云者我等が素生己れを捨し替し語り  
の次第の夫ども知らず大略を昨夕咄して聞せたるが己れ  
を捨て其時の肌さへ寒さ如月の聞き宵間を或家の其軒下  
へそつと置き泣き立なバ其家よて氣付拾ひ上げ與んと  
待内も程なく來懸りし往來の或る人々見止て拾ひ上られ  
し何方の人とも知らず居りし終置島町とい興の先の  
江川町も名も高き風ど仇名も人の知る吉兵衛親分が養  
れ實子の如く寵愛され自ら乳母や子守やら大家へ生れ  
し子の如くものせらるると聞もしつ又辨ねども忍びて  
見もしつ夫婦が悦びの何と聲へんものもなく只々吉兵衛  
伊夫婦を朝な夕な伏拜み其世渡も裏家業何本伊夫婦よ  
別條なきやう又二ツの虫氣なきやう我子の成長する様  
ふと神佛を念じつ、夫のみ思ひて日を送りし己れが十  
四も成し秋女房の長の頼ひも終業生叶はずして亡りし

丁度今年が廿三回忌昨日が祥月命日ゆゑ寺参りお行し  
戻り道計らず飛込む船の中物語りせし己れをバ我子なり  
とい知らざりしが彼時橋の上の様子といひ且己れが詞  
の跡先どうも怪敷思ひし故菊松も云付て夫どのなし跡  
を付させ住所を見定め駕籠で飛せて今朝來りしも最早嵐  
小僧次郎吉と配符の廻りし己れが體知らぬ時の兎も角も  
菊松より年頃面ざし聞バ備わ我子ぞと知れバみすく召  
捕る、を知りつ、捨て置れぬの我の兎もあれ養育の大恩  
請し吉兵衛殿へ惡き耳を聞せまじと迂闊くして居る  
己れをバ還さん爲來りしなりと懷中より金百兩を取り出  
しサア是を路用お少しも早く何國へなりとも身を忍びて  
うせ一度の天命通れぬ惡事の科召捕る、夫までも一日な  
りとも生延よと始めて明す眞實の親藤左衛門が物語は次  
郎吉の仰天なし扱の吉兵衛様伊夫婦の我實の親よての無  
りしり重ねくの不幸の此身又憤しき實の父今の豊くよ  
暮さる、伊様子なれども其昔し子と捨る程の伊難難思ひ

廻せバ勿体なく空恐ろしき我身やと橙と伏臥其時時  
左衛門の眼をしべた、さ今更何を云ても詮無き事手前が  
旅出の餞別は逢する人があるぞよと後の唐紙引明る中よ  
の吉兵衛夫婦の者俱涙お暮居るふぞ次郎吉の二度仰天  
何と詞も無りける

○藤左衛門立身の事

井吉兵衛夫婦身分の事

次郎吉の實父紀伊國屋藤左衛門の貧苦お迫りて其實子を  
捨る程なりし如何成仔細よて丸善の支配人と成て且吉  
兵衛夫婦を今次郎吉よ引合せしやと云に藤左衛門の次郎  
吉が十四の秋女房の死亡りしより暮しの立兼るより事本  
公して身を立んと世帯を仕舞或人の世話ふて小網町の丸  
屋善四郎といふ紙問屋へ奉公し遣入多人數の飯俵をして  
律義一方に勤め居りしが流石も大家の主人善四郎が見所  
の有者と店の手代とせし自然商賣の道に備はりしよや  
商ひ先の評判能く次第くよ出世して終おの店の支配人

と成て箱崎の宅を携へ下女を遣ひ店へ通勤の身分と成し、當時の善四郎の幼き時より馴染といひ親善四郎よりの遠言にて我亡後ふの親とも思ひ詞を背くまじと云れし程、正直律義を見拔れし藤左衛門なれば店の番頭手代に更なり丸善一家の者も鹿客おせず殊も人々々妻を迎へられよと進めし藤左衛門隨はずして云様我貧苦よ迫りし時艱難を併せし妻の世を去今先代の浮主人の浮蔭を以て大家の支配人と迄又出世をせしよ今新たお妻を迎へ安樂を俱ふせん事、亡妻へ對し我眠る所なりとて二番番頭之二男を養子として相應の所より嫁を貰ひ親子俱々當主善四郎を助け奉公怠り無勤め居し、今の善四郎も利口の者なれども若氣の至り不圖吉原松葉屋の松山と馴染雨の降夜も風の夜も通ふ扉を内として家を外なる振舞、藤左衛門の大驚き種々異見をなし、松葉屋へ至り松山が様子を探りしと、登計らんや泥中の運船態といひ心立といひ類ひなき女なるよを藤左衛門大に感じ早速善四郎が



母親と相談なし松山と身請して親花澤七兵衛が住居蛤町を立退せて相生町へ所帯を持せ表向當主の妾となしけるよど主人善四郎も殊の外藤左衛門が計らひを悦び且恥ろしく其後、月の中より二度相生町へ行を樂しみとして家業を勵みぬ夫の扱置藤左衛門の當時安樂の身となり己も我子を養ひ呉る吉兵衛が宅を知ると雖も捨し我子の養ひ親へ何と云ひ寄る手術もなく折々様子を聞か一年吉兵衛がなせる博奕の最嚴重となりしり、吉兵衛の家を仕舞何方へり逃去しと聞本志なく思ひ居し、又吉兵衛夫婦の彼時江川町の住居を手早く取片付成田海道の臼井宿へ懇意の者が有ゆる其處へ尋ね行三年程忍び居りし吉兵衛夫婦俱々大病を煩らひ何事も皆他人の手にてする事ゆゑ日々の入費の夥多しく半年計りの中、有金と遣ひ果し幸ひ二人俱々病氣の全快したれども手振の編笠一蓋となり何國までも黄金乏しければ、交りも薄しとやらにて曰井も住居難く殊ふり江戸の懐かしさよ夫婦建立來りし

が吉兵衛も今の貧苦の身の上なら詞を下げて以前の恐意の物を借んの好ぬ生質ゆゑ本所業平橋の近邊の裏家を借受夫婦とも僅の内職をして貧しく其日を送りし、去々年の暮藤左衛門の計らず吉兵衛を見受し、何共身形の宜しうらね、扱の當時貧しく暮して居る事ならん我子の兎も角吉兵衛夫婦を見繼いで恩義を報へんと彼が跡は付業平橋の住居に至り吉兵衛夫婦を改めて對面なし我身の事共を物語り是非とも、伊兩人の身の上の我等又任し給へと言けるよ、義心強き吉兵衛ゆゑ強て固辭せし、藤左衛門の涙を流し立去氣色更もなく我捨し子を養ひ給ひりし、伊兩人の主とも親とも言べきなれども、願ひく我等一人身よて當時の養子の外親類もなき者ゆゑ、何卒今より兄弟分となり、咄し合手お成給へと事をわけ理を盡し種々どき口説よ、吉兵衛も藤左衛門が眞實の心を悦び、其意を任せけるよ、藤左衛門も俱に悦び早速其世帯を任舞せ我家より一二軒隔てし小家を買求め夫へ居らしめ、月々の分米小

遣へ更なり我子又此頃迎へし嫁も我眞實の兄ゆゑふ  
 日々機嫌を伺ひ大切よせよと言諭しければ若夫婦の者も  
 藤左衛門と同様敬ひ仕へける扱ひ吉兵衛夫婦の思ひ懸  
 なく安樂の身と成て何不足のなれども廿餘年手元有  
 てし幸藏の事のみ互ひ言ひ暮し其便りを問度なす事も  
 なく自分の樂隠居の身の上ゆる日々所々の神社を禮拜し  
 幸藏も廻り逢ふ事のみを願ひしは蛇の道へびとやら此  
 春計らず聞し大坂の強盗泥辰が事其渠が手下の白狀は江  
 戸出生まで以前幸藏と云し者先年上京し三ヶ年餘りも  
 大坂に居て泥辰と深く交り所々の大家へ忍び入大金を奪  
 ひ古郷江戸へ立歸り由具は上しとの事風の傳りも聞  
 しゆる吉兵衛夫婦の大驚き其次郎吉とやらん正しく  
 我子幸藏も疑ひなしと思ひ去る惡業をなせし上の天命通  
 れず上の浮厄介となるの必定なれども切て存生の中今  
 一度貞が見度と子と思ふ親心最早六十の坂を越し老夫婦  
 が髪を下し無理なる願ひとの雖も神佛も祈誓を懸今一度

對面おすまで幸藏が身を守らせ玉へと念じけるが神佛  
 の老の心を憐れみ玉ひしり次郎吉が危き大橋の難を藤左  
 衛門に救はれて吉兵衛夫婦は對面するも實にお因縁の然ら  
 しむる處成すや扱も次郎吉の吉兵衛夫婦は面會なし何と  
 我身の不埒を詫ん手術もなく吉兵衛の漸々お涙を拂ひ其  
 後自分の成行且の實父藤左衛門が年來の正直の行ひなど  
 物語り今更替す詞ひなし只何事も藤左衛門殿の心は隨ひ  
 今一度身を連れ併し併し聞し昨夜の騒ぎ品川始め其外  
 とも江戸の出口の賑かし捕方の衆が固め居らんと歎息な  
 せし其折しも遠たしく唐紙明て入來る人あり人々驚き  
 誰うと見れば別人ならず船頭の彼菊松もてありたりき  
 ○次郎吉次郎吉の自訴を聞事  
 并三吉命お替て圍みを解事  
 其時菊松の藤左衛門に向ひ且那が浮差圖お依て表の様子  
 を伺ひ居りし物騒しき通りの人聲何事うと走り出て聞  
 ば今し方鼠小僧次郎吉と名乗て浮繩を受んと品川を固め

て居らる、役人衆へ自訴したゆゑ諸方の者が聞傳へ夫を  
 見お行との事と云て又次郎吉お向ひ聲を密め若旦那今  
 中譯ゆゑ最早諸々の固め緩むでせう東海道の道を嫌ひ  
 一刻も早く立退なされて何卒恨を浮違者よと涙を含て  
 菊松が夫と云ねと心の中淺間敷次郎吉殿が眞實の心は似  
 氣なき惡事と跡の詞も吁咽短き袖を絞りける次郎吉  
 の菊松の手前も面目なく俯向きて居たりし頭を上げて  
 藤左衛門お路用お渡されし金子を戻し今更何と申譯も  
 なき此身最早實父と養父母お廻り達し上りら一時此場  
 の立退とも浮歎き懸ぬ様ひなし他國で自訴して今迄の惡  
 事を償ふ覺悟の處計らず今聞次郎吉と我名を呼て訴へ出  
 し我を助けて立退せんと計らひ呉し者なるう夫とも上  
 の役人が事を偽り油断させ我を釣んとす業う何の鬼も  
 あれ何れも様の仰よ任せ一時此場を立退さままが是が  
 最う今生の浮暇乞親お先立を不孝といふ況や身から作  
 りなす惡事の爲は首取る、人非人の大不孝浮免し下され

まし夫お付今頂く金子は代ての浮願ひの我等が大坂より  
 戻り道小田原宿まで不便さの餘りお江戸へ運來りしお峯  
 とする女は吉兵衛様も浮存じの虎松が三島宿の與左衛門  
 方へ入夫となりし其與左衛門の娘もて彼虎松の心能ら  
 ず親無ものを費んといふ様子を聞いていとしさよ金と殘し  
 てお峯を伴ひ俱に誘ひ五年此方夫婦と成て居りままが今度  
 の高飛する所存ゆる昨夜の我家へ忍んで歸り餘所ながら  
 の暇乞跡の万事世話なる谷八といふ者も渠が身を頼ま  
 んと思ひし其暇もなく菊松さんお迎ひお來られし今日  
 の仕儀繋る縁とて彼が身お罪を懸るの不便ゆる我手を切  
 し離縁狀是此通り認めあれ何卒渠も浮渡し下されて  
 今の父與左衛門も此頃お心も直りしとの事慮外ながら三  
 嶋宿までお峯を浮届下され度猶も氣お懸るの我名を告て  
 自訴した者は逆も偽りならず眞實の人おてあらば夫が身  
 の上蔭ながら宜敷浮願ひお上ますと今更名殘の盡ねども  
 又各々罪り、らば不孝の上の不孝を我と心を勵して



立出る後影是が此世の別れかと思送る三人の老人が涙を呑んで忍び泣き松も門口まで送り出随分俱々涙を大切ななされましと云つ、用意の管の笠面を包む其為と渡せバ次郎吉押頂き菊松さん何分跡と宜しくと暇乞さへそこへ立出たれと次郎吉の素より思慮の深き者ゆゑ憫へて他國へ走らんとして却て江戸の出口まで召捕れんも計り難しと思案なし彼暫願寺店に住む梅本のお園親子の心立の能き者ゆゑ暫し彼所の二階を身を忍び世間の様子を伺へんと淺草さして忍び行ぬ爰又次郎吉が妻とも云へき彼お峯の次郎吉が嘘言に親は逢んと言たるを異となして旅立の支度を俱みなしつ、も今朝約束の三吉が来るかと待ちし其折柄菊松の迎ひは次郎吉が立出し跡は何と無心も浮す居たりしよ入來りたるの三吉よて次郎吉様の歸られしやと言へるをお峯の座敷へ通して昨夜歸りましたからお前さんの咄しをした處そんなら今朝の浮出りと待て居りしや云云とて迎ひの者お運られて直此先の料

理茶屋まで行れしゆゑ少しの中待て下されと酒肴を出し進むるお三吉一人思案して居たりしがお峯も向ひ未だ次郎吉様の浮歸りのなきの何り浮用多の事と見えす私しの後程参りますと止るを無理と暇を告げ其所を立出し品川を固めらる、捕方の役人の詰所へ到り私しは昨夕大橋まで逃去し鼠小僧と仇名せる次郎吉よて五年以前大坂表まで當四月浮仕置を受し淀辰と俱よ所々へ忍び入大金を奪ひしもの今出口の浮固め厳しくて逃る事も叶はず天命を知る故も則ち名乗出ひ問浮繩下さるべしと言けるは捕方の面々の扱の神妙の至と早速繩を懸町奉行所へ届け三吉の傳馬町へ送られける抑々三吉が此度江戸へ下り斯る計らひをせしと言ふの彼の七里が濱よて次郎吉お助けられ悪心忍ら善心とあり貰ひし金子を懐中して古郷十生目村へ立歸りて近隣の人を騙み母親へ訛事を入しよ待て待たる三吉が心を改め歸りしと聞母の悦び一方ならず早速家へ入しお三吉の生れ替りし如く親を大切よな

し彼次郎吉より貰ひし金にて田地を買求め晝夜農業を勵しが母の殊更打悦び是迎も我家に一夜を借し次郎吉様の浮惠み返ましくも有難しと嬉し涙よ昏く親より悴三吉の命の親ども思ふ次郎吉が事片時も忘る、隠なく朝夕神佛を神拜し只々恩人の身よ恙なき様念じたり然るも去年の暮母親の少し煩らひしや定まれる命數もや死亡ししやと四年此方三吉が孝行を盡せしゆゑ近隣の者も歎きの中お三吉が母の果報者と言あへり三吉の母の佛事を懇切おなし我歸りて次の年迎へし妻お男子を一人設け名を三之助と呼て此年四歳なる小兒を寵愛して夫婦睦しく農業をなしけるが今年三月大坂よて淀辰といふ強盜が召捕れ其手下の白狀お依て江戸出生の鼠小僧次郎吉と云者三ヶ年程大坂よ住み所々へ忍び入て大金を奪ひしや淀辰等と俱お圓覺寺へ押入大金を奪ひ住持を殺したる後江戸へ立退し由をア上ししうバ其筋おて見知人を添て江戸へ遣ひし詮議すると聞扱の母親又此身を助け呉し鼠小僧とい

強盜なりし何の兎もわれ我爲よの命の親何卒江戸へ行て此事を告知らせ身を遁れさせんと女房よの夫とて言ず江戸の恩人お久々打絶しゆゑ夫を尋ると跡の夫々よ手當をして九月の始め國を立出し東海道を下りしお計らず江戸よて以前見知りし虎松よ逢ひ次郎吉が住所と聞急ぎ品川へ來り圓戸谷八を尋ねお峯の家を問ひしよ次郎吉の留主なればお峯が兼て知る旅館屋お其夜を明し其翌日鼠小僧といふ強盜捕方を退れ逃去ししうバ夫を召捕んとて出口へ捕方の固め厳しきと聞今朝も次郎吉よ逢ねと思の爲お身を捨て固めを解んとて訴へ出しとなり

○次郎吉高崎の忠五郎を頼む事  
并夢を信じて江戸へ歸る事

悪事ゆなせと次郎吉が年頃諸人を憐れみ救ひし其善根の報ひおや危き場所を度々通れ實父養父母よ廻り逢今心よ自訴せんうと思ひしうせ眼前親よ救を懸るの忍び難き事ありと高輪を立退彼梅本のお園の方へ忍び行き其後

の所々の風聞又ハ江戸の出口の固めの様子を伺ひし  
 今日品川にて鼠小僧といふ強盗召捕れ此由所々へ通達  
 有し付捕方の人数引取しと噂となりなる故去バ  
 此間通れ去んと其夜の明方園の家を立出兼て上州高  
 崎忠五郎とて無二の友達今での彼處まで能き顔の博奕  
 打と成しと聞彼を暫し身と頼んと申仙道を志ざして行し  
 小二日路を経て高崎に至り忠五郎の家を尋ね面會して密  
 小我身の悪事を告當分匿ひ呉よと頼みし忠五郎の心能  
 承知なし我別宅へ匿ひ置き何不自由もなく世話致し呉し  
 りバ次郎吉の安樂も半年許り高崎に隠れ居し只々心か  
 懸る事江戸の親達なまじ親子の名乗られたれ壁お耳  
 ある浮世の習ひ若其筋の耳に入親お難儀の懸りせぬ  
 と夫のみを案じ暮し居りしに時しも四月の卯の花下し四  
 疊半の小座敷に徒然詫る獨り居お忠五郎が貸置し讀本と  
 見て有し夕睡け付て其儘お眩枕寝るともなしと睡りける  
 且那くと播起す者あり次郎吉の目を覺し離りと見れ

お思ひ懸なき船乗の菊松なればどうして受へ來たど問よ  
 菊松の涙を流し何ぞや且那が高輪を浮遊なされた其跡へ  
 どう聞付たり捕方の役人々大勢來りて吉兵衛様浮夫婦と  
 大番頭様と高手小手お縛しめ次郎吉と何國へよがした尋  
 常は白状せよと責問るれども素より知らぬ浮身の行衛其  
 由具おやされしが疑ひの更解す次郎吉を召捕迄の三人  
 ども獄屋へ繋んと引立られしを見聞する此菊松上よの  
 別段浮捕ひなければども大恩受し腰左衛門様縁は隠ける浮  
 二方どうりお助け申度も外手段もなき故は宙を飛で小  
 網町の浮店へ参り子細を浮知せせし且那の素より一  
 家の騒ぎ早業上へ敷敷せし浮前さん浮手よ入ぬ内  
 三人共免さじと嚴命強き上の仰夫故丸善の浮宅おて早  
 く此事と浮前さんお浮知せし三人は替る一人の命捨て  
 親浮の愛目を救ふ様させ度ものと心配有て所々へ手配な  
 し尋らる、其中お取分私しお彼方を見知り人能く尋ねよ  
 と且那の浮詞夜の目も寝ずは浮行衛を尋ね中りし此場の

仕儀一刻も早く江戸へ浮出なされ親浮達と浮救ひなさる  
 やう最早私しは浮目お懸りし其子細を浮店へ早く浮知せ  
 ます故此儘浮暇申ますと行んとせし菊松を暫しと次  
 郎吉押止めそんなら私が彼時お逢た計りで何れも様々左  
 様な憂目お懸りし知り知ぬ事とて迂濶くと月日を送りし  
 勿体なさ直々私しは行程お少し待てと止めるを否と菊松  
 振拂ふ袖がちぎれて次郎吉の道と後へ倒れしと咄嗟と一  
 聲叫ぶ折兄貴くと播起され次郎吉驚き目を開くは是轉  
 ひ懸の夢として讀懸し本の未と手お持てあり今起せし  
 此家の主人忠五郎おて兄貴と申してうなされた餘り浮前  
 が寝言お泣なさるら夫故私お起した何な夢を見あす  
 つたと問よ次郎吉様くと仔細を告今より江戸へ赴き  
 櫛子を探りて今見し夢が正夢なら直は名乗て親達を救  
 んと所持の金子三百兩を取出し猶忠五郎お言ける此  
 金の私お用心よと持て居たれども今用なき金子ゆゑ  
 浮前お禮として二百兩を上まそら私お浮仕置を受たど

聞たら線香の一本も立て下さい半へ行お少し手土産  
 も入だらうら百兩の私お持て行ますと言つても暇乞な  
 し身仕度するお忠五郎の何も兄貴夢の五臓の勞れとやら  
 平生氣おして居なさるらそんな夢を見たのだから江戸  
 へ行の止ししてマア落付て居なさるが能い夫ども江戸の  
 事お氣なるなら子分を遣て探らせ様と頼り止るを此  
 方お固辭し二百兩を無理お渡し夫より酒宴さへそこ  
 お申の刻近きお高崎を出立して素より早道の次郎吉お  
 七八里を行て其夜を明し其次の朝も早く宿を立て道と急  
 ぎ大宮驛に來り今宵の此宿お泊らんと此宿の旅人宿を尋  
 るお柿色の大暖簾お柳屋と染抜し遊女屋の内より一人の  
 女子が次郎吉を若々と呼止るお此方お不審ながら振向さ  
 見るお年こそ少し盛の過たれいと美しき遊女が打笑な  
 ら聞がしく出來り浮前さんお久し振で浮座りましたねへ  
 今夜は是非私しの所へ泊つて下さいと袖を捕へ放さぬ  
 と次郎吉の頰を顔を能々見るは像て大坂へ出立の節芝田

町にて一時迷ひの思を晴した彼信濃屋の女房お松なるよ  
この折悲しと思へども振放し行んふり却て悪りなりんと  
お松が調ひ随ひ柳屋へ上りしよお松の悦び他事なく響應  
す故次郎吉も十分酒肴を誂へ其夜子の刻過までいと賑や  
かまど遊びける

○奥原九一郎鼠小僧を召捕事

并次郎吉伊仕置落着の事

信濃屋藤助の女房お松が何故大宮驛の遊女に成しといふ  
に次郎吉が大坂へ赴く折姦淫なせし其跡を以て離言ども  
なく評判となり十日程立て藤助が歸り來りし所早晩これ  
を聞きより大お怒り百兩めて吉原へ賣れ強面月日を送り  
しけ流れく此大宮宿へくら替せしなり扱もお松の我  
身の悪事と思はず只己れを欺きし次郎吉を深くも恨み居  
しよ今日計らず見懸しゆゑ表向の色で仕懸十分酒を進  
め次郎吉を察かして後此家の主人の目明の親分おれバ我  
恨みを報せんと尾尾を付け己れけ江戸にて見知たる大

親達を縁屋に隠れおらんよの名乗出る我態なき隠れ忍  
ばんより今召捕れて初次郎殿の手柄となさば少しの親へ  
の孝ならんと心を定め捕手に向ひ人々暫らく待給へ我  
今天命を知り縛しめを受んと存するゆゑ手向ひ仕つら  
ず何れも我なす業を見物あれと言かと思へバ身を閃然か  
し三丈近き大屋根より今組子を下知なし居る九一郎が前  
へ飛下り少しも動ずる氣色なく率後役人伊纏を懸られよ  
と手を後へ廻すよ九一郎も其身軀の輕さを感じ則ち縛し  
め良を借々見るよ兼て人相書にて配符の廻りし幸藏の次  
郎吉なる故扱の我ど知て斯の縛しめられしり假令次郎吉  
の上の科人にもせよ我爲よの思人の子息にて兄弟同様の  
中なるを是の如何と後悔すれども今更詮方なく組子の者  
よ命とつゝ其宿の役所へ引せける扱も次郎吉の江戸表傳  
馬町の牢内へ送られしよ流石の名高き強盜ゆる二三日の  
中お半名主となり親方旦那と敬われ迎も無き命と思へバ  
結句氣も暗々と眼下よ見下す牢内よ彼八藏の三吉が居た

盗人の由を告しりバ柳屋の主人の大お悦び幸ひ此時本陣  
よ八州方の伊見廻り奥原九一郎殿泊り居るゆる右の由を  
や上しりバ奥原斯と聞より柳屋の主人と示し合せ召連し  
手先八九人彼是四五人柳屋の表裏を取圍み次郎吉が殿  
間へ踏込むを次郎吉の左右へ三四人を投退け己れ等が手  
よ逢我ならず刃向ふて後悔すなど有合ふ器物を取手も見  
せず投付く中庭の松の樹へ手を懸ると見えしけ忍ち大  
屋根に飛上り道を求め逃去んと宿の様子を伺ふよ追々ど  
馳集る捕方よ次郎吉の少し猶豫なし何れなりとも手透の  
方より逃去んと見下し居るよ夜も早明はなれ東雲近くな  
りしりバ人の面も儘よ見ゆるに捕方の頭人奥原九一郎の  
手先を下知なし召捕んといさまくを見やる次郎吉打驚き  
那なる捕人の頭人の紛ふ方なき我父吉兵衛殿が厚恩受し  
と聞福原重右衛門様の子息初次郎殿疑ひなし彼人の身  
の放蕩ゆる我親の厄介よなり居しけ何迎斯る身分の成  
しぞ其の兎も角もどうせ江戸へ赴きて我を見しけ信よて

るゆる打驚き近く呼て子細を聞よ委細の事を物語り只今  
爰で目お懸るの面目なく誠よ本意なき事と異心こめし  
其詞よ次郎吉の嬉し涙よかきかきくれて様子を聞バ今で  
子も有どの事夫を振捨私が爲よ命を懸て自訴して呉た其  
志ざし死んで忘れぬ致しません何れ二三日の中呼  
出しの節一伍一什を上げ上へ告歸宅する様致しすすと悦び  
つゝ述たるが次郎吉の其後南伊奉行小田切土佐守殿の伊  
番所へ呼出しとなり伊調へ有しよ彼三吉の事とや上流  
の全く狂氣でも致したるり斯る儲をや上甚だ不審千万な  
りど述けるお奉行も感心有て夫より次郎吉が爪印口書を  
取しよ彼が爲よ年来恩を晴命を助りし者日毎お奉行所へ  
出て命乞となす者引もきらき奉行もはどく持餘され助  
け度と思ひけれども伊法の破り難く江戸中引廻しの上小  
塚原よて越門の刑よ所せられける其前日次郎吉の兼て覺  
悟の事ゆゑ命の更よ惜まねども實父と養父母の事且の便  
り少なきお峯の事如何なし居るりと夫のみ心懸居しお新

入なりとて次郎吉が前へ進來りし男と見るに豈計らんや  
 船乗の菊松あるは次郎吉の夢み夢見し心地して浮前のを  
 うして此様な所へ來なまつたと問ふ菊松涙と俱に替り果  
 たる其は姿殊お翌日の浮仕置よなるとの事今更何と詮方  
 ひなければも親作達が一言貴方へ云入度も自由おからぬ  
 其浮身併し此度参りしは幸ひ船宿お間違ひ有て是非一  
 人半へ行ねばならぬ事よ至り夫ゆゑ頼んで私しを参りま  
 したいつぞや高輪ふて浮別れせし日浮三人が相談なさ  
 れてお峯さんの家へ行き貴君の去状を渡して三島宿へ連  
 て行と云れしよお峯さんの涙ながら次郎吉さんの親作達  
 と有ならは假令五年十年夫と違ずとも少しも厭ひませぬ  
 が切て浮宅へ連れて行れ縁とやの恐れ多けれども下女ども  
 思し召れ浮側へ置せ給ひれと三島宿へ歸る心り更よなく  
 彼去状を戻されしうは浮三人共不便と思はれ其意を任せ  
 て吉兵衛様方よ置れしが夫のく浮三人への孝行感心の  
 外なく且貴君が浮召捕と聞より惜氣もなく墨髪を切捨て

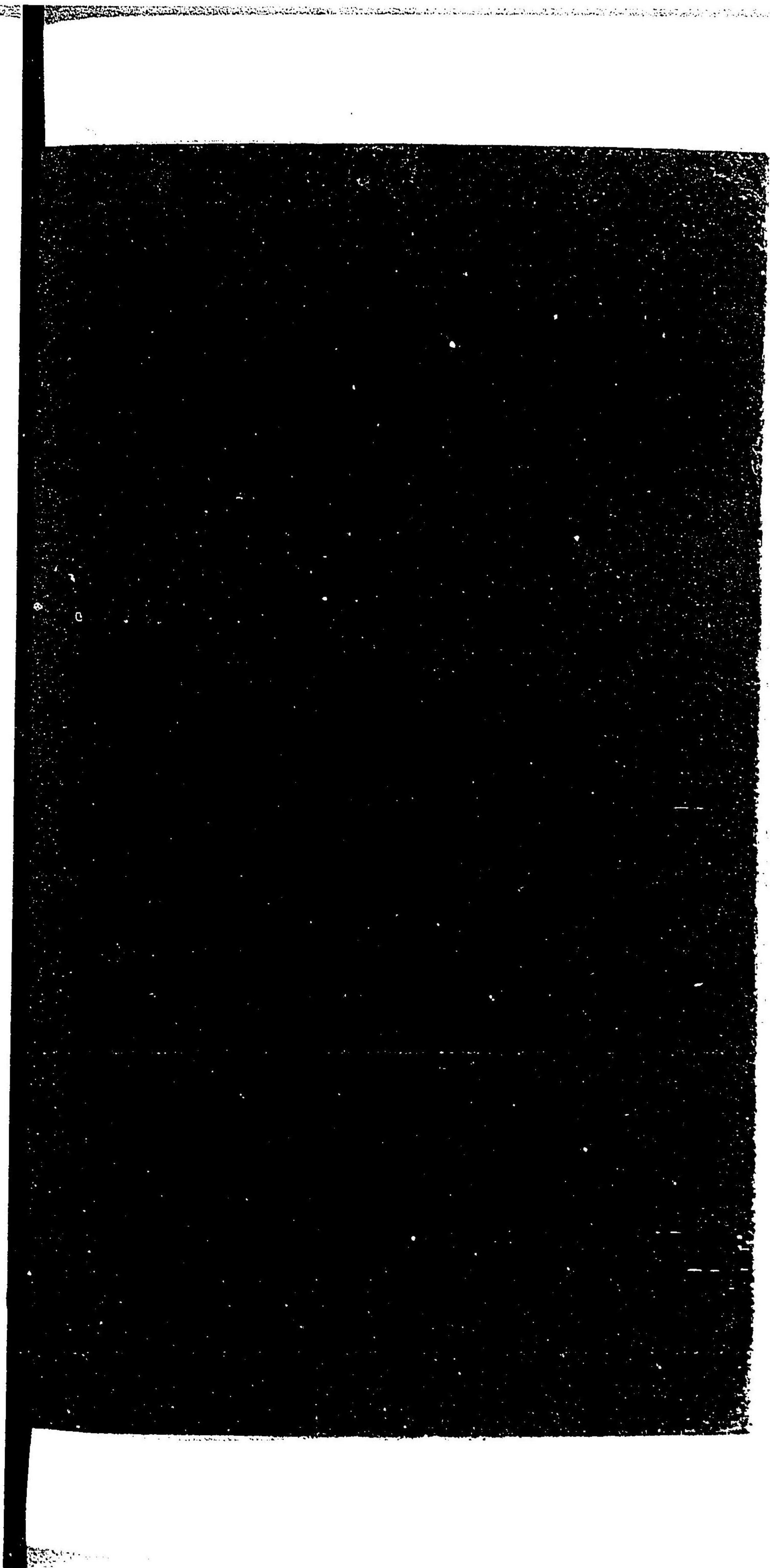
切て菩提を用ひんと仰やつて有ましたや上度と此事  
 と云へるを聞て次郎吉の親の安否を聞のみあらずお峯が  
 貞實菊松が信義今更思ひ置く事更よなしと死を待の外餘  
 念なく覺悟極めて居たりしと扱次郎吉が浮仕置となりし  
 とさ諸人打寄て死骸を中受何某寺へ葬りて跡念頃お用ひ  
 しとなり又彼菊松の出半の後はをも左衛門が養子とし  
 て遂に家富榮えしとぞ

鼠小僧實記下巻大尾  
 明治十九年五月廿六日御届別表 定價一冊金六十錢  
 編輯人不詳  
 出版人 東京深川區富岡門前東仲町十六番地 東京府平民  
 出版人 廣岡 幸助  
 東京々橋區三十間堀二丁目一番地  
 印刷發行所 榮泉社  
 社主 山内文三郎

今古 府下及諸府縣賣捌所

- |             |        |
|-------------|--------|
| 東京人形町通長谷川町角 | 武田 平治  |
| 同 日本橋通三丁目   | 丸屋鐵次郎  |
| 同 横山町三丁目    | 辻岡屋文助  |
| 同 馬喰町二丁目    | 辻岡屋龜吉  |
| 同 通油町       | 水野慶次郎  |
| 同 馬喰町二丁目    | 荒川藤兵衛  |
| 同 木挽町一丁目    | 萬 字 堂  |
| 同 人形町通り     | 具足屋熊次郎 |
| 同 神田雉子町     | 巖 々 堂  |
| 同 芝三島町      | 山中市兵衛  |
| 横濱太田町二丁目    | 伊勢屋梅藏  |
| 大坂本町四丁目     | 岡島 眞七  |
| 同 備後町四丁目    | 同 支 店  |
| 同 心齋橋平野町    | 前田庄三郎  |
| 尾州名古屋本町二丁目  | 石 版 舍  |
| 同 玉屋町三丁目    | 永樂屋東四郎 |
| 陸前仙臺大町四丁目   | 木村 文助  |

- |                            |         |
|----------------------------|---------|
| 陸前石ノ巻                      | 三陸屋 利兵衛 |
| 札幌南一條西二丁目                  | 石塚吉三郎   |
| 函館大町                       | 常野嘉兵衛   |
| 同 末廣町                      | 魁 文 社   |
| 越後長岡裏一の町書林                 | 大橋新太郎   |
| 常陸土浦田宿町                    | 柳且堂本店   |
| 同 水戸上市泉町                   | 柳且堂支店   |
| 甲府常盤町                      | 内藤傳右衛門  |
| 同 八日町二丁目                   | 西川庄右衛門  |
| 阿州徳島中通町                    | 坂 井 萬 吉 |
| 加賀國金澤尾張町                   | 牧 野 作 平 |
| 伊勢國津京口町書林                  | 郁 文 堂   |
| 靜岡傳馬町                      | 北川屋茂右衛門 |
| 同 札の辻角                     | 長谷川金七郎  |
| 仙臺國分町                      | 阿部勘右衛門  |
| 右大賣捌便宜之地にて浮注文ゆ愛顧伏て奉<br>希上り |         |
| 東京京橋區三十間堀二丁目一番地            |         |
| 今古實錄 發兌印行所                 | 榮泉社     |
| 今古雜錄                       |         |



特40  
112

091219-000-6

特40-112

鼠小僧実記 (今古実録)

栄泉社

M19

DBN-2069

